

平成13年度

久留米市内遺跡群

市ノ上北屋敷遺跡

上野遺跡

念仏塚遺跡

西小路遺跡

山ノ内遺跡

白川遺跡

庄島侍屋敷遺跡

2002. 3

久留米市教育委員会

平成 13 年 度

久 留 米 市 内 遺 跡 群

市ノ上北屋敷遺跡

上 野 遺 跡

念 仏 塚 遺 跡

西 小 路 遺 跡

山 ノ 内 遺 跡

白 川 遺 跡

庄 島 侍 屋 敷 遺 跡



市ノ上北屋敷遺跡周辺の全景（東上空から）

2000年7月19日撮影

解説

遺跡は筑後川左岸に形成された沖積台地の先端部に立地する。写真中央が第5次調査区。調査区の南側（写真左手）には、第七代久留米藩主である有馬頼^{よりゆき}（1729～1783 治世）の生母盛徳院によって築かれた「有馬藩別邸」の庭園が見える。

序

筑後地域の中核都市として発展を続ける久留米市は、古来より筑後川の豊かな水と耳納山地の緑に恵まれ、様々な文化を創造してまいりました。

人々の営みはすでに旧石器時代から見られ、現在まで連綿と息づいています。律令期には筑後地域を統括する筑後国府、文化・信仰の中心施設として筑後国分寺・国分尼寺が設置されています。また江戸時代には久留米藩二十一万石の拠点として城下町が形成・整備され、現在の市街地の基盤となりました。

このように、久留米市には数多くの貴重な文化財が存在していますが、一方では市の発展の代償として、地下に眠っている埋蔵文化財が次々と姿を消しています。私も教育委員会では、開発によって失われる、先人たちの残した足跡である文化財を後世に伝えていくための一手段として、発掘調査を行い、記録保存の措置を講じています。

本書には、平成12年度および13年度に発掘調査を実施した、市ノ上北屋敷遺跡・上野遺跡・念仏塚遺跡・西小路遺跡・山ノ内遺跡・白川遺跡・庄島侍屋敷遺跡の報告および概要報告を収録しています。本書が久留米の歴史を学ぶ際の一資料として、さらには文化財保護行政に対する理解とその普及の一助として役立つことができれば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査に際して多大なご協力とご理解を頂きました地権者の方々をはじめ、関係各位に対しまして、厚くお礼申し上げます。

平成14年3月31日

久留米市教育委員会
教育長 石川 集 充

例 言

1. 本書は、平成 12・13 年度に久留米市教育委員会が国・県の補助を受けて実施した、久留米市内遺跡群の発掘調査報告・概要報告書である。
2. 発掘調査は久留米市教育委員会が主体となり、教育文化部文化財保護課の近澤康治・水原道範・白木守・小澤太郎が担当した。

遺 跡 名	担当者	略記号	調査番号
市ノ上北屋敷遺跡（第 6 次調査）……………	白木	I K Y	200006
上野遺跡（第 2 次調査）……………	白木	U E N	200014
念仏塚遺跡（第 4 次調査）……………	白木	N N B	200019
西小路遺跡（第 8 次調査）……………	水原	N S J	200020
山ノ内遺跡（第 1 次調査）……………	近澤	Y U C	200115
白川遺跡（第 1 次調査）……………	小澤	S G O	200118
庄島侍屋敷遺跡（第 6 次調査）……………	白木	S J S	200120

3. 本書に掲載した遺構実測図は調査担当者の他、荒巻美智代・今村美津子・香月清子・柊島ミドリ・小林美佐代・高田裕子・中園敬子・宮崎すえ子・森啓恵・山科薫が作成した。また遺物実測・拓本・製図は調査担当者と、非常勤職員の小澤知美・畠中和子・米澤美詠子、臨時職員の原口靖代・福田澄子・丸山和江・森山明恵が行った。
4. 空中写真を除く遺構・遺物写真は各調査担当者が撮影した。また本文中の遺物番号と写真図版の遺物番号は同一である。
5. 本書に使用した遺構図は国土調査法第Ⅱ座標系を基に作成し、図面の方位は全て座標北を示す。
6. 本書に使用した遺構標記は下記の略号による。

S D ……溝	S G ……沼状遺構	S I ……竪穴住居	S K ……土坑
S P ……柱穴・ピット	S T ……墳墓	S X ……落とし穴・その他の遺構	
7. 本書に収録した遺物および調査に関わる記録類は、全て久留米市埋蔵文化財センターにおいて収蔵・保管され、活用される予定である。
8. 本書の執筆は各調査担当者が行い、文責は本文目次に記した。また全体の編集は担当者で協議の上、白木が担当した。

本文目次

I. 調査の概要	(白木)	1
II. 市ノ上北屋敷遺跡(第5次調査)	(白木)	2
III. 上野遺跡(第2次調査)	(白木)	49
IV. 念仏塚遺跡(第4次調査)	(白木)	60
V. 西小路遺跡(第8次調査)	(水原)	70
VI. 山ノ内遺跡(第1次調査)	(近澤)	76
VII. 白川遺跡(第1次調査)	(小澤)	88
VIII. 庄島侍屋敷遺跡(第6次調査)	(白木)	92
報告書抄録		巻末

挿図目次

巻頭図版

市ノ上北屋敷遺跡周辺の全景(東上空から)

II. 市ノ上北屋敷遺跡(第5次調査)

Fig. 1 周辺の遺跡分布図(1/25,000)	2	Fig. 15 S I 140・185 実測図(1/80)	9
Fig. 2 調査地点の位置と周辺地形図(1/2,500)	3	Fig. 16 S I 140 完掘状況(北西から)	9
Fig. 3 市ノ上北屋敷遺跡第5次調査主要遺構 配置図(1/200)	4	Fig. 17 S I 185 土層断面(南西から)	9
Fig. 4 市ノ上北屋敷遺跡第5次調査遺構配置図(1/100) 折込み		Fig. 18 S I 185 遺物出土状況(北から)	9
Fig. 5 調査区南半部全景(北上空から)	5	Fig. 19 S I 185 完掘状況(南東から)	9
Fig. 6 調査区北半部全景(南上空から)	5	Fig. 20 S K 35 遺物出土状況(北東から)	10
Fig. 7 作業風景(北東から)	6	Fig. 21 S K 35 完掘状況(北東から)	10
Fig. 8 S I 5 完掘状況(北西から)	7	Fig. 22 S K 40 完掘状況(西から)	10
Fig. 9 S I 5 実測図(1/80)	7	Fig. 23 S K 35・40・50・60・65 実測図(1/40)	11
Fig. 10 S I 45 実測図(1/80)	7	Fig. 24 S K 65 完掘状況(北西から)	12
Fig. 11 S I 45 完掘状況(南東から)	8	Fig. 25 S K 100 遺物出土状況(北西から)	12
Fig. 12 S I 45 焼土検出状況(東から)	8	Fig. 26 S K 110 遺物出土状況(南東から)	12
Fig. 13 S I 130 完掘状況(南から)	8	Fig. 27 S K 100・110・145・165・170・175 実測図(1/40)	13
Fig. 14 S I 130 実測図(1/80)	8	Fig. 28 S K 145 遺物出土状況(西から)	14
		Fig. 29 S K 165 完掘状況(北西から)	14

Fig. 30	S K170 完掘状況（北西から）	14
Fig. 31	S K175 完掘状況（南から）	14
Fig. 32	S K180 完掘状況（北東から）	14
Fig. 33	S T70・75・80 実測図（1/40）	15
Fig. 34	S T70 土層断面（南西から）	15
Fig. 35	S T70 完掘状況（北西から）	15
Fig. 36	S T75 完掘状況（南東から）	15
Fig. 37	S T80 完掘状況（南東から）	16
Fig. 38	S D10B土層断面（北から）	16
Fig. 39	S D20B土層断面（西から）	16
Fig. 40	S D30B土層断面（西から）	16
Fig. 41	溝断面図（1/40）	17
Fig. 42	S E90 全景（北から）	18
Fig. 43	S E90 実測図（1/40）	18
Fig. 44	近世墓実測図（1/40）	19
Fig. 45	S T55 全景（南から）	20
Fig. 46	S T115 完掘状況（西から）	20
Fig. 47	S T120 全景（西から）	20
Fig. 48	S T150 完掘状況（西から）	20
Fig. 49	S T155 完掘状況（西から）	20
Fig. 50	S T160 完掘状況（西から）	20
Fig. 51	縄文土器実測図①（1/3）	29
Fig. 52	縄文土器実測図②（1/3）	30
Fig. 53	S I 5・45 出土遺物実測図（1/4, 1/2）	30

Fig. 54	S I 130・140・185 出土遺物実測図（1/4, 1/2）	31
Fig. 55	S K35 出土遺物実測図①（1/4）	32
Fig. 56	S K35 出土遺物実測図②（1/4）	33
Fig. 57	S K35・40・60・65・100 出土遺物実測図 （1/4, 1/2）	34
Fig. 58	S K100・110・125・145・165 出土遺物実測図 （1/4, 1/2）	35
Fig. 59	S K170・180、S T80、S D10・20・30 出土遺物実測図（1/4, 1/2）	36
Fig. 60	S D105・135、S E90、近世墓、ピット 出土遺物実測図（1/4, 1/2）	37
Fig. 61	表採遺物実測図（1/4, 1/2）	38
Fig. 62	出土遺物（写真①）	38
Fig. 63	出土遺物（写真②）	39
Fig. 64	出土遺物（写真③）	40
Fig. 65	出土遺物（写真④）	41
Fig. 66	出土遺物（写真⑤）	42
Fig. 67	出土遺物（写真⑥）	43
Fig. 68	出土遺物（写真⑦）	44
Fig. 69	出土遺物（写真⑧）	45
Fig. 70	出土遺物（写真⑨）	46
Fig. 71	縄文土器組成図	47
Fig. 72	遺跡周辺の全景（南上空から）	48

Ⅲ. 上野遺跡（第2次調査）

Fig. 73	周辺の遺跡分布図（1/25,000）	49
Fig. 74	調査地点の位置と周辺地形図（1/2,500）	50
Fig. 75	上野遺跡第2次調査遺構配置図（1/100）	51
Fig. 76	調査区全景（東から）	52
Fig. 77	調査区全景（南から）	52
Fig. 78	S I 10 実測図（1/80）	53
Fig. 79	S I 10 土層断面（南から）	53
Fig. 80	S I 10 完掘状況（西から）	53
Fig. 81	S I 20 実測図（1/80, 1/30）	54
Fig. 82	S I 20 床面検出状況（南から）	54
Fig. 83	S I 20 完掘状況（南から）	54

Fig. 84	S I 20・D 1 遺物出土状況（北から）	54
Fig. 85	S I 20・P 3 遺物出土状況（南東から）	54
Fig. 86	S I 30 実測図（1/80）	55
Fig. 87	S I 30 完掘状況（東から）	55
Fig. 88	S K40・90・100 実測図（1/40）	56
Fig. 89	S K40 土層断面（東から）	56
Fig. 90	S K40・100 完掘状況（南から）	56
Fig. 91	S K90 完掘状況（西から）	56
Fig. 92	出土遺物実測図（1/4, 土製品は1/2）	57
Fig. 93	出土遺物（写真）	58

IV. 念仏塚遺跡（第4次調査）

Fig. 94	調査地点の位置と周辺地形図（1/2,500）	60
Fig. 95	念仏塚遺跡第4次調査遺構配置図（1/100）	61
Fig. 96	調査区全景（南から）	62
Fig. 97	調査区全景（北から）	62
Fig. 98	SK10 実測図（1/50）	63
Fig. 99	SK10 南側遺物出土状況（西から）	63
Fig. 100	SK10 完掘状況（西から）	63
Fig. 101	ST5 実測図（1/40）	64

Fig. 102	ST5 土層断面（北西から）	64
Fig. 103	ST5 全景（北西から）	64
Fig. 104	調査区南壁土層（北東から）	64
Fig. 105	作業風景（南から）	64
Fig. 106	SK10 出土遺物実測図（1/4, 鉄器は1/2）	65
Fig. 107	SK10、ST5 出土遺物実測図（1/4）	66
Fig. 108	出土遺物（写真①）	68
Fig. 109	出土遺物（写真②）	69

V. 西小路遺跡（第8次調査）

Fig. 110	周辺の遺跡分布図（1/25,000）	70
Fig. 111	調査地点の位置と周辺地形図（1/2,500）	71
Fig. 112	西小路遺跡第8次調査遺構配置図（1/100）	72
Fig. 113	調査区全景（北から）	72
Fig. 114	SK1 完掘状況（東から）	73
Fig. 115	SK4 実測図（1/40）	73

Fig. 116	SK4 完掘状況（東から）	73
Fig. 117	SD2 断面図（1/40）	74
Fig. 118	SD2 完掘状況（西から）	74
Fig. 119	SD2 出土遺物実測図（1/4）	74
Fig. 120	出土遺物（写真①）	74
Fig. 121	出土遺物（写真②）	75

VI. 山ノ内遺跡（第1次調査）

Fig. 122	周辺の遺跡分布図（1/25,000）	76
Fig. 123	調査地点の位置と周辺地形図（1/2,500）	77
Fig. 124	調査区全景（南東上空から）	78
Fig. 125	山ノ内遺跡第1次調査遺構配置図（1/200）	79
Fig. 126	SX2 完掘状況（南西から）	80
Fig. 127	SX2 実測図（1/40）	80
Fig. 128	SI1 実測図（1/80）	80
Fig. 129	SI1 完掘状況（南東上空から）	81
Fig. 130	SB8 実測図（1/80）	81

Fig. 131	SB8 完掘状況（北西から）	82
Fig. 132	SD3・5・6 実測図（1/100）	82
Fig. 133	SD3 完掘状況（北東から）	83
Fig. 134	SD5 完掘状況（北東から）	83
Fig. 135	SD6 完掘状況（北東から）	83
Fig. 136	SK9 実測図（1/40）	83
Fig. 137	出土遺物実測図（1/4）	84
Fig. 138	出土遺物（写真）	85

VII. 白川遺跡（第1次調査）

Fig. 139	周辺の遺跡分布図（1/25,000）	88
Fig. 140	調査地点の位置と周辺地形図（1/2,500）	89
Fig. 141	調査区全景（南東から）	89
Fig. 142	調査区西壁面土層（東から）	89

Fig. 143	調査区西壁面土層図（1/40）	90
Fig. 144	白川遺跡第1次調査遺構配置図（1/100）	90
Fig. 145	出土遺物実測図（1/4）	91
Fig. 146	出土遺物（写真）	91

Ⅷ. 庄島侍屋敷遺跡（第6次調査）

Fig. 147 遺跡の位置図(1/25,000)	92	Fig. 149 出土遺物(写真)	92
Fig. 148 調査区全景(北から)	92		

表 目 次

Tab. 1 平成13年度久留米市内遺跡群発掘調査一覧表	1
Tab. 2 市ノ上北屋敷遺跡第5次調査出土遺物観察表①	21
Tab. 3 市ノ上北屋敷遺跡第5次調査出土遺物観察表②	22
Tab. 4 市ノ上北屋敷遺跡第5次調査出土遺物観察表③	23
Tab. 5 市ノ上北屋敷遺跡第5次調査出土遺物観察表④	24
Tab. 6 市ノ上北屋敷遺跡第5次調査出土遺物観察表⑤	25
Tab. 7 市ノ上北屋敷遺跡第5次調査出土遺物観察表⑥	26
Tab. 8 市ノ上北屋敷遺跡第5次調査出土遺物観察表⑦	27
Tab. 9 市ノ上北屋敷遺跡第5次調査出土遺物観察表⑧	28
Tab. 10 出土石器組成一覧表	48
Tab. 11 上野遺跡第2次調査出土遺物観察表	59
Tab. 12 念仏塚遺跡第4次調査出土遺物観察表①	66
Tab. 13 念仏塚遺跡第4次調査出土遺物観察表②	67
Tab. 14 山ノ内遺跡第1次調査出土遺物観察表	86

I. 調査の概要

1. はじめに

久留米市では平成5年度より、国・県費の補助を受けて実施した発掘調査の成果を『久留米市内遺跡群』として取りまとめ、報告書を刊行してきている。平成13年度における久留米市内遺跡群の調査は、発掘調査3件、確認調査8件である。発掘調査原因は保育園改築に伴う1件を除くと、他は全て専用住宅建設に伴う調査である。

2. 調査の体制

平成13年度における久留米市内遺跡群に係る調査の体制は以下のとおりである。

調査主体：久留米市教育委員会	教育長	石川 集充		
調査総括：教育文化部	部 長	山村 秀明		
文化財保護課	課 長	関 知彦	課長補佐	堤 諭吉
	文化財保護課主査	立石 雅文	事務主査	松村 一良
	庶務担当	権藤 節子		
	事前審査・調整担当	大石 昇	園井 正隆	
	調査担当	近澤 康治	白木 守	小澤 太郎
		神保 公久		
	整理担当	畠中 和子	小澤 知美	米澤美詠子

発掘調査臨時職員

秋永 絹子・荒巻美智代・今村美津子・江崎 清美・江崎 弘一・大淵 文子・岡 富士子
 梶島ミドリ・財木美智子・末安ヨシミ・高田 裕子・田中 貞夫・田中 樹子・堤 佐和子
 津留崎啓和・中園 敬子・野口カオル・馬場八重子・原口 妙子・半田 純香・平島ツヤカ
 深山智富美・藤木 幸子・藤吉 美香・三小田美智子・宮崎すえ子・村上 令子・森 一二三
 森 美佐子・森 美代子・柳 鈴子・山田 治代・良永美佐子・良永 洋子・吉村 智子
 渡辺しげ子・渡邊やつ子

Tab. 1 平成13年度久留米市内遺跡群発掘調査一覧表

*調査順

遺跡名	次数	地番	調査原因	調査面積	調査期間	担当者	備考
十間屋敷遺跡	1次	口吉町24-24	確認調査	42㎡	6月1日	大石	
南薫西遺跡	1次	南薫西町1951-43外	確認調査	16㎡	7月10日	大石・園井	
辻遺跡	2次	東郷原町1502-3外	確認調査	30㎡	8月8日～8月15日	神保	
山ノ内遺跡	1次	津福本町1941-1	保育園改築	473㎡	9月3日～9月21日	近澤	本報告
白川遺跡	1次	園分町215-12外	専用住宅建設	47㎡	10月1日～10月5日	小澤	本報告
庄島侍屋敷遺跡	5次	庄島町15-10	確認調査	28㎡	10月5日	大石・園井	
庄島侍屋敷遺跡	6次	庄島町19-2	専用住宅建設	64㎡	10月10日～10月26日	白木	概要報告
南薫西遺跡	2次	南薫西町1994-3外	確認調査	28㎡	11月7日～11月9日	小澤	
南薫西遺跡	3次	南薫西町1951-4	確認調査	36㎡	11月26日～12月3日	大石	
上津土塁跡	3次	上津二丁目1636-1外	確認調査	160㎡	2月13日～2月15日	近澤	
藤光屋敷遺跡	1次	上津町字鶴淵193-2	確認調査	8㎡	2月15日	大石・園井	

Ⅱ. 市ノ上北屋敷遺跡（第5次調査）

1. はじめに

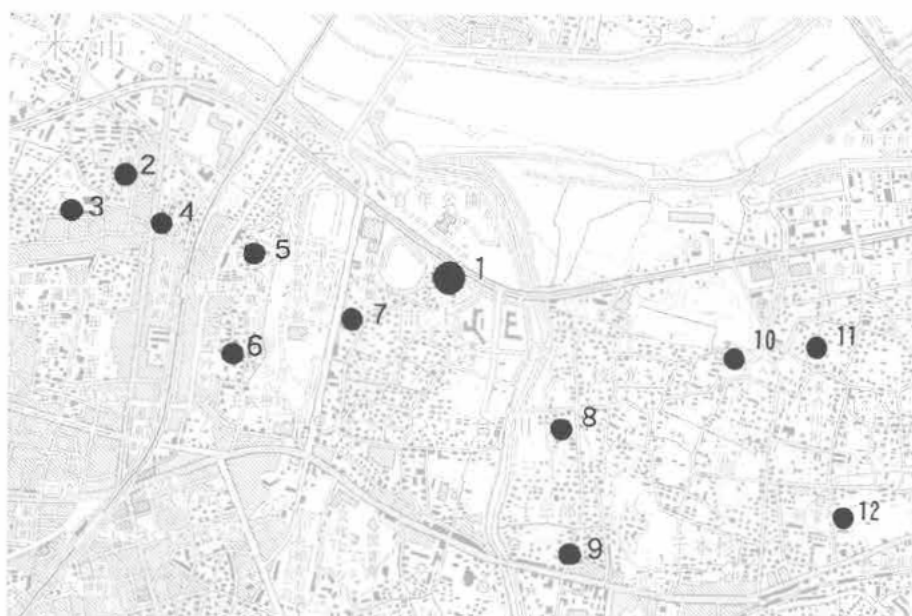
本調査は、平成12年5月26日に地権者である[REDACTED]氏より、久留米市合川町1877-7における専用住宅および共同住宅建設に先立つ、埋蔵文化財包蔵地の確認調査依頼書が提出されたことに始まる。依頼地は周知の遺跡である市ノ上北屋敷遺跡の範囲に含まれていることから、5月30日に遺構の残存状況や密度を把握するために確認調査を実施した。その結果、現地表面から-40～50cmで弥生中期初頭の土器や黒耀石、青磁等の遺物が出土し、土坑状の遺構も検出された。地権者との協議の結果、工事の概要から判断して盛土等による現状保存は困難であったため、やむを得ず発掘調査を実施することで合意した。その後、6月8日付で発掘調査依頼書を受付け、同年6月26日より発掘調査に入る運びとなった。

2. 位置と環境

阿蘇外輪山に源を発する九州最大の河川である筑後川左岸に形成された低位段丘上に立地する。市ノ上北屋敷遺跡は東の高良川と西の谷部とに挟まれた細長い地形を呈する「市ノ上台地」が、北方の筑後川に向って大きく突き出た先端部に位置し、標高13m余りを測る。周囲の氾濫源との比高差は6m近くに達する。市ノ上北屋敷遺跡では過去に4次に及ぶ発掘調査が実施されているが、諸般の事情で報告書は刊行されていないため、以下に調査の概要を記す。

第1次調査は昭和52年8月17日～9月27日まで、店舗建設に先立って調査が実施された。縄文時代の土坑からは押型文・船元式・阿高式土器などが出土した他、弥生時代前期末～中期初頭の甕棺墓7基・土坑などが検出された。中でも2号甕棺墓は、上甕・下甕ともに板付Ⅱ式の壺の口縁部を打ち欠いた挿入式で、市内では最古段階に位置づけられる甕棺墓である。

第2次調査は昭和54年8月27日～9月4日まで、店舗の増築に先立って調査が実施された。第1次調査の東隣に位置し、弥生時代前期末の円形堅穴住居1軒が検出された。



遺 跡 名

1. 市ノ上北屋敷遺跡
2. 東櫛原今寺遺跡
3. 石丸遺跡
4. 辻遺跡
5. 南薫稲荷遺跡
6. 南薫本村遺跡
7. 西屋敷遺跡
8. 大園遺跡
9. 古宮遺跡
10. 葉山遺跡
11. 御蔵園遺跡
12. 西小路遺跡
13. 朝妻遺跡

Fig. 1 周辺の遺跡分布図 (1/25,000)

第3次調査は昭和59年3月22日～4月12日まで、個人住宅建設に先立って調査が実施された。縄文時代の土坑9基、弥生時代中期の土坑4基、中世の土壇墓1基、近世墓1基などの遺構に加え、ナイフ形石器・搔器などの旧石器5点や、押型文・船元式・阿高式土器などの遺物が出土している。

第4次調査は平成2年5月10日～9月7日まで、個人住宅建設に先立って調査が実施された。弥生時代中期～古墳時代初頭の竪穴住居が4軒検出され、内1軒は焼失住居で弥生土器・石庖丁・石剣・管玉などが出土している。またこれらの住居に先行して12基の環状土坑列が確認されている。この環状土坑列は一边1m前後の方形プランを呈する土坑が、直径約8mの円形に配置されるものであるが、性格や時期などは不明である。

次に周辺の弥生時代の遺跡について見てみる。筑後川左岸の自然堤防上には幾つかの甕棺墓が形成されており、市ノ上北屋敷遺跡の南方に位置する西屋敷遺跡（30基）、西方の湿地帯を隔てた台地上には南薫稻荷遺跡（97基）・辻遺跡（4基）・石丸遺跡（138基）・東櫛原今寺遺跡（6基）などが存在する。また石丸遺跡では筑後川以南では唯一となる二列埋葬墓地も確認されるなど、久留米市内で確認されている甕棺墓の80%近くはこの一帯に営まれている。一方の居住域は東櫛原今寺遺跡や南薫本村遺跡などで竪穴住居が確認されている他、東方の高良川を隔てた古宮・葉山・朝妻遺跡などでも終末期～古墳時代初頭の竪穴住居・掘立柱建物が確認されている。古宮遺跡では幅6m、長さ400m以上にも及ぶ大溝が直線的に掘削され、大溝に沿って100軒以上の竪穴住居が配置されている。また朝妻遺跡では住居内から舶載鏡と考えられる鏡片の出土も見られる。

江戸時代の市ノ上台地上は、城下に最も近い農村「市ノ上村」として繁栄し、藩士の下屋敷や藩主の別邸も築かれた。今回の調査地点の南側にあった有馬藩別邸は、第7代久留米藩主である有馬頼庸（1729～1783 治世）の生母盛徳院が、丘陵の東辺にあった藩士の下屋敷を召し上げて造園を築いたとされるもので、慶応二年（1866）には別邸の規模を拡張したとの記録も見える。現在の有馬別邸は現在でも良く手入れされた庭を望むことができ、有馬氏の繁栄の一端を偲ぶことができる。



Fig. 2 調査地点の位置と周辺地形図 (1/2,500)

3. 調査の記録

（1）調査の概要

平成12年6月26日より重機による表土剥ぎを開始する。現地表面から－40～50 cmで遺構検出面に達する。対象地内に排土置き場が確保できないため、排土はトラックで外へ搬出する。7月3日から発掘器材を搬入し、遺構の検出作業および平板による略図の作成（1/50）を開始する。6日から調査区の南西端から遺構の掘り下げを開始し、並行してトータルステーションによる測量も行う。調査を開始して間も



Fig. 3 市ノ上北屋敷遺跡第5次調査主要遺構配置図（1/200）

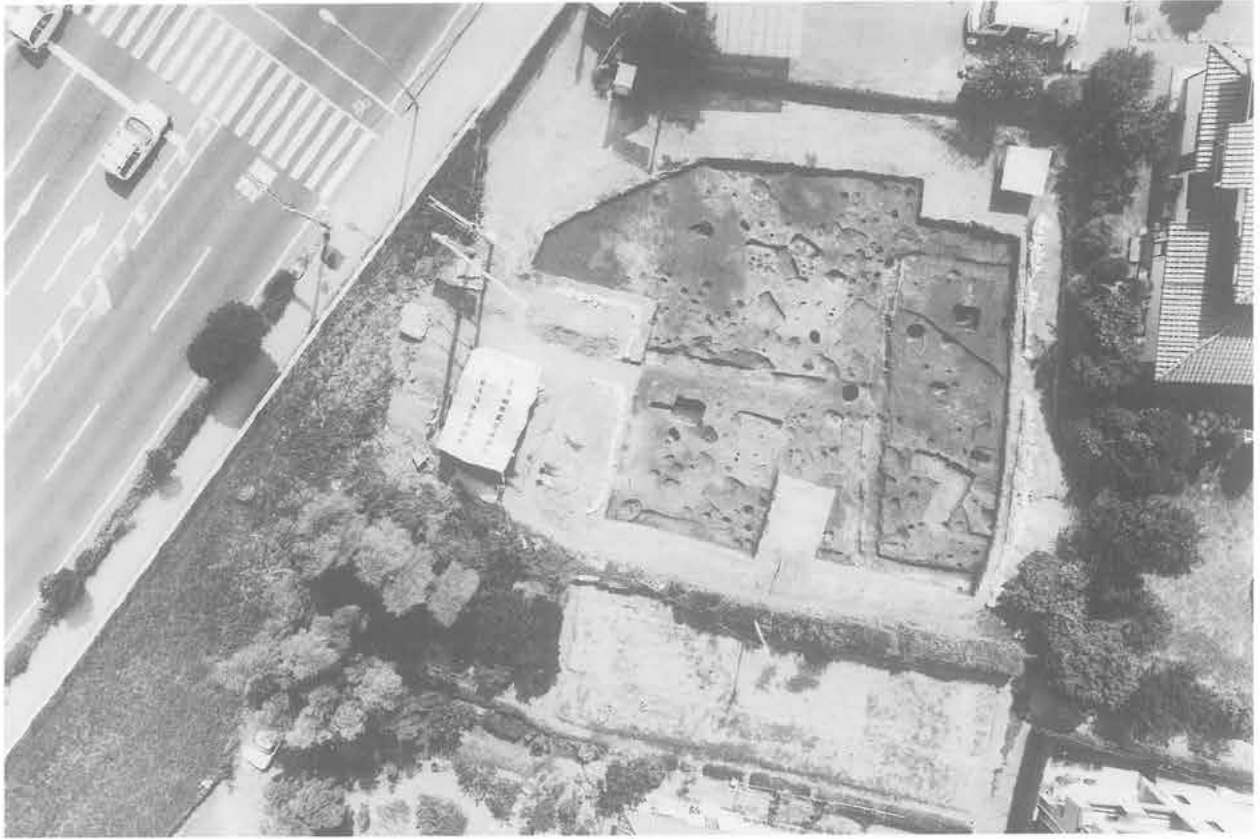


Fig. 5 調査区南半部全景 (北上空から)



Fig. 6 調査区北半部全景 (南上空から)

なく、地権者より諸般の事情で8月前半までに住宅の基礎を完成させたいとの申し入れがあった。協議の結果、工事の工程を考慮して12日より他現場から作業員の応援を受け、住宅建設予定地に当たる南半部の調査を精力的に進めることとなった。19日にラジコンヘリによる調査区南半部の全景写真撮影、7月21日に残る遺構の測量を行った後、南半部を業者に引き渡す。基礎工事中は大型作業車等の出入りがあるため、安全面を考慮して基礎が完成する8月半ばまで現場作業を一時中断する。



Fig. 7 作業風景（北東から）

8月15日より再び作業を開始。23日より調査区北側部分を調査するため、重機で調査区を拡張する。地形は北方の筑後川に向かって緩やかに下がっており、北西端では現地表面から1m以上も下がる。9月5日に気球により調査区北半部の全景写真撮影を実施。翌6日に発掘器材を撤収し、調査区を埋め戻して現地での作業を終える。

なお記録写真は、カラーリバーサル35mm、モノクローム35mm・6×7で撮影した。また遺構図は遺跡調査汎用システムを用いて作成したが、個別遺構・土層図は必要に応じて水系メッシュ法により1/10・1/20で作成した。遺跡調査汎用システム「カタタ」で測量したデータは、「カタタ3DC」に記録・保存している。

（2）遺構の概要

縄文・弥生・中世・近世の遺構・遺物が確認された。この内、縄文時代と中世に関しては遺物の出土が認められたのみであり、遺構としては確認されていない。

弥生時代の遺構は竪穴住居5軒、土坑13基、土壇墓・木棺墓3基などである。竪穴住居は円形プランを呈するもの2軒、長方形プランを呈するもの3軒が存在する。また調査区内で検出したピットの多くから弥生土器の出土が見られ、これらのピットの大半が弥生時代の所産と考えられる。

近世の遺構は溝6条・井戸1基・近世墓6基が確認された。この内、井戸と近世墓の一部については完掘していない。

a) 弥生時代の遺構

竪穴住居

S15 (Fig. 8・9) 調査区の南西端で検出した。弥生時代の土坑や近世の溝の掘削により、ほとんど原形を止めていないが、南壁の立ち上がり、その周囲に広がる硬化面の存在から、円形プランを呈する竪穴住居と判断した。深さは南側で10cm近くを測るが、地山が北西部に向かって緩やかに傾斜しているため、床面は検出できない。壁の外径から見て住居の中心部分と考えられる辺りには中央土坑が位置し、隣接して小ピットが存在する。北西側にあったと考えられる小ピットは他の遺構と重複しているために検出できなかった。住居の規模は中央土坑を中心に復元すれば、径7m近くに達する。柱穴は断面図に示したピットとSK35と重複するピットのみが深さ65～75cmと深く、それ以外のピットは何れも深さ15cm前後の浅いものである。前者の深いピットが住居に伴うものとするれば、6～7本の柱穴が想定される。住居の埋土は暗褐色土で、出土遺物は弥生土器の細片、黒耀石・サヌカイトの剥片が見られる。また中央土坑からは石鏃が1点出土した。

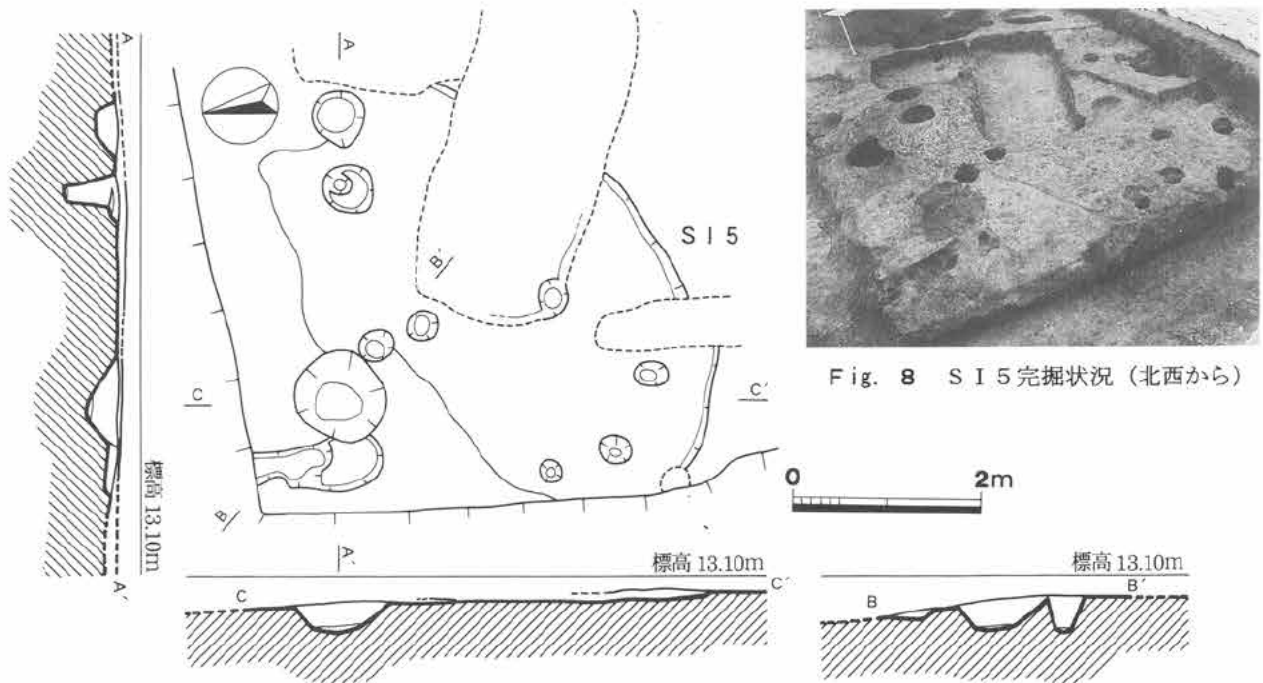


Fig. 8 S I 5 完掘状況（北西から）

Fig. 9 S I 5 実測図（1/80）

S I 45（Fig. 10～12） 調査区の南端で検出した、平面プランが長方形を呈する住居である。北側を近世の溝であるSD20によって切られているが、現状で長軸6.90m、短軸5.50m、深さ20cm程度を測り、今回の調査で確認された住居では最大規模である。SD20を隔てて北東で検出したSK65とは主軸が同じで、且つ床面のレベルも等しいことから、この住居と密接に関連した土坑の可能性のあるものの、接

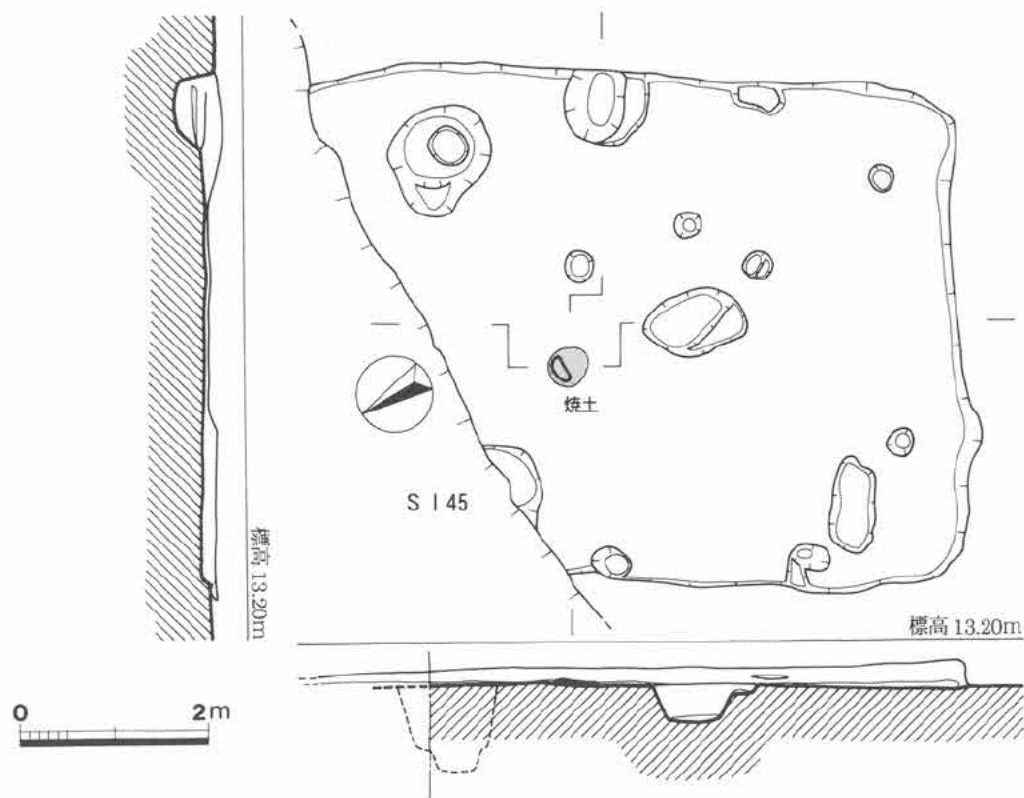


Fig. 10 S I 45 実測図（1/80）



Fig. 11 S I 45 完掘状況（南東から）



Fig. 12 S I 45 焼土検出状況（東から）

する部分の構造が不明であるため、ここでは別々の遺構として取り扱った。床面からは10基以上のピットが検出されたが、規模・配置ともに不規則で支柱穴は判然としない。中央やや北寄りの床面からは焼土が検出された。焼土のすぐ南側に位置するピットは被熱した痕跡が認められず、この焼土の範囲が地床炉の可能性もある。また北東部分からは径・深さともに1m近くに達するピットが検出されたが、住居に伴うものかどうかの判断はできない。住居の埋土は暗褐色土で、出土遺物は弥生土器の細片が多く、甕・壺・器台が見られる。この他には石鏃や縄文土器が出土している。

S I 130 (Fig. 13・14) 調査区の北西で検出した住居である。上面は近世墓による乱れが大きい、わずかに残る壁の立ち上がりから、径5.50m程度の円形プランが確認できる。住居の深さは数cmと残りは悪いが、壁際と中央を除いては硬化面が良好な状態で認められる。中央に深さ20cm程度のピットがあり、周囲には灰の広がりが見られることから、このピットが炉と考えられる。床面からは幾つかのピットが確認されたが何れも浅く、また配置も不規則であることから柱穴は不明瞭である。遺物は弥生土器がビニール袋で2袋程度出土したが、細片が大半で器形が窺える資料は少ない。一方で石器類は石鏃3点、黒耀石剥片114点、サヌカイト剥片14点が見られ、その中には姫島産黒耀石の剥片も2点見られる。



Fig. 13 S I 130 完掘状況（南から）

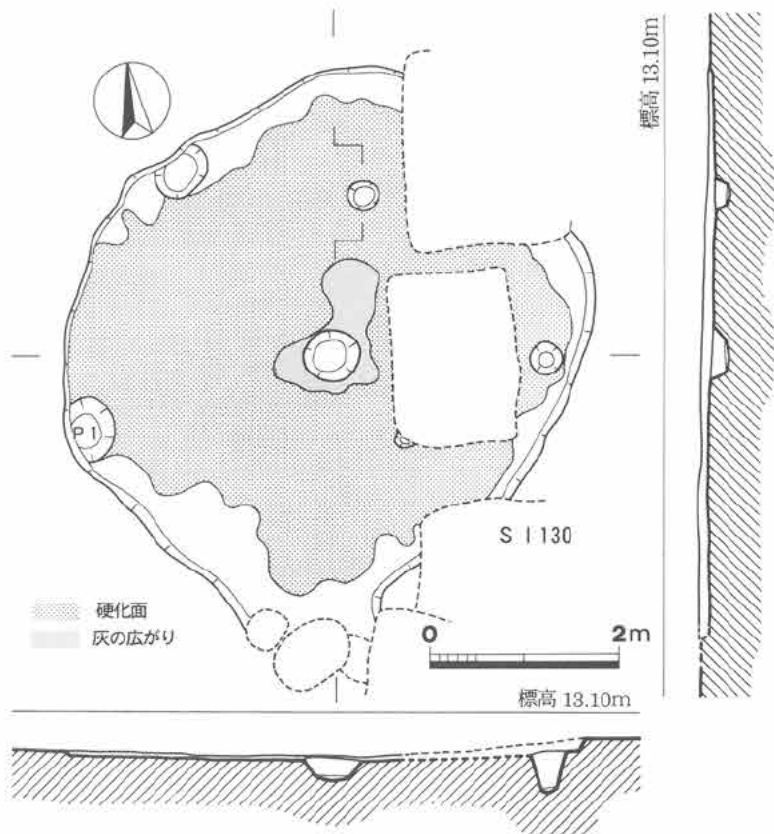


Fig. 14 S I 130 実測図 (1/80)

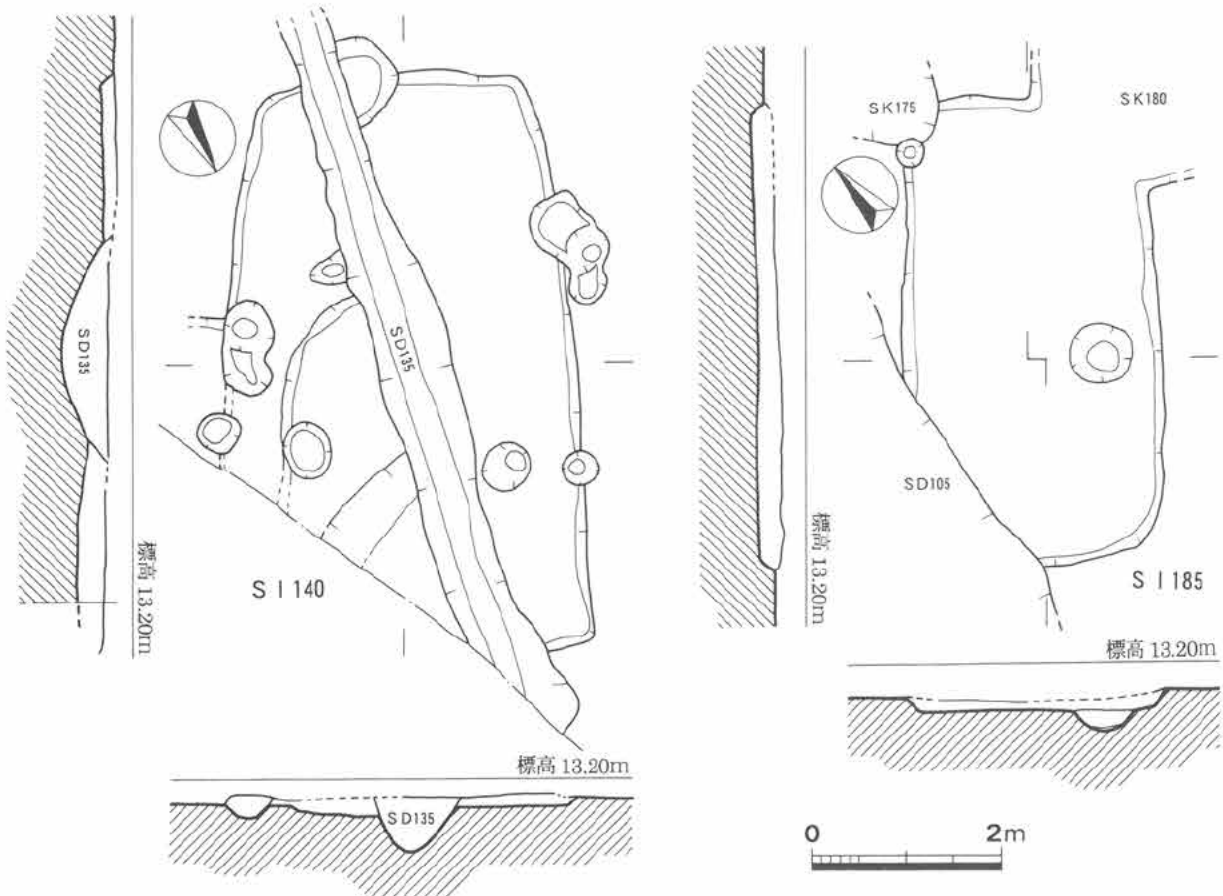


Fig. 15 S I 140・185 実測図 (1/80)



Fig. 16 S I 140 完掘状況（北西から）



Fig. 17 S I 185 土層断面（南西から）



Fig. 18 S I 185 遺物出土状況（北から）



Fig. 19 S I 185 完掘状況（南東から）

S I 140 (Fig. 15・16) 調査区北東で検出した、平面プランが長方形を呈する住居である。住居のほぼ中央を近世の溝である S D 135 によって大きく切られ、床面も段落ちによって乱れている。支柱穴・炉ともに未確認であるが、規模・形態から住居と判断した。規模は長軸 6.20m、短軸 3.80m、深さ 12 cm 程度を測る。出土遺物の大半が弥生土器の細片で占められ、それ以外では投弾・凹石・片刃石斧・石鏃などが出土した。

S I 185 (Fig. 15・17～19) 中央北寄りで検出した住居である。長軸 4.90m、短軸 2.60m のやや小振りの長方形プランを呈し、規模から見て果たして住居なのかといった疑問も残るが、ここでは平面プランから竪穴住居として扱った。西側は近世の溝である S D 105 に切られ、東側は弥生時代の土坑である S K 180 と接するが、先後関係は捉えられなかった。また床面からは炉・柱穴ともに検出されていない。埋土は細かい黄色土ブロックを含む暗褐色土である。出土遺物はビニール 1 袋程度で、南コーナー付近から甕が出土している。

土坑

S K 35 (Fig. 20・21・23) 調査区の南西部で検出した土坑で、平面プランは長軸 3.70m、短軸 1.75m の長方形を呈する。底面は概ね平坦で深さは 65 cm を測る。S I 5 より後出する。埋土は暗褐色土が 50 cm 以上堆積し、この暗褐色土を除去すると完形品を含む大量の遺物が姿を現わした。埋土観察と遺物の出土状態から、遺物は南西方向から投げ込まれた状況が看取できる。また遺物と底面との間には 5～10 cm 程度の黒色土が堆積するが、この黒色土中には遺物がほとんど含まれていない。黒色土の直上からはパンコンテナ 3 箱以上にも及ぶ弥生土器が出土した。器種別では甕が最も多く、口縁部形態は大半が三角口縁を呈する。一方の底部形態では上げ底 24 点・平底 13 点で前者が多い。甕以外の器種が窺える資料では壺 10 点・器台 13 点・支脚 1 点が見られる。また石器類では磨製石斧 1・石庖丁 1・紡錘車 1・石鏃 4・黒曜石剥片 75・サヌカイト剥片 32 点が出土している。

S K 40 (Fig. 22・23) S K 35 の北側で検出した土坑で、長軸 2m、短軸 1.50m、深さ 30 cm の隅丸長方形を呈する。底面は平坦で、埋土は暗褐色土である。出土遺物は少なく、破片を含めても 80 点にも満たない。なおこの土坑からは逆 L 字口縁の甕も出土しており、S K 35 より後出するものと考えられる。



Fig. 20 S K 35 遺物出土状況（北東から）



Fig. 21 S K 35 完掘状況（北東から）



Fig. 22 S K 40 完掘状況（西から）

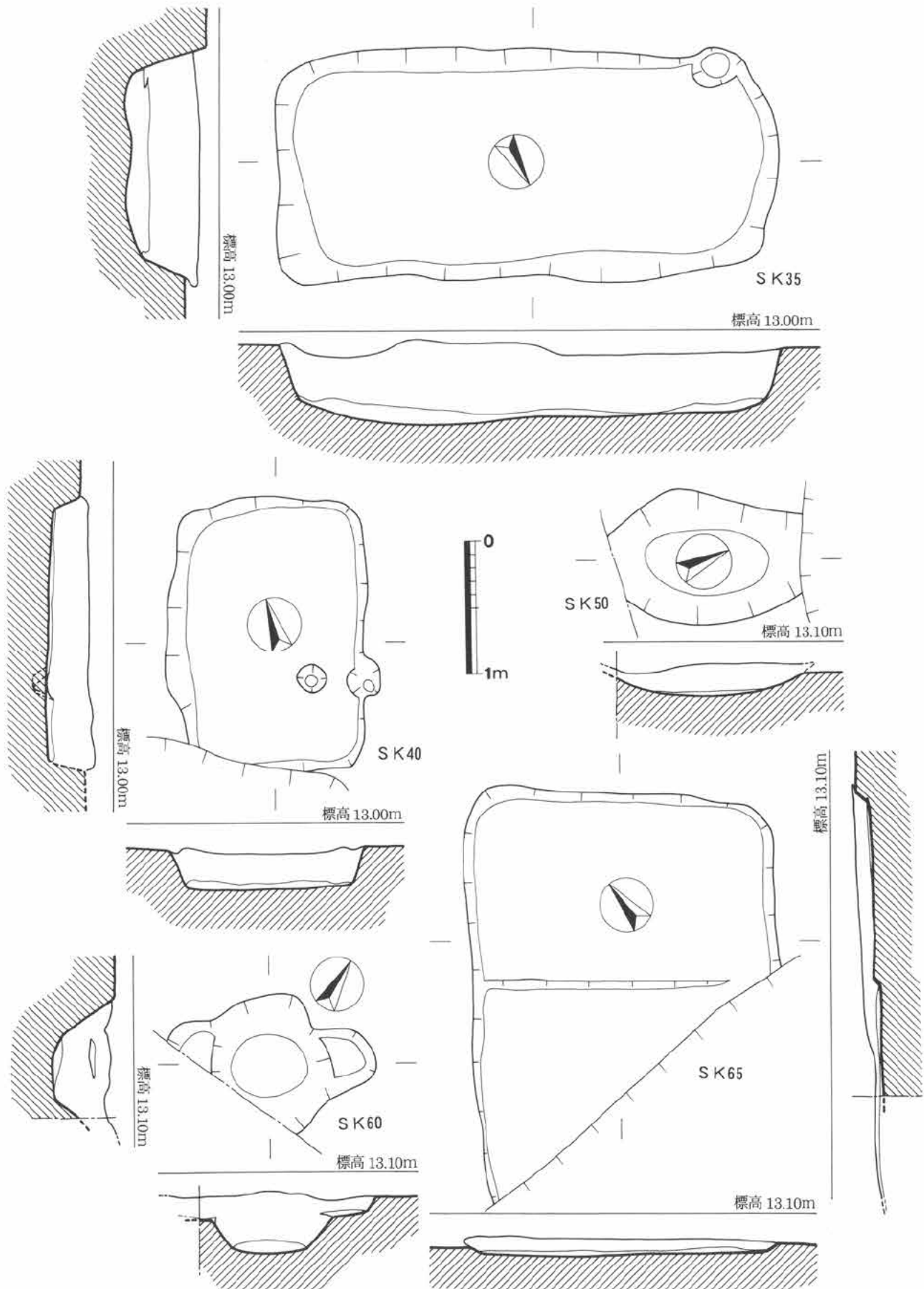


Fig. 23 SK35・40・50・60・65 実測図 (1/40)

SK50 (Fig. 23) SK35の南側で検出した土坑で、SK35に切られる。平面形は長軸1.40m以上、短軸0.95mの楕円形を呈し、深さ24cmを測る。埋土は暗褐色土で、弥生中期初頭の土器や丹塗り土器の細片、石器剥片、縄文土器などが出土している。

SK60 (Fig. 23) SK50の西側で検出した土坑で、平面プランは長軸1.55m以上、短軸1.05m以上の楕円形を呈する。掘形は二段掘りで、深さは中央部で45cmを測る。埋土は暗褐色土で、弥生土器の甕・壺・器台、石皿などがビニール1袋程度出土した。

SK65 (Fig. 23・24) SI45の北東で検出した土坑で、近世の溝であるSD20によって切られる。平面プランは長軸3.10m以上、短軸2.30mの長方形を呈する。底面は北東側が一段高く、深さは北端で10cm、南端で18cmを測る。また底面は全体的に硬化しており、底面レベルや主軸方位から見て、SD20を隔てて南西側に位置する竪穴住居SI45との関連が窺える。埋土は細かい黄色土ブロックを含む暗褐色土で、弥生土器の甕や小壺、石器剥片、縄文土器などが細片を含めて60点余り出土した。

SK100 (Fig. 25・27) 調査区の中央西寄りで検出した、平面プランが長軸1.30m、短軸1.05mの楕円形を呈する土坑である。南西に位置するSK125より後出する。掘形は北側が一段高い二段掘りを呈し、深さ30cm余りを測る。埋土は暗褐色土で、南東部から弥生土器がまとまって出土した。器種は三角口縁を呈する甕が最も多く、それ以外では外面にミガキを施した壺や、甕棺の口縁部が見られる。また石器は敲石1・黒耀石核2・サヌカイト剥片1が見られる。



Fig. 24 SK65 完掘状況（北西から）

SK110 (Fig. 26・27) 近世墓ST115に切られて検出した土坑で、平面プランは長軸2.20m以上、短軸0.95mの細長い楕円形を呈する。深さは55cmを測り、今回の調査で検出した土坑の中では深い方である。埋土は上層が黒色土、下層に暗褐色土が薄く堆積し、この黒色土中からパンコンテナー1箱程度の遺物がまとまって出土した。なお暗褐色土中からの出土遺物は皆無である。遺物の大半は弥生土器の甕で、口縁部形態が窺える資料では刻目突帯2・三角口縁5・逆L字口縁6が見られる。石器類は黒耀石剥片11・サヌカイト剥片5・軽石1の他、柱状片刃石斧の未製品と考えられる資料も1点出土した。



Fig. 25 SK100 遺物出土状況（北西から）

SK125 (Fig. 3) SK100に切られて検出された土坑で、平面プランは溝状の不定形を呈する。深さは15~20cm程度で、暗褐色土の埋土中から弥生土器や縄文土器が少量出土したが、細片が多く、二次的に流れ込んだものと考えられる。



Fig. 26 SK110 遺物出土状況（南東から）

S K145 (Fig. 27・28) 調査区の北東部、S I140 の西側で検出した土坑で、平面プランは長軸 1.35 m、短軸 1.05mのやや崩れた楕円形を呈する。深さ 25 cmを測り、断面はすり鉢状を呈する。埋土は暗褐色土で、埋土中からビニール1袋程度の遺物が出土した。遺物は石器の剥片3点を除けばすべて弥生土器で占められる。器種は甕・壺が見られ、甕が大半を占める。しかしながら何れも細片が多く、二次的に流れ込んだものと考えられる。

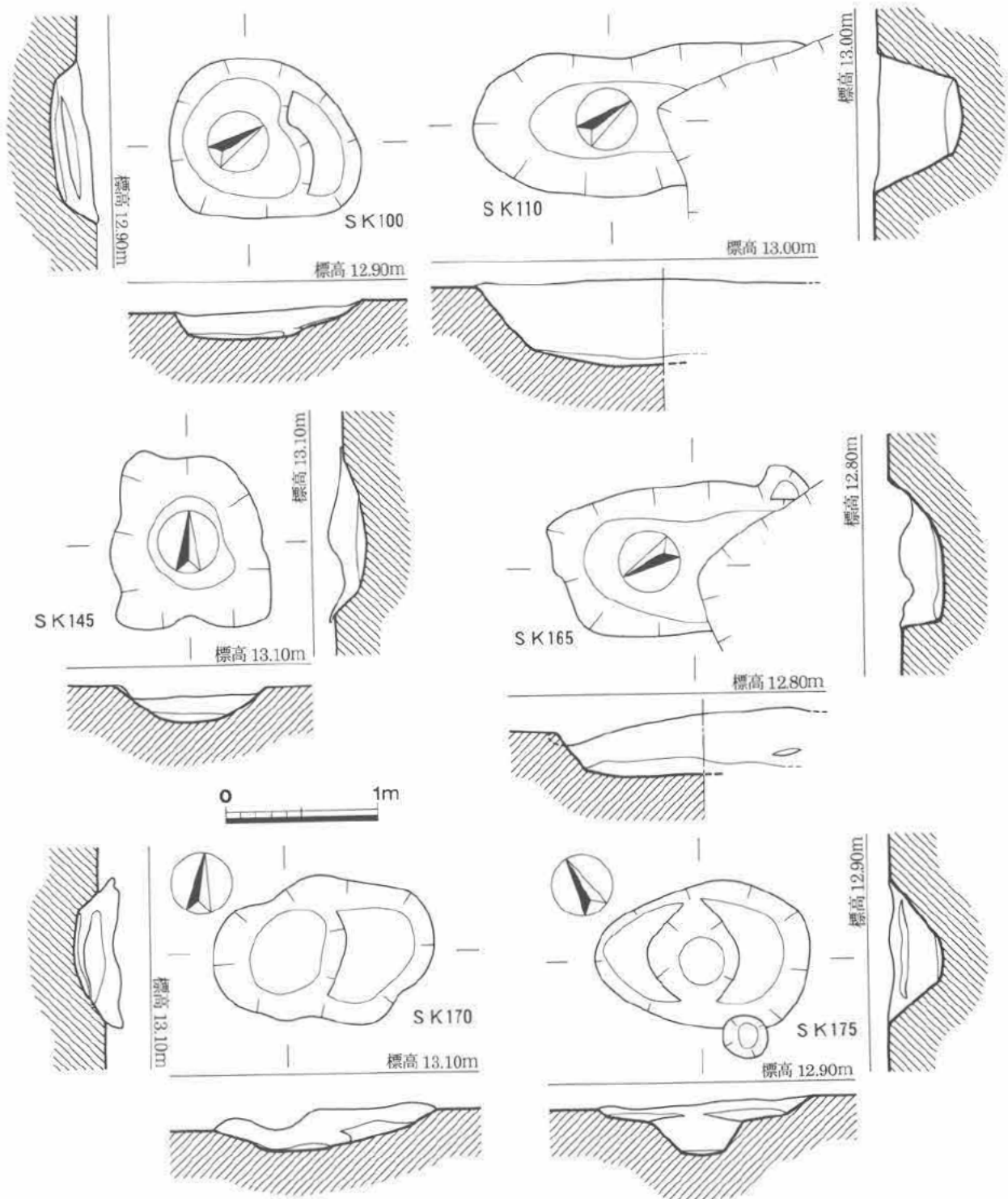


Fig. 27 S K100・110・145・165・170・175 実測図 (1/40)

SK165 (Fig. 27・29) 調査区の北西部で検出した土坑で、近世の遺構であるS T150とS D105に切られる。平面プランは長軸1.95m以上、短軸1.00mの隅丸長方形を呈し、深さは最深部で40cm余りを測る。埋土は黒褐色土で、弥生土器や石鏃未製品が出土しているが、埋土全体から散在した状態で出土しており、よって細片が多い。弥生土器では甕・器台が見られる。

SK170 (Fig. 27・30) S I185の南東で検出した土坑で、平面プランは長軸1.45m、短軸0.95mの楕円形を呈する。底面は東側が一段高い二段掘りを呈し、深さは西側で25cmを測る。埋土は暗褐色土で、ビニール1袋程度の遺物が出土した。遺物の大半が弥生土器の甕で、弥生土器以外では今山産磨製石斧1・黒耀石剥片2・サヌカイト剥片2、縄文土器1が見られる。

SK175 (Fig. 27・31) S I185の北西隅で検出した土坑で、S I185を切る。平面プランは長軸1.45m、短軸0.95mの楕円形を呈する。底面は東西に段を有する二段掘りを呈し、中心部の深さは35cmを測る。埋土は上面に暗褐色土、その下に黒色土が堆積し、遺物は黒色土中から出土している。遺物の大半が弥生土器の細片であるが、破片を含めても73点と少ない。土器以外では黒耀石剥片が8点見られる。

SK180 (Fig. 3・32) 調査区の北東隅で検出した土坑で、S I185と重複するが、先後関係は捉えていない。平面プランは方形に近く、或いは住居の可能性もあるが、ここでは全体のプランが不明確であるため土坑として扱った。深さは25cm程度で底面はほぼ平坦である。パンコンテナー1箱にも及ぶ大量の遺物が出土し、その大半が弥生土器である。しかしながら細片が多く、器形が窺える資料は極めて少ない。



Fig. 28 SK145 遺物出土状況（西から）



Fig. 29 SK165 完掘状況（北西から）



Fig. 30 SK170 完掘状況（北西から）



Fig. 31 SK175 完掘状況（南から）



Fig. 32 SK180 完掘状況（北東から）

土壌墓・木棺墓

ST70 (Fig. 33~35) 調査区のほぼ中央に位置する土壌墓である。長軸1.95m、短軸0.85mの長方形プランを呈し、深さは23cmを測る。主軸方位はN-58°-Eを示す。埋土は暗褐色土で、棺の痕跡は確認されていない。遺物は弥生土器の細片4、黒耀石剥片1、縄文土器1が出土したのみで、明確な時期を特定できる資料は見られない。

ST75 (Fig. 33・36) ST70の東側に位置する土壌墓で、上面を近代の攪乱、及び近世の溝であるSD135に切られる。平面プランは長軸2.10m、短軸1.05mの隅丸長方形を呈し、深さは26cmを測る。

また主軸方位はN-63°-Eを示す。底面からは小口板の痕跡と考えられる掘り込みが2ヶ所で確認され、木棺墓の可能性もある。埋土は暗褐色土で、弥生土器の細片などが10数点出土した。大半が破片で時期が特定できないが、限られた資料から見て中期以降の所産と考えられる。

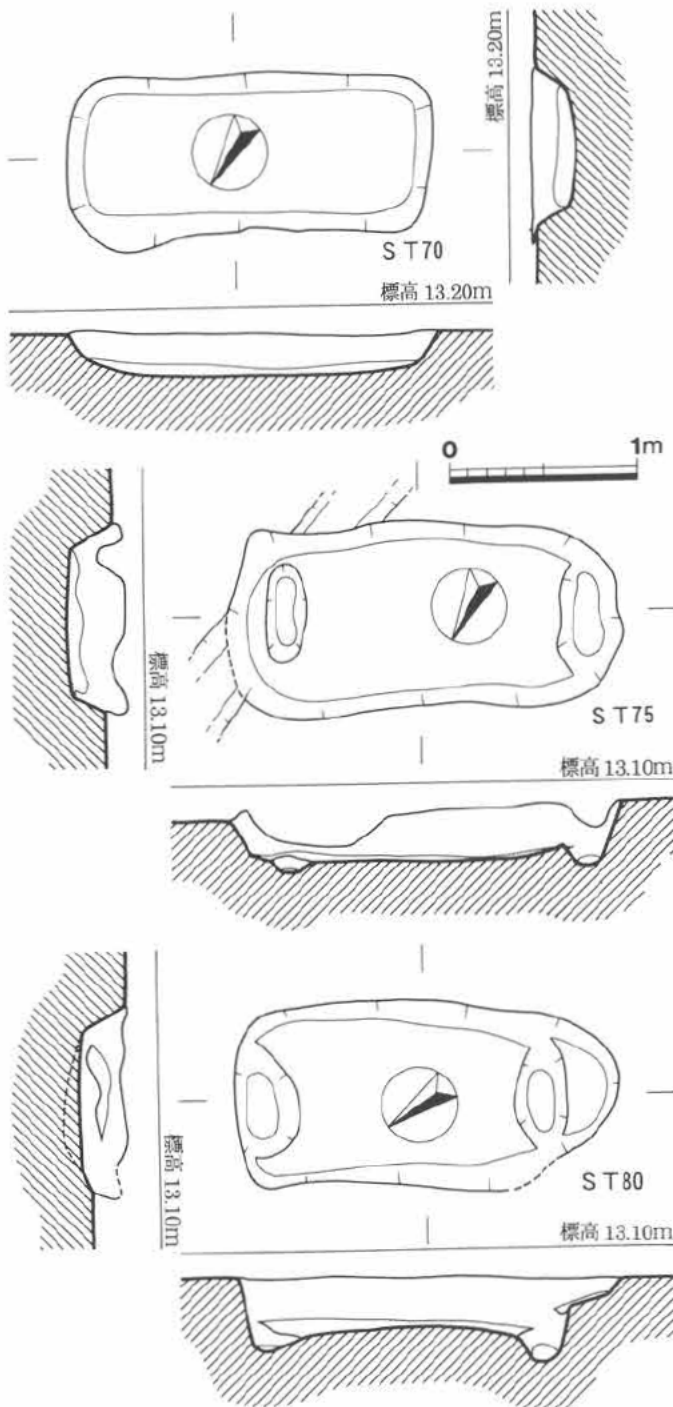


Fig. 33 ST70・75・80 実測図 (1/40)



Fig. 34 ST70 土層断面 (南西から)



Fig. 35 ST70 完掘状況 (北西から)



Fig. 36 ST75 完掘状況 (南東から)

ST80 (Fig. 33・37) ST75の南東に位置し、北西隅を攪乱とSD135によって切られる。平面プランは長軸2.05m、短軸1.00mの略長方形を呈し、主軸方位はN-34°-Eを示す。深さは25cmで、2ヵ所に小口板の痕跡と考えられる深さ15cm程度の掘り込みが認められ、ST75と同じく木棺墓の可能性も考えられる。埋土は暗褐色土で、弥生土器の小壺片1、及び碧玉製管玉1が出土した。なお碧玉製管玉は埋土中からの出土である。

b) 近世の遺構

溝

SD10 (Fig. 38・41) 調査区の南西隅で検出した南北溝である。SD20と直交するが、溝の埋没はSD20より後出し、時期差がある。上面幅1.45m、深さ40cm前後を測り、埋土は鉄分を多く含む暗灰褐色土である。底面の高低差はほとんどないが、わずかに南側が低くなっている。出土遺物は縄文土器や弥生土器、石器、青磁碗、近世磁器、丸瓦などが見られるが、近世の遺物は陶磁器4点と瓦2点のみで至って少ない。

SD15 (Fig. 41) SD10の北側で検出した南北溝で、溝の埋没はSD10より後出する。幅35cm、深さ15cmを測り、南側が深く掘られている。出土遺物は弥生土器や土師器の細片が少量見られるのみである。

SD20 (Fig. 39・41) 調査区の南半部で検出した溝で、北東のコーナー部分を確認した。東西長は約17mを検出したが、さらに西へと延びることが判明している。上面幅0.90~1.55m、深さ20~50cmを測り、底面の高低差は西へ移行するに従って深みを増す。また北東コーナー付近の底面では長さ6m、幅40cm、深さ20cm程度にわたって溝状の段落ちが認められる。埋土は柔らかい暗褐色土で、全体でパンコンテナ1箱程度の遺物が出土したが、大半が弥生土器や石器で、近世の遺物は陶磁器片12・平瓦3が出土したに過ぎない。

SD30 (Fig. 40・41) SD20の北側で検出した東西溝で、東側はSD105と接する。西端付近ではSD20と重複するが、先後関係は捉えられなかつ



Fig. 37 ST80完掘状況（南東から）



Fig. 38 SD10B土層断面（北から）



Fig. 39 SD20B土層断面（西から）



Fig. 40 SD30B土層断面（西から）

た。上面幅 0.80～1.20m、深さ 15～30 cmを測り、西側へ移行するに従って徐々に深みを増す。埋土は暗褐色土であるが、西側では底面付近に白色粘土が薄く堆積していた。出土遺物は縄文土器、弥生土器、石器、須恵器、土師器、白磁、青磁、近世陶磁器、瓦などが見られるが、溝の時期を示す資料は近世陶磁器片2点と、瓦3点が出土したのみである。

SD105 (Fig. 3・41) 調査区の中央を南北に走行する溝である。南端ではSD20・SD30、及び井戸SE90と接しており、走行方向や配置から見て何らかの関連があるものと考えられる。上面幅 0.80～1.80 m、深さ 30～50 cmを測る。底面のレベルは地形に合わせるように北側が低くなっており、調査区内でも 60 cm程度の高低差が認められる。埋土は柔らかい暗褐色土で、底面付近には砂や小礫が薄く堆積していた。パンコンテナー1箱程度の遺物が出土したが、大半が弥生土器、及び縄文土器、石器、須恵器、土師器、瓦器、青磁など前時代の遺物で、溝に伴う時期の遺物は近世陶磁器片6点と平瓦片2点が出土したに過ぎない。

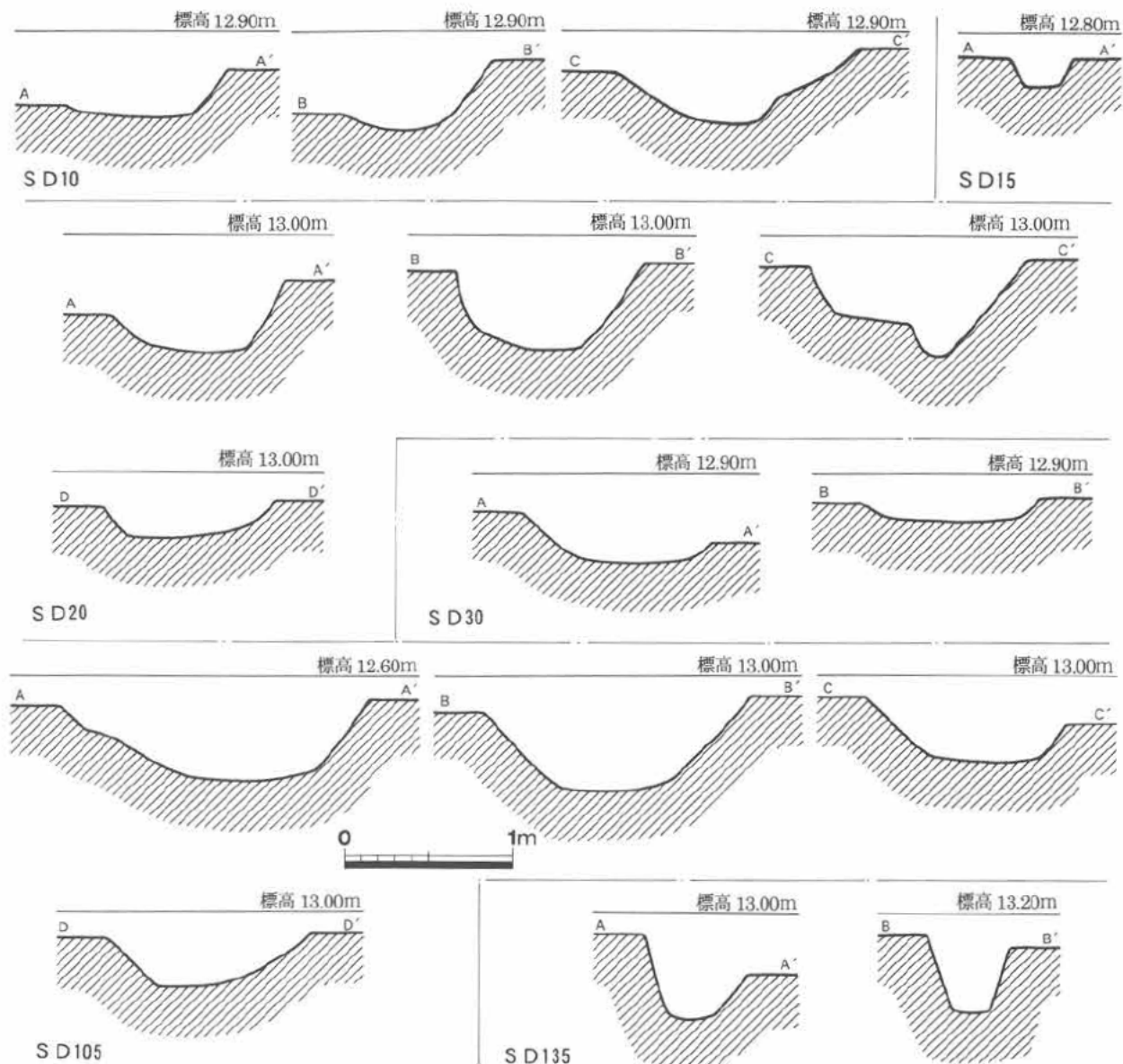


Fig. 41 溝断面図 (1/40)

SD135 (Fig. 3・41) 調査区の東端で検出した南北溝で、南北長 11m 余りを確認した。北端は調査区外に延びているが、形状から判断して東へ折れるものと考えられる。また南側の延長線上には SD20 が位置しており、計画的に掘削された可能性が高い。幅 0.40~0.70m、深さ 45~55 cm を測り、断面逆台形を呈する。底面のレベルは北側が低くなり、調査区内でも 35 cm の高低差が認められる。埋土は暗灰褐色土で、縄文土器や弥生土器などがビニール 1 袋程度出土しているが、近世の遺物は陶器の播鉢 1 点と平瓦 2 点が出土したのみである。

井戸

SE90 (Fig. 42・43) SD105 の南端付近で検出した井戸で、平面プランは直径 90 cm の円形を呈する。深さは -1.50m まで掘り下げたが、安全面と時間的制約からこれ以上の掘り下げを断念した。よって井戸の構造や深さ等は不明であるが、ボーリングステッキによる調査では、さらに 1 m 以上深くなることが判明している。埋土は灰褐色砂質土で、縄文土器・弥生土器・石器などの前時代の遺物以外では、土師器の小皿 2・坏 1・焙烙 2・近世陶器 1 などの遺物が出土した。SD20・30・105 が接する中心部分に位置しており、配置から見ればこれらの溝との強い関連が窺える。

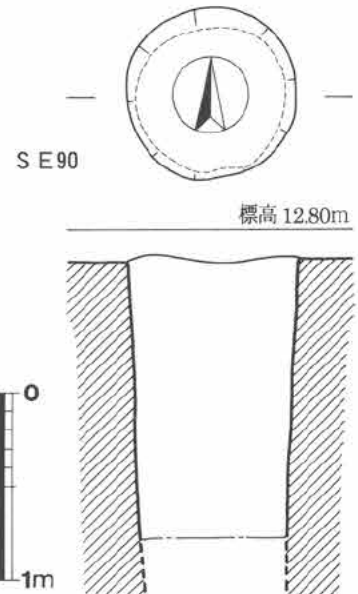


Fig. 42 SE90 全景（北から） Fig. 43 SE90 実測図(1/40)

近世墓

ST55 (Fig. 44・45) SD20 の北東コーナーの内側で検出した。掘形は一辺 1.50m 前後の方形プランを呈し、中心部からは径 70 cm 程度の棺の痕跡が確認された。埋土は褐色土と黄色土の混じりで、出土遺物には土師器の灯明皿や弥生土器、縄文土器などが少量見られる。また棺内からは人骨と考えられる骨片が出土したが、墓壙を完掘していないため、人骨の取り上げは行っていない。

ST115 (Fig. 44・46) ST130 の南側で検出した墓壙で、北側に隣接する ST120 を切って営まれる。長軸 1.80m、短軸 1.55m の長方形プランを呈し、深さ 1.30m を測る。埋土は砂及び黄色土・黒褐色土ブロックの混じりで、土師器の小皿細片 1、近世陶磁器碗細片 1 以外には弥生土器や石器が出土した。

ST120 (Fig. 44・47) ST115 に南西隅を切られて検出した墓壙で、掘形は一辺 1.70m の方形プランを呈する。土師器細片 9、近世陶磁器片 3 の他には縄文土器や弥生土器などが出土した。未完掘。

ST150 (Fig. 44・48) 調査区北側付近で検出した墓壙で、SK165 及び ST155 を切って営まれる。掘形は長軸 1.75m、短軸 1.35m の長方形プランを呈し、深さ 1.10m を測る。ビニール 2 袋程度の遺物が出土したが、大半が隣接する SK165 に帰属すると考えられる弥生土器で、近世の遺物は土師器の小皿細片が 2 点見られるのみである。

ST155 (Fig. 44・49) ST150 に切られて検出された墓壙で、長軸 2.10m、短軸 1.75m の大形の長方形プランを呈する。深さは 1.50m で西側に段を有する。ビニール 2 袋程度の遺物が出土したが、すべて縄文土器・弥生土器・石器であり、墓壙に伴う資料は皆無である。

ST160 (Fig. 44・50) ST155 の南側で検出した墓壇で、長軸 1.85m、短軸 1.30mの長方形プランを呈し、深さ 1.20mを測る。近世磁器碗 1 点の他、弥生土器や石器が出土した。

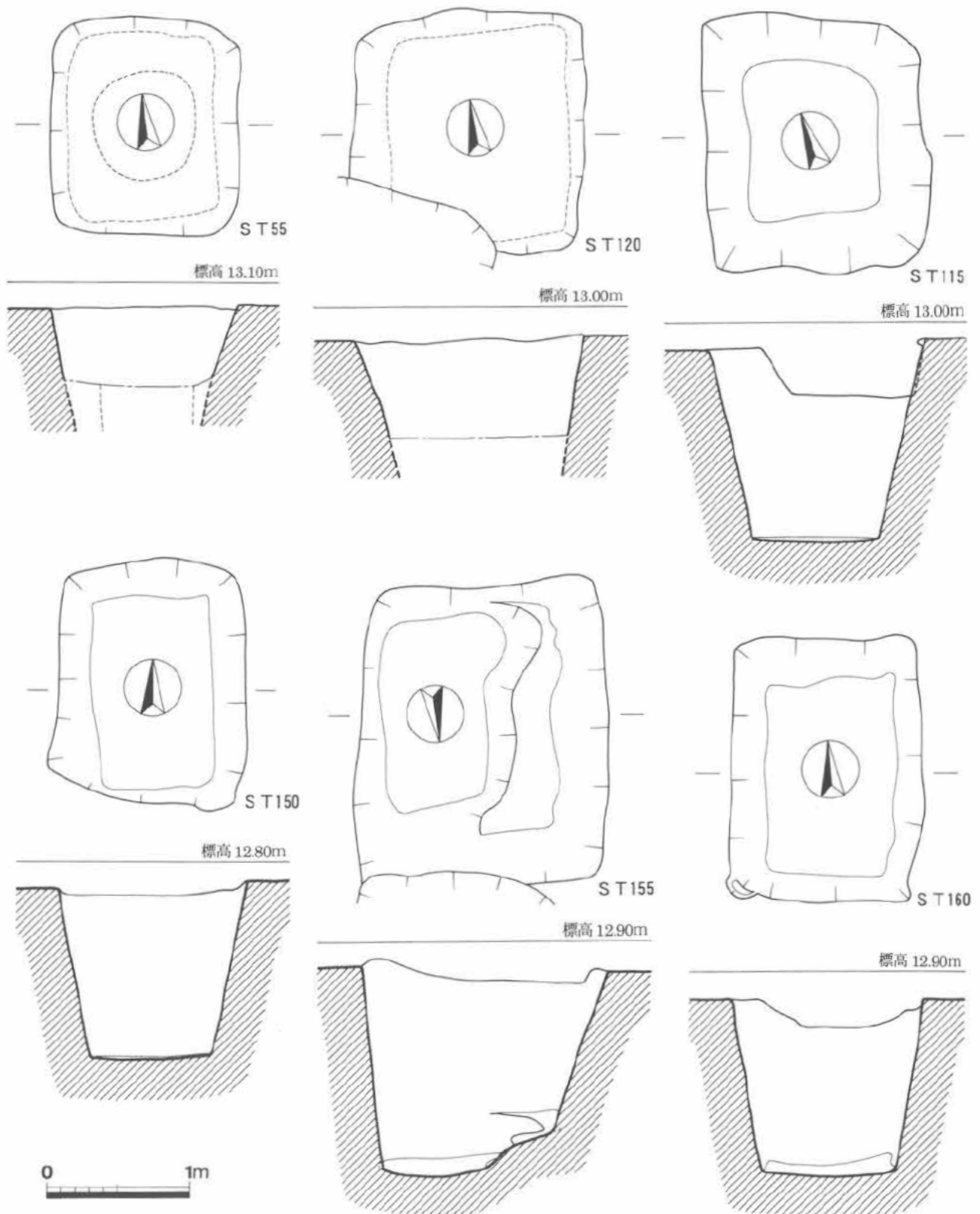


Fig. 44 近世墓実測図 (1/40)



Fig. 45 ST55 全景（南から）



Fig. 46 ST115 完掘状況（西から）



Fig. 47 ST120 全景（西から）



Fig. 48 ST150 完掘状況（西から）



Fig. 49 ST155 完掘状況（西から）



Fig. 50 ST160 完掘状況（西から）

（3）遺物の概要

総数でパンコンテナ 20 箱分の遺物が出土した。出土遺物の大半が弥生土器で、遺構に伴うもの以外にも近世の遺構から大量に出土した。弥生土器以外の遺物では、縄文土器が 141 点出土したが、いずれも後世の遺構からの出土であり、層位的には捉えられていない。また石器ではかなりの数の剥片等が出土したが、大陸系磨製石器を除けば縄文期と弥生期のいずれに属するのかの判断はできない。中世では白磁・青磁・瓦器等が少量見られるが、すべて近世の溝からの出土である。近世の遺物も土師器・陶磁器・瓦がごく少量出土したのみであった。図示した遺物の詳細は観察表（Tab. 2～9）に記しているのので、ここでは主な遺物についてのみ概要を述べる。

1～49 は縄文土器で早期～後期初頭の資料が見られる。62・63 は刻目突帯文で、今回の調査ではこの 2 点を含めて 4 点のみの出土である。79 の投弾も図示した資料 1 点のみの出土である。80 は磨製石鏃で先端部を欠く。86・87 は甕で、口縁部下に指圧痕が認められる。112 は甕棺の底部と考えられる。121 の鉢は内外面に丁寧なミガキを施している。127 は用途不明の土製品で中央に穿孔が見られる。135 は逆 L 字口縁

を呈する甕で、口縁端部に刻目が施される。142 は金海式甕棺の口縁部である。146 の壺は口縁部内外面、及び胴部外面に丁寧なミガキが施される。151 は形態から見て蓋と考えられる。152・153 は口縁部下に2条の突帯を貼り付けた甕で、共に口径 50 cm 近い大形品である。176 は薄手に仕上げた板付Ⅱ式段階の小壺で、外面に沈線と重弧文が施される。このタイプの小壺は他にも、図示していないが近世墓から1点出土している。177 は碧玉製の管玉。179 の砥石は砂岩製で、4面とも頻繁に使用されている。186 は白磁碗Ⅳ類。187 は龍泉窯系青磁碗である。188 は軒丸瓦で、凹面には布目跡が認められる。軒瓦はこの1点のみの出土である。190 は黒耀石製の石鏃未製品。197 は瓦器碗で、高台内に「×」印が刻まれる。202 の小皿、203 の坏は共に口縁部に油煙が付着しており、灯明皿として使用されたものと考えられる。204 は焙烙の口縁部である。

【遺物実測図凡例】

・実測図のスケールは下記のとおりである。

1/2……………石器・玉

1/3……………縄文土器

1/4……………弥生土器・土師器・瓦器・陶磁器・瓦・土製品

【遺物観察表凡例】

・「法量」の単位はcmであり、() 内の数値は現存値を示す。

・「色調」は『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社、1997年版）による。また陶磁器の「色調」は釉色を表す。

・「胎土」は0.5mm未満の砂粒を微砂粒、1mm未満を細砂粒、2mm未満を砂粒と表記した。

・輸入陶磁器の分類は下記文献による。

太宰府市教育委員会 2000 『大宰府条坊跡XV—陶磁器分類編—』 太宰府市の文化財 第49集

Tab. 2 市ノ上北屋敷遺跡第5次調査出土遺物観察表①

遺物No	出土遺構	材質	器種	法 量			色 調		調 整		胎 土	備 考	登録番号
				口 径	底 径	器 高	外 面	内 面	外 面	内 面			
1 Fig. 51・62	SD105	縄文土器	鉢			(5.6)	にぶい黄褐色	にぶい褐色	楕円文	ナデ	砂粒 石英、金雲母	押型文	200006 -00204
2 Fig. 51・62	SK35	縄文土器	鉢			(2.5)	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	楕円文	原体条痕	砂粒 石英	押型文	200006 -00035
3 Fig. 51・62	SP28	縄文土器	鉢			(2.3)	にぶい黄褐色	灰黄褐色	楕円文	原体条痕	砂粒 角閃石	押型文	200006 -00021
4 Fig. 51・62	ST155	縄文土器	鉢			(7.0)	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	楕円文	原体条痕	砂粒 石英、角閃石	押型文	200006 -00302
5 Fig. 51・62	SP53	縄文土器	鉢			(5.5)	褐色	褐色	楕円文	ナデ	砂粒 石英、角閃石	押型文	200006 -00145
6 Fig. 51・62	SD105	縄文土器	鉢			(5.3)	褐色	にぶい黄褐色	楕円文	ナデ	細砂粒、石英 多量の角閃石	押型文	200006 -00206
7 Fig. 51・62	SP17	縄文土器	鉢			(5.7)	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	楕円文	ナデ	7mmの砂粒 石英	押型文	200006 -00008
8 Fig. 51・62	SD20	縄文土器	鉢			(5.7)	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	楕円文	ナデ	細砂粒 金雲母	押型文	200006 -00009
9 Fig. 51・62	SI185	縄文土器	鉢			(4.4)	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	楕円文	ナデ	砂粒 石英	押型文	200006 -00332
10 Fig. 51・62	SP139	縄文土器	鉢			(4.6)	褐色	にぶい黄褐色	楕円文	ナデ	砂粒 石英、角閃石	押型文	200006 -00275
11 Fig. 51・62	SD105	縄文土器	鉢			(4.0)	暗灰黄色	にぶい黄褐色	楕円文	ナデ	細砂粒 多量の角閃石	押型文	200006 -00205
12 Fig. 51・62	SP114	縄文土器	鉢			(5.1)	褐色	にぶい黄褐色	楕円文	ナデ	細砂粒 角閃石	押型文	200006 -00228
13 Fig. 51・62	SX102	縄文土器	鉢			(4.0)	褐色	にぶい黄褐色	楕円文	ナデ	砂粒 石英、金雲母	押型文	200006 -00203
14 Fig. 51・62	SK125	縄文土器	鉢			(4.0)	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	楕円文	ナデ	細砂粒 微量の角閃石	押型文	200006 -00237
15 Fig. 51・62	SD105	縄文土器	鉢			(2.9)	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	楕円文	ナデ	細砂粒 角閃石	押型文	200006 -00207

Tab. 3 市ノ上北屋敷遺跡第5次調査出土遺物観察表②

遺物No	出土遺構	材質	器種	法 量			色 調		調 整		胎 土	備 考	登録番号
				口 径	底 径	器 高	外 面	内 面	外 面	内 面			
16 Fig. 51・62	S I 45	縄文土器	鉢			(2.4)	浅黄色	暗灰黄色	楕円文	ナデ	細砂粒 多量の角閃石	押型文	200006 -00107
17 Fig. 51・62	S D10	縄文土器	鉢			(3.0)	暗褐色	にぶい黄褐色	楕円文	ナデ	細砂粒 角閃石	押型文	200006 -00005
18 Fig. 51・62	S K40	縄文土器	鉢			(3.3)	明褐色	黒褐色	楕円文	ナデ	細砂粒 角閃石	押型文	200006 -00098
19 Fig. 51・62	S K65	縄文土器	鉢			(2.8)	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	楕円文	ナデ	細砂粒 角閃石	押型文	200006 -00154
20 Fig. 51・62	S T75	縄文土器	鉢			(2.7)	明黄褐色	明黄褐色	山形文	ナデ	砂粒 多量の角閃石	押型文	200006 -00166
21 Fig. 51・62	S P93	縄文土器	鉢			(1.6)	橙色	明灰黄色	山形文	ナデ	細砂粒 多量の金雲母	押型文	200006 -00188
22 Fig. 51・62	S P108	縄文土器	鉢			(4.3)	にぶい黄褐色	にぶい黄色	条痕	条痕	1~3mmの砂粒	条痕文	200006 -00220
23 Fig. 51・62	S K50	縄文土器	鉢			(2.2)	にぶい黄褐色	黒褐色	貝殻筋文 ナデ	ナデ	細砂粒 角閃石	塞/神式?	200006 -00140
24 Fig. 51・62	S I 185	縄文土器	鉢			(2.8)	黒褐色	灰黄色	条痕	条痕	微砂粒 金雲母	轟式	200006 -00333
25 Fig. 51・62	S K35	縄文土器	鉢			(3.4)	にぶい黄色	にぶい黄色	刺突文	条痕	微砂粒 金雲母	曾畑式?	200006 -00036
26 Fig. 51・62	S I 45	縄文土器	鉢			(3.2)	褐灰色	黒褐色	二枚貝の腹縁 による刺突文	条痕 ナデ	微砂粒 金雲母	二枚貝による調整	200006 -00122
27 Fig. 51・62	S I 45	縄文土器	鉢			(5.3)	暗褐色	黒褐色	二枚貝の腹縁 による刺突文	条痕 ナデ	細砂粒 金雲母	二枚貝による調整	200006 -00124
28 Fig. 51・62	S I 45	縄文土器	鉢			(3.0)	黒褐色	黒褐色	二枚貝の腹縁 による刺突文	条痕 ナデ	微砂粒 金雲母	二枚貝による調整	200006 -00123
29 Fig. 51・62	S K65	縄文土器	鉢			(1.9)	灰黄褐色	灰黄褐色	二枚貝による 押し引き	条痕	微砂粒 金雲母		200006 -00158
30 Fig. 51・62	S I 45	縄文土器	鉢			(3.7)	暗褐色	褐色	刺突文 沈線	ナデ	細砂粒 金雲母		200006 -00125
31 Fig. 52・63	S I 45	縄文土器	鉢			(2.7)	明褐色	赤褐色	連続押引文	ナデ	細砂粒 角閃石	押引文	200006 -00126
32 Fig. 52・63	S K35	縄文土器	鉢			(2.9)	にぶい暗褐色	にぶい暗褐色	凹点文 凹線文	ナデ	細砂粒 滑石	坂の下式	200006 -00039
33 Fig. 52・63	S I 45	縄文土器	鉢			(3.5)	にぶい暗褐色	にぶい黄褐色	凹点文	ナデ	細砂粒 滑石	坂の下式	200006 -00112
34 Fig. 52・63	S K35	縄文土器	鉢			(4.0)	赤褐色	赤褐色	凹点文 凹線文	ナデ	微砂粒 滑石	坂の下式	200006 -00038
35 Fig. 52・63	S P41	縄文土器	鉢			(4.1)	にぶい赤褐色	明赤褐色 黒褐色	凹線文	ナデ	微砂粒 角閃石、金雲母	坂の下式	200006 -00105
36 Fig. 52・63	S I 140	縄文土器	鉢			(6.0)	暗赤褐色	黒褐色	凹線文	ナデ	細砂粒 滑石	坂の下式	200006 -00276
37 Fig. 52・63	S P84	縄文土器	鉢			(4.7)	にぶい暗褐色	褐色	凹線文	ナデ	細砂粒 角閃石	坂の下式	200006 -00173
38 Fig. 52・63	S P114	縄文土器	鉢			(3.7)	暗赤褐色	暗赤褐色	凹線文	ナデ	細砂粒 滑石	坂の下式	200006 -00229
39 Fig. 52・63	S P46	縄文土器	鉢			(3.6)	褐色	褐色	凹線文	ナデ	微砂粒 滑石	坂の下式	200006 -00138
40 Fig. 52・63	S I 5	縄文土器	鉢			(3.7)	にぶい赤褐色	にぶい黄褐色	ナデ	ナデ	細砂粒 滑石	坂の下式	200006 -00003
41 Fig. 52・63	S T120	縄文土器	鉢			(3.1)	褐色	赤褐色	凹線文	ナデ	細砂粒 滑石	坂の下式	200006 -00232
42 Fig. 52・63	S T55	縄文土器	鉢			(5.7)	黒褐色	暗褐色	貼付突帯 縄文	ナデ	細砂粒 多量の金雲母	船元式	200006 -00146
43 Fig. 52・63	S I 5	縄文土器	鉢			(4.0)	黒褐色	にぶい黄褐色	縄文	ナデ	細砂粒 角閃石、金雲母	船元式	200006 -00002
44 Fig. 52・63	S P93	縄文土器	鉢			(3.3)	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	縄文	ナデ	細砂粒 角閃石、金雲母	船元式	200006 -00189
45 Fig. 52・63	S I 130 P1	縄文土器	鉢			(4.0)	にぶい黄褐色	暗褐色	縄文	ナデ	細砂粒 角閃石、金雲母	船元式	200006 -00263

Tab. 4 市ノ上北屋敷遺跡第5次調査出土遺物観察表③

遺物No	出土遺構	材質	器種	法 量			色 調		調 整		胎 土	備 考	登録番号
				口 径 (長)	底 径 (幅)	器 高 (厚)	外 面	内 面	外 面	内 面			
46 Fig. 52・63	S P62	縄文土器	鉢			(4.5)	明褐色	にぶい黄褐色	縄文	ナデ	細砂粒 角閃石、金雲母	船元式	200006 -00153
47 Fig. 52・63	S P91	縄文土器	鉢			(4.7)	褐色	褐色	縄文	ナデ	細砂粒 角閃石、金雲母	船元式	200006 -00182
48 Fig. 52・63	S P83	縄文土器	鉢			(5.6)	暗褐色	にぶい黄褐色	縄文	ナデ	細砂粒 角閃石、金雲母	船元式	200006 -00172
49 Fig. 52・63	S I130	縄文土器	鉢			(4.4)	にぶい褐色	褐色	突帯 ナデ	ナデ	細砂粒 角閃石	船元式	200006 -00243
50 Fig. 53・64	S I5	弥生土器	甕			(5.0)	にぶい褐色	にぶい褐色	ヨコナデ 刷毛目	ナデ	砂粒 金雲母		200006 -00004
51 Fig. 53・63	S I5 D1	サスカイト	石鏃	1.9	1.8	0.2	暗灰色	暗灰色				重量0.5g	200006 -00019
52 Fig. 53・64	S I45	弥生土器	甕			(2.5)	にぶい褐色	褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	3～4mmの砂粒		200006 -00129
53 Fig. 53・64	S I45	弥生土器	甕	31.6		(5.7)	にぶい赤褐色	褐色	ヨコナデ 刷毛目	ナデ	3～4mmの砂粒	口縁部下に沈線	200006 -00128
54 Fig. 53・64	S I45	弥生土器	甕			(7.0)	褐色	褐色	ヨコナデ 刷毛目	ナデ	3～5mmの砂粒		200006 -00127
55 Fig. 53・64	S I45	弥生土器	甕		6.6	(6.0)	褐色	黄灰色	刷毛目 ナデ	ナデ	8mm程度の砂粒		200006 -00130
56 Fig. 53・64	S I45	弥生土器	甕		7.6	(4.9)	にぶい褐色	灰褐色	刷毛目 ナデ	ナデ	7mm程度の砂粒		200006 -00131
57 Fig. 53・64	S I45	弥生土器	甕		8.5	(6.0)	褐色	にぶい褐色	刷毛目 ナデ	ナデ	7mm程度の砂粒		200006 -00132
58 Fig. 53・64	S I45	弥生土器	甕		5.5	(6.4)	にぶい黄褐色	灰黄色	刷毛目 ナデ	ナデ	砂粒		200006 -00133
59 Fig. 53・64	S I45	弥生土器	壺		12.6	(4.5)	にぶい黄褐色	にぶい褐色	ナデ	ナデ	6mm程度の砂粒		200006 -00134
60 Fig. 53・64	S I45	弥生土器	器台		9.0	(4.6)	にぶい褐色	褐色	刷毛目 ナデ押さえ	ナデ押さえ	砂粒		200006 -00136
61 Fig. 53・63	S I45	黒曜石	石鏃	1.5	(1.1)	0.2	黒色	黒色				重量0.2g	200006 -00137
62 Fig. 54・64	S I130	弥生土器	甕			(2.9)	褐色	にぶい褐色	刻目突帯 ナデ	ナデ	砂粒		200006 -00245
63 Fig. 54・64	S I130	弥生土器	甕			(2.9)	明褐色	明褐色	刻目突帯 ナデ	ナデ	砂粒		200006 -00244
64 Fig. 54・64	S I130	弥生土器	甕	27.0		(5.7)	にぶい黄褐色	褐色	ヨコナデ 刷毛目	ナデ	7mm程度の砂粒 角閃石		200006 -00248
65 Fig. 54・64	S I130	弥生土器	甕	28.0		(6.8)	褐色	褐色	ヨコナデ ナデ	ナデ	3mm程度の砂粒 角閃石		200006 -00249
66 Fig. 54・64	S I130	弥生土器	甕			(9.5)	明赤褐色	赤褐色	ヨコナデ 刷毛目	ナデ	1～4mmの砂粒 角閃石	口縁部下に突帯	200006 -00250
67 Fig. 54・64	S I130	弥生土器	甕			(8.7)	褐色	褐色	ヨコナデ ナデ	ナデ	砂粒	口縁部下に突帯	200006 -00246
68 Fig. 54・65	S I130	弥生土器	甕			(3.3)	にぶい褐色 黒色	明赤褐色	ヨコナデ 刷毛目	ナデ	砂粒	口縁部下に煤付着	200006 -00247
69 Fig. 54・65	S I130	弥生土器	甕		7.1	(6.0)	褐色	黒褐色	刷毛目 ナデ	ナデ	5mm程度の砂粒		200006 -00252
70 Fig. 54・65	S I130	弥生土器	甕		7.2	(5.8)	褐色	明黄灰色	刷毛目 ナデ	ナデ	砂粒		200006 -00251
71 Fig. 54・65	S I130	弥生土器	壺		7.6	(3.8)	黒色	にぶい黄色	ミガキ ナデ	ナデ	3mm程度の砂粒		200006 -00253
72 Fig. 54・65	S I130	弥生土器	器台	9.0		(7.4)	明黄褐色	明黄褐色	刷毛目 ヨコナデ	ナデ押さえ	3mm程度の砂粒		200006 -00254
73 Fig. 54・63	S I130	安山岩	敵石	7.9	5.3	4.0	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色				重量232g	200006 -00257
74 Fig. 54・63	S I130	黒曜石	石鏃	2.8	1.4	0.3	黒色	黒色				重量0.7g	200006 -00255
75 Fig. 54・63	S I130	黒曜石	石鏃	1.8	(1.2)	0.15	黒色	黒色				重量0.6g	200006 -00262

Tab. 5 市ノ上北屋敷遺跡第5次調査出土遺物観察表④

遺物No	出土遺構	材質	器種	法 量			色 調		調 整		胎 土	備 考	登録番号
				口 径 (長)	底 径 (幅)	器 高 (厚)	外 面	内 面	外 面	内 面			
76 Fig. 54・63	S I 130	サヌカイト	石鏃	(0.8)	1.5	0.3	暗青灰色	暗青灰色				重量0.7g	200006 -00256
77 Fig. 54・65	S I 140	弥生土器	甕			(4.2)	橙色	にぶい黄褐色	ヨコナデ ナデ	ナデ	砂粒		200006 -00281
78 Fig. 54	S I 140	弥生土器	甕		7.0	(5.0)	明褐色	黒褐色	ナデ	ナデ	砂粒		200006 -00282
79 Fig. 54・65	S I 140	土製品	投弾	(3.4)	2.4	(2.0)	明赤褐色 黒色	—	ナデ	—	砂粒 赤色粒子		200006 -00283
80 Fig. 54・63	S I 140	粘板岩	磨製石鏃	(2.4)	2.1	0.35	灰色	灰色				重量2.1g	200006 -00286
81 Fig. 54・64	S I 140	粘板岩	片刃石斧	5.5	(1.8)	1.1	灰白色	灰白色				重量19.4g	200006 -00287
82 Fig. 54・63	S I 140	安山岩	凹石	11.3	8.9	5.4	灰色	灰色				重量554g	200006 -00288
83 Fig. 54・65	S I 185	弥生土器	甕			(2.3)	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ヨコナデ 刷毛目	ナデ	3mm程度の砂粒		200006 -00335
84 Fig. 54・65	S I 185	弥生土器	甕		6.8	(19.9)	にぶい橙色 黒色	にぶい橙色 黒色	ヨコナデ 刷毛目	ナデ	3～5mmの砂粒 金雲母		200006 -00336
85 Fig. 55・65	S K 35	弥生土器	甕	14.0		(7.5)	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ヨコナデ 刷毛目	ナデ	7mm程度の砂粒 金雲母		200006 -00045
86 Fig. 55・65	S K 35	弥生土器	甕	26.0		(10.6)	灰褐色 黒色	灰褐色	ヨコナデ 刷毛目	ナデ	砂粒	口縁部下に指圧痕 内面に門歯痕	200006 -00052
87 Fig. 55・65	S K 35	弥生土器	甕	26.4		(12.0)	にぶい褐色	にぶい褐色	ヨコナデ 刷毛目	ナデ	3mm程度の砂粒	口縁部下に指圧痕	200006 -00047
88 Fig. 55・65	S K 35	弥生土器	甕	28.0		(17.0)	にぶい褐色	にぶい褐色	ヨコナデ 刷毛目	ナデ	3～4mmの砂粒	口縁部下に沈線	200006 -00046
89 Fig. 55・65	S K 35	弥生土器	甕	27.4		(25.4)	にぶい褐色 黒色	にぶい黄褐色	ヨコナデ 刷毛目	ナデ	8mm程度の砂粒	口縁部下に突帯	200006 -00051
90 Fig. 55・65	S K 35	弥生土器	甕	26.7		(16.5)	にぶい褐色 黒色	褐色	ヨコナデ 刷毛目	ナデ	7mm程度の砂粒		200006 -00050
91 Fig. 55・65	S K 35	弥生土器	甕	26.8		(17.0)	にぶい褐色 黒色	にぶい褐色	ヨコナデ 刷毛目	ナデ	5mm程度の砂粒		200006 -00048
92 Fig. 55・65	S K 35	弥生土器	甕	29.0		(15.5)	にぶい褐色	にぶい褐色	ヨコナデ 刷毛目	ナデ	3mm程度の砂粒		200006 -00049
93 Fig. 55・65	S K 35	弥生土器	甕		8.0	(20.3)	灰褐色 黒色	にぶい褐色	刷毛目 ナデ	ナデ	1cm程度の礫		200006 -00056
94 Fig. 55・65	S K 35	弥生土器	甕		6.4	(7.9)	にぶい褐色	にぶい褐色	刷毛目 ナデ	ナデ	9mm程度の砂粒 微量の金雲母		200006 -00059
95 Fig. 55・65	S K 35	弥生土器	甕		7.1	(6.0)	にぶい褐色	にぶい褐色	刷毛目 ナデ	ナデ	3～4mmの砂粒 金雲母		200006 -00065
96 Fig. 55・65	S K 35	弥生土器	甕		7.2	(13.2)	にぶい褐色	にぶい黄褐色 黒色	刷毛目 ナデ	ナデ	3mm程度の砂粒		200006 -00058
97 Fig. 55・65	S K 35	弥生土器	甕		7.3	(10.0)	橙色	橙色	刷毛目 ナデ	ナデ	5mm程度の砂粒 少量の角閃石		200006 -00062
98 Fig. 55・65	S K 35	弥生土器	甕		6.7	(5.7)	灰黄褐色	にぶい黄褐色	刷毛目 ナデ	ナデ	2～5mmの砂粒 片岩の粉末?		200006 -00060
99 Fig. 55・65	S K 35	弥生土器	甕		7.7	(2.9)	橙色	にぶい褐色	刷毛目 ナデ	ナデ	6mm程度の砂粒 金雲母		200006 -00066
100 Fig. 55・65	S K 35	弥生土器	甕		7.5	(7.8)	橙色	明赤褐色	刷毛目 ナデ	ナデ	7mm程度の砂粒		200006 -00061
101 Fig. 55・65	S K 35	弥生土器	甕		7.4	(4.0)	橙色	にぶい黄褐色	刷毛目 ナデ	ナデ	5mm程度の砂粒		200006 -00063
102 Fig. 55・65	S K 35	弥生土器	甕		6.6	(7.9)	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	刷毛目 ナデ	ナデ	2～5mmの砂粒 金雲母、角閃石		200006 -00064
103 Fig. 55・65	S K 35	弥生土器	甕		7.1	(17.0)	灰褐色 黒色	にぶい褐色	刷毛目 ナデ	ナデ	1cm程度の礫		200006 -00057
104 Fig. 55・65	S K 35	弥生土器	甕		6.6	(10.6)	橙色	にぶい褐色	刷毛目 ナデ	ナデ	7mm程度の砂粒		200006 -00070
105 Fig. 55・65	S K 35	弥生土器	甕		6.3	(7.4)	にぶい褐色	黒色	刷毛目 ナデ	ナデ	5mm程度の砂粒 金雲母		200006 -00072

Tab. 6 市ノ上北屋敷遺跡第5次調査出土遺物観察表⑤

遺物No	出土遺構	材質	器種	法 量			色 調		調 整		胎 土	備 考	登録番号
				口 径 (長)	底 径 (幅)	器 高 (厚)	外 面	内 面	外 面	内 面			
106 Fig. 56・66	SK35	弥生土器	甕		6.1	(7.4)	にぶい褐色	黒色	刷毛目 ナデ	ナデ	5mm程度の砂粒 金雲母		200006 -00071
107 Fig. 56・66	SK35	弥生土器	甕		6.0	(8.0)	にぶい黄褐色 灰褐色	黒色	刷毛目 ナデ	ナデ	3~4mmの砂粒 金雲母		200006 -00067
108 Fig. 56・66	SK35	弥生土器	甕		4.8	(10.3)	にぶい黄褐色	にぶい褐色	ミガキ ナデ	ミガキ ナデ	砂粒		200006 -00068
109 Fig. 56・66	SK35	弥生土器	甕		7.6	(4.8)	灰黄褐色	黒色	刷毛目 ナデ	ナデ	8mm程度の砂粒 金雲母	低部に指圧痕あり	200006 -00074
110 Fig. 56・66	SK35	弥生土器	甕		6.3	(3.8)	橙色	橙色	刷毛目 ナデ	ナデ	砂粒、金雲母 微量の角閃石		200006 -00073
111 Fig. 56	SK35	弥生土器	甕		6.1	(2.9)	橙色	にぶい褐色	刷毛目 ナデ	ナデ	7mm程度の砂粒 金雲母		200006 -00075
112 Fig. 56・66	SK35	弥生土器	甕		12.4	(3.2)	橙色 黒色	橙色	ナデ	ナデ	8mm程度の砂粒	甕棺	200006 -00081
113 Fig. 56・66	SK35	弥生土器	甕		5.0	(3.7)	にぶい褐色	にぶい黄褐色	ナデ	ナデ	5mm程度の砂粒		200006 -00069
114 Fig. 56・66	SK35	弥生土器	甕		6.0	(4.2)	赤褐色	黒色	ミガキ	ミガキ	細砂粒 角閃石	外面丹塗り	200006 -00080
115 Fig. 56・66	SK35	弥生土器	甕		7.4	(7.3)	橙色	橙色	ミガキ ナデ	ナデ	1cm程度の礫 角閃石		200006 -00077
116 Fig. 56・66	SK35	弥生土器	甕		8.3	(8.3)	黒褐色 黒色	にぶい褐色	ミガキ? ナデ	剥落	7mm程度の砂粒 金雲母、角閃石		200006 -00076
117 Fig. 56・66	SK35	弥生土器	壺	22.0		(7.1)	明赤褐色	灰黄褐色	ヨコナデ 刷毛目	ミガキ	5mm程度の砂粒 金雲母	口縁部下に指圧痕	200006 -00054
118 Fig. 56・66	SK35	弥生土器	壺			(10.1)	灰黄褐色	浅黄褐色	ミガキ?	ナデ	細砂粒、金雲母 微量の角閃石		200006 -00055
119 Fig. 56・67	SK35	弥生土器	壺		8.2	(4.7)	にぶい黄褐色	灰黄褐色	刷毛目 ナデ	ナデ	6mm程度の砂粒 角閃石		200006 -00078
120 Fig. 56・67	SK35	弥生土器	壺		9.4	(2.3)	浅黄褐色	浅黄褐色	ミガキ ナデ	剥落	3mm程度の砂粒 金雲母		200006 -00079
121 Fig. 56・67	SK35	弥生土器	鉢	28.0		(15.4)	にぶい褐色	にぶい褐色	ミガキ 刷毛目	ミガキ	砂粒		200006 -00053
122 Fig. 57・67	SK35	弥生土器	器台	8.4	10.0	15.6	明褐色	明褐色	ヨコナデ 刷毛目	ナデ押さえ	6mm程度の砂粒 角閃石		200006 -00082
123 Fig. 57・67	SK35	弥生土器	器台	8.6		(5.5)	明褐色	明褐色	ヨコナデ 刷毛目	ナデ押さえ	3mm程度の砂粒 角閃石		200006 -00083
124 Fig. 57・67	SK35	弥生土器	器台	8.0		(10.5)	橙色	橙色	ヨコナデ 刷毛目	ナデ押さえ	3mm程度の砂粒 金雲母		200006 -00086
125 Fig. 57・67	SK35	弥生土器	器台	8.8		(8.4)	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ヨコナデ 刷毛目	ナデ押さえ	3mm程度の砂粒 金雲母		200006 -00085
126 Fig. 57	SK35	弥生土器	器台	7.7		(9.2)	橙色	橙色	ヨコナデ 刷毛目	ナデ押さえ	6mm程度の砂粒 金雲母		200006 -00084
127 Fig. 57・67	SK35	土製品	不明	(8.3)	6.2	5.5	明黄褐色	—	ナデ押さえ	—	砂粒	穿孔あり	200006 -00087
128 Fig. 57・63	SK35	粘板岩	石庖丁	(3.4)	(3.9)	0.6	灰色	灰色				重量9.2g	200006 -00088
129 Fig. 57・63	SK35	結晶変岩	紡錘車	5.0	5.0	0.6	オリーブ灰色	オリーブ灰色				重量27.2g	200006 -00090
130 Fig. 57・63	SK35	サヌカイ石	石鏃	2.3	1.6	0.35	灰色	灰色				重量0.9g	200006 -00091
131 Fig. 57・63	SK35	黒耀石	石鏃	2.0	1.8	0.4	黒色	黒色				重量0.9g	200006 -00092
132 Fig. 57・63	SK35	黒耀石	石鏃	1.7	(1.0)	0.3	黒色	黒色				重量0.4g	200006 -00094
133 Fig. 57・63	SK35	黒耀石	石鏃	(1.6)	(1.2)	0.2	黒色	黒色				重量0.4g	200006 -00093
134 Fig. 57・67	SK40	弥生土器	甕	31.0		(5.1)	橙色	橙色	ヨコナデ ナデ	ナデ	砂粒		200006 -00103
135 Fig. 57・67	SK40	弥生土器	甕			(2.5)	にぶい褐色	にぶい褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	砂粒	口縁端部に刻目	200006 -00104

Tab. 7 市ノ上北屋敷遺跡第5次調査出土遺物観察表⑥

遺物No	出土遺構	材質	器種	法 量			色 調		調 整		胎 土	備 考	登録番号
				口 径 (長)	底 径 (幅)	器 高 (厚)	外 面	内 面	外 面	内 面			
136 Fig. 57・67	SK60	弥生土器	甕		7.1	(6.0)	明黄褐色	にぶい黄褐色	刷毛目 ナデ	ナデ	5~6mmの砂粒		200006 -00149
137 Fig. 57・67	SK60	弥生土器	甕		6.0	(5.7)	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ミガキ ナデ	ナデ	3~4mmの砂粒 金雲母		200006 -00150
138 Fig. 57	SK60	弥生土器	壺		5.4	(2.4)	橙色	黒褐色	ミガキ	ミガキ ナデ	3mm程度の砂粒		200006 -00151
139 Fig. 57・67	SK65	弥生土器	甕		9.0	(6.3)	にぶい黄褐色 黒色	にぶい黄褐色 黒色	ナデ	ナデ	4mm程度の砂粒 角閃石		200006 -00161
140 Fig. 57・67	SK100	弥生土器	甕	25.4		(15.7)	にぶい褐色	にぶい褐色	ヨコナデ 刷毛目	ナデ	3mm程度の砂粒 金雲母	口縁部下に突帯	200006 -00193
141 Fig. 57	SK100	弥生土器	甕	25.5		(18.2)	にぶい黄褐色	にぶい褐色	ヨコナデ 刷毛目	ナデ	砂粒 金雲母		200006 -00192
142 Fig. 57・67	SK100	弥生土器	甕			(2.7)	浅黄色	浅黄色	ヨコナデ	ヨコナデ	3mm程度の砂粒 金雲母	口縁端部に刻目 甕棺	200006 -00195
143 Fig. 57・67	SK100	弥生土器	甕		6.5	(8.2)	にぶい黄褐色	浅黄色 黒色	刷毛目 ナデ	ナデ	3mm程度の砂粒 金雲母		200006 -00196
144 Fig. 57・67	SK100	弥生土器	甕		6.4	(4.8)	明褐色	黒色	刷毛目 ナデ	ナデ	3mm程度の砂粒 金雲母		200006 -00198
145 Fig. 57・67	SK100	弥生土器	甕		6.4	(5.2)	橙色	浅黄色	刷毛目 ナデ	ナデ	3mm程度の砂粒 金雲母		200006 -00197
146 Fig. 57・67	SK100	弥生土器	壺	18.0	5.6	24.2	明黄褐色 黒色	にぶい黄褐色	ヨコナデ ミガキ	ミガキ ナデ	砂粒		200006 -00199
147 Fig. 58・63	SK100	安山岩	敲石	(8.5)	(4.8)	5.0	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色				重量210g	200006 -00200
148 Fig. 58・68	SK110	弥生土器	甕			(7.5)	橙色	橙色	ヨコナデ 刷毛目	ナデ	5mm程度の砂粒 角閃石		200006 -00222
149 Fig. 58・67	SK110	弥生土器	甕		6.4	(3.8)	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	刷毛目 ナデ	ナデ	4mm程度の砂粒		200006 -00226
150 Fig. 58・68	SK110	弥生土器	甕		8.4	(5.2)	橙色	にぶい黄褐色	刷毛目 ナデ	ナデ	3mm程度の砂粒		200006 -00225
151 Fig. 58・68	SK110	弥生土器	蓋	6.0		(5.0)	橙色 黒色	—	刷毛目 ナデ	剥落	3mm程度の砂粒 角閃石		200006 -00227
152 Fig. 58・68	SK110	弥生土器	甕	48.0		(8.3)	浅黄褐色	灰黄褐色	ヨコナデ ナデ	ナデ	6mm程度の砂粒		200006 -00223
153 Fig. 58・68	SK110	弥生土器	甕	54.0		(11.4)	浅黄色	にぶい黄褐色	ヨコナデ ナデ	ナデ	砂粒		200006 -00224
154 Fig. 58・68	SK125	弥生土器	甕		5.7	(7.4)	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	刷毛目 ナデ	ナデ	3mm程度の砂粒		200006 -00239
155 Fig. 58・68	SK125	弥生土器	器台		10.0	(9.9)	明褐色	にぶい黄褐色	刷毛目 ヨコナデ	ナデ押さえ	4mm程度の砂粒		200006 -00240
156 Fig. 58・68	SK145	弥生土器	甕	24.0		(3.9)	にぶい黄褐色	にぶい黄色	ヨコナデ 刷毛目	ナデ	3mm程度の砂粒		200006 -00291
157 Fig. 58・68	SK145	弥生土器	甕			(3.2)	にぶい黄褐色	灰褐色	ヨコナデ	ナデ	砂粒		200006 -00292
158 Fig. 58・68	SK145	弥生土器	甕		6.0	(4.2)	にぶい黄褐色 黒色	にぶい黄褐色	ミガキ ナデ	ナデ	3mm程度の砂粒		200006 -00296
159 Fig. 58・68	SK145	弥生土器	甕		7.0	(6.6)	にぶい黄褐色	黒色	刷毛目 ナデ	ナデ	5mm程度の砂粒 角閃石		200006 -00294
160 Fig. 58・68	SK165	弥生土器	甕	26.0		(5.54)	にぶい黄色	橙色	ヨコナデ ナデ	ナデ	3mm程度の砂粒	口縁部下に突帯	200006 -00311
161 Fig. 58・68	SK165	弥生土器	甕	28.0		(6.0)	橙色	にぶい黄褐色	ヨコナデ 刷毛目	ナデ	砂粒	口縁部下に突帯	200006 -00313
162 Fig. 58・68	SK165	弥生土器	甕	26.0		(5.6)	明赤褐色	明赤褐色	ヨコナデ 刷毛目	ナデ	6mm程度の砂粒 金雲母		200006 -00312
163 Fig. 58・68	SK165	弥生土器	甕		6.6	(9.5)	橙色	橙色 黒色	刷毛目 ナデ	ナデ	4mm程度の砂粒		200006 -00314
164 Fig. 58・68	SK165	弥生土器	甕		8.0	(6.6)	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ヨコナデ ナデ	ナデ押さえ	3mm程度の砂粒 角閃石		200006 -00315
165 Fig. 58・63	SK165	黒曜石	石鏃	2.6	1.5	0.35	黒色	黒色				重量1.3g	200006 -00316

Tab. 8 市ノ上北屋敷遺跡第5次調査出土遺物観察表⑦

遺物No	出土遺構	材質	器種	法 量			色 調		調 整		胎 土	備 考	登録番号
				口 径 (長)	底 径 (幅)	器 高 (厚)	外 面	内 面	外 面	内 面			
166 Fig. 59・68	SK170	弥生土器	甕			(5.2)	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ヨコナデ 刷毛目	ナデ	5mm程度の砂粒		200006 -00318
167 Fig. 59・68	SK170	弥生土器	甕			(2.3)	にぶい黄褐色	浅黄色	ヨコナデ	ナデ	3mm程度の砂粒		200006 -00319
168 Fig. 59・68	SK170	弥生土器	甕		9.0	(6.3)	浅黄褐色	浅黄褐色	刷毛目 ナデ	ナデ	3mm程度の砂粒 金雲母		200006 -00320
169 Fig. 59・68	SK170	弥生土器	甕		6.4	(6.0)	にぶい 橙色	にぶい黄褐色 黒色	刷毛目 ナデ	ナデ	4mm程度の砂粒 金雲母		200006 -00322
170 Fig. 59・68	SK170	弥生土器	甕		6.4	(6.2)	明赤褐色	黒色	刷毛目 ナデ	ナデ	5mm程度の砂粒		200006 -00323
171 Fig. 59・68	SK170	弥生土器	甕		6.4	(5.8)	橙色	黒色	刷毛目 ナデ	ナデ	砂粒、金雲母 角閃石		200006 -00321
172 Fig. 59・69	SK170	弥生土器	鉢		4.0	(6.9)	にぶい黄褐色 黒色	褐灰色	剥落	ナデ	3mm程度の砂粒 角閃石		200006 -00324
173 Fig. 59・69	SK180	弥生土器	甕		11.6	(5.8)	橙色	明赤褐色	ナデ	剥落	3mm程度の砂粒 金雲母	甕棺	200006 -00329
174 Fig. 59・69	SK180	弥生土器	壺	23.2		(10.3)	明赤褐色	明褐色	ヨコナデ ナデ	ミガキ ナデ	砂粒、金雲母 角閃石		200006 -00330
175 Fig. 59・64	SK180	粘板岩	片刃石斧	6.0	2.2	1.0	灰黄色	灰黄色				重量27.2g	200006 -00331
176 Fig. 59・69	ST80	弥生土器	小壺			(4.8)	褐色	橙色	ミガキ	ナデ	細砂粒 角閃石		200006 -00170
177 Fig. 59・69	ST80	碧玉	管玉	2.2	0.7	0.7	緑灰色	緑灰色				重量1.6g	200006 -00171
178 Fig. 59・63	SD30	黒曜石	石鏃	1.7	1.7	0.3	黒色	黒色				重量0.8g	200006 -00007
179 Fig. 59・64	SD20	砂岩	砥石	(9.5)	9.0	4.2	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色				重量576g 4面使用	200006 -00015
180 Fig. 59・69	SD20	白磁	碗			(5.0)	灰白色	灰白色	回転ナデ ケズリ	回転ナデ	白色精良	碗IV類	200006 -00014
181 Fig. 59・69	SD20	弥生土器	器台	9.2	9.4	15.1	浅黄褐色	浅黄褐色	ナデ	ナデ押さえ	4mm程度の砂粒 角閃石、金雲母		200006 -00012
182 Fig. 59・69	SD20	弥生土器	器台		8.5	(13.0)	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	刷毛目 ヨコナデ	ナデ押さえ	5mm程度の砂粒 角閃石、金雲母		200006 -00013
183 Fig. 59・69	SD30	弥生土器	甕		10.4	(5.6)	にぶい褐色	にぶい褐色	刷毛目 ナデ	ナデ	砂粒 金雲母		200006 -00029
184 Fig. 59・69	SD30	弥生土器	甕		6.1	(5.8)	にぶい黄褐色 灰黄褐色	灰色	刷毛目 ナデ	ナデ	細砂粒 角閃石、金雲母		200006 -00027
185 Fig. 59・69	SD30	弥生土器	甕		6.5	(5.4)	橙色 赤褐色	にぶい褐色	刷毛目 ナデ	ナデ	4～5mmの砂粒 角閃石、金雲母		200006 -00028
186 Fig. 59・69	SD30	白磁	碗		7.0	(1.8)	灰白色	灰白色	ケズリ	回転ナデ	白色精良	碗IV類	200006 -00030
187 Fig. 59・69	SD30	青磁	碗		6.2	(2.1)	明緑灰色	明緑灰色	ケズリ	回転ナデ	灰白色精良	龍泉窯系	200006 -00031
188 Fig. 59・69	SD30	瓦	軒丸				灰色 黒色	灰色 黒色	ナデ	ナデ 縄目	精良		200006 -00032
189 Fig. 60・63	SD105	安山岩	蔽石	7.9	7.3	4.5	灰白色	灰白色				重量282g	200006 -00218
190 Fig. 60・63	SD105	黒曜石	石鏃	2.4	(1.6)	0.25	黒色	黒色				重量1.1g 未製品	200006 -00219
191 Fig. 60・69	SD105	弥生土器	甕		8.0	(6.0)	橙色	灰黄褐色	刷毛目 ナデ	ナデ	3mm程度の砂粒		200006 -00210
192 Fig. 60・69	SD105	弥生土器	甕		6.4	(5.2)	にぶい黄褐色	黒褐色	ナデ	ナデ	6mm程度の砂粒		200006 -00209
193 Fig. 60・69	SD105	弥生土器	甕		8.3	(6.1)	橙色	にぶい黄褐色	ナデ	ナデ	3mm程度の砂粒 角閃石		200006 -00211
194 Fig. 60・69	SD105	弥生土器	甕		7.1	(4.3)	にぶい黄色	黄灰色	ナデ	ナデ	砂粒 角閃石		200006 -00213
195 Fig. 60・69	SD105	弥生土器	甕		7.2	(3.6)	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	刷毛目 ナデ	ナデ	5mm程度の砂粒 角閃石		200006 -00212

Tab. 9 市ノ上北屋敷遺跡第5次調査出土遺物観察表⑧

遺物No	出土遺構	材質	器種	法 量			色 調		調 整		胎 土	備 考	登録番号
				口 径 (長)	底 径 (幅)	器 高 (厚)	外 面	内 面	外 面	内 面			
196 Fig. 60・69	SD105	土師器	小皿		4.4	(0.7)	浅黄褐色	浅黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	微砂粒	低部糸切り	200006 -00214
197 Fig. 60・69	SD105	瓦器	椀		8.0	(1.2)	灰白色	灰色	ヨコナデ	ヨコナデ	微砂粒	ヘラ記号あり	200006 -00215
198 Fig. 60・70	SD105	陶器	碗	11.0	4.2	3.9	浅黄褐色	浅黄褐色	回転ナデ ケズリ	回転ナデ	精良	唐津	200006 -00216
199 Fig. 60・70	SD105	陶器	碗		4.0	(4.2)	灰白色	灰白色	回転ナデ ケズリ	回転ナデ	精良		200006 -00217
200 Fig. 60・70	SD135	陶器	擂鉢			(6.2)	明赤褐色 黒褐色	明赤褐色 黒褐色	回転ナデ	回転ナデ	細砂粒		200006 -00272
201 Fig. 60	SE90	土師器	小皿		6.4	(5.8)	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	微砂粒		200006 -00178
202 Fig. 60・70	SE90	土師器	小皿		4.0	(6.9)	浅黄褐色 黒色	浅黄褐色 黒色	ヨコナデ	ヨコナデ	細砂粒	灯明	200006 -00177
203 Fig. 60・70	SE90	土師器	坏		11.6	(5.8)	にぶい黄褐色 黒色	にぶい黄褐色 黒色	ヨコナデ	ヨコナデ	3mm程度の砂粒 赤色粒子	灯明	200006 -00179
204 Fig. 60・70	SE90	土師器	焙烙	23.2		(10.3)	黒褐色	黒褐色	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	砂粒 金雲母		200006 -00180
205 Fig. 60・70	ST115	弥生土器	甕		8.3	(7.9)	にぶい黄褐色	灰黄褐色	刷毛目 ナデ	ナデ	5mm程度の砂粒		200006 -00230
206 Fig. 60・70	ST155	弥生土器	甕		6.8	(6.0)	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ミガキ ナデ	ミガキ ナデ	3mm程度の砂粒 角閃石		200006 -00304
207 Fig. 60・70	ST155	弥生土器	甕		6.4	(5.0)	明赤褐色	にぶい赤褐色 黒褐色	ナデ	剥落	1cm程度の礫 角閃石		200006 -00303
208 Fig. 60・70	ST155	弥生土器	器台		8.5	(10.8)	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	刷毛目 ヨコナデ	ナデ押さえ 刷毛目	6mm程度の砂粒 金雲母		200006 -00305
209 Fig. 60・70	ST160	磁器	碗	10.0		(2.0)	透明	透明	回転ナデ	回転ナデ	白色精良		200006 -00309
210 Fig. 60・70	SP42	弥生土器	甕	25.0		(5.6)	褐色	褐色	ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	5mm程度の砂粒		200006 -00106
211 Fig. 60・70	SP87	弥生土器	甕		8.0	(2.3)	赤色	—	ナデ	剥落	4mm程度の砂粒		200006 -00175
212 Fig. 60・70	SP117	弥生土器	甕		6.3	(3.9)	にぶい褐色	褐色	刷毛目 ナデ	ナデ	砂粒		200006 -00231
213 Fig. 60・70	SP189	弥生土器	甕		6.5	(6.9)	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	刷毛目 ナデ	ナデ	砂粒		200006 -00337
214 Fig. 60・70	SP101	弥生土器	甕		6.4	(19.1)	褐色	灰黄色	刷毛目 ナデ	ナデ	3mm程度の砂粒		200006 -00201
215 Fig. 60・70	SP157	弥生土器	甕		6.4	(3.6)	明赤褐色	灰褐色	ナデ	ナデ	3mm程度の砂粒		200006 -00308
216 Fig. 60・70	SP91	弥生土器	甕		8.0	(2.6)	明褐色	にぶい黄褐色	ナデ	ナデ	3mm程度の砂粒		200006 -00184
217 Fig. 60・70	SP151	弥生土器	甕		6.5	(4.9)	にぶい褐色	にぶい黄褐色	刷毛目 ナデ	ナデ	5mm程度の砂粒 角閃石		200006 -00300
218 Fig. 60・70	SP157	弥生土器	甕		6.2	(10.7)	明赤褐色	にぶい黄褐色 黒色	刷毛目 ナデ	ナデ	5mm程度の砂粒 角閃石		200006 -00307
219 Fig. 60・70	SP117	弥生土器	甕		7.4	(3.6)	褐色	暗赤褐色	ミガキ ナデ	ミガキ	砂粒		200006 -00235
220 Fig. 60・70	SP101	弥生土器	甕		6.0	(4.1)	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ミガキ ナデ	ナデ	砂粒 金雲母		200006 -00202
221 Fig. 61・70	表探	弥生土器	甕		8.0	(6.0)	浅黄色	黒褐色	刷毛目 ナデ	ナデ	5mm程度の砂粒		200006 -00338
222 Fig. 61・63	表探	黒耀石	石鏃	2.2	1.7	0.35	黒色	黒色				重量0.9g	200006 -00339
223 Fig. 61・63	表探	サヌカイト	石鏃	2.5	1.8	0.3	灰色	灰色				重量1.2g	200006 -00340
224 Fig. 61・63	表探	サヌカイト	石鏃	1.9	1.4	0.25	灰色	灰色				重量0.5g	200006 -00341
225 Fig. 61・63	表探	サヌカイト	石鏃	(1.4)	1.6	0.3	灰色	灰色				重量0.5g	200006 -00342

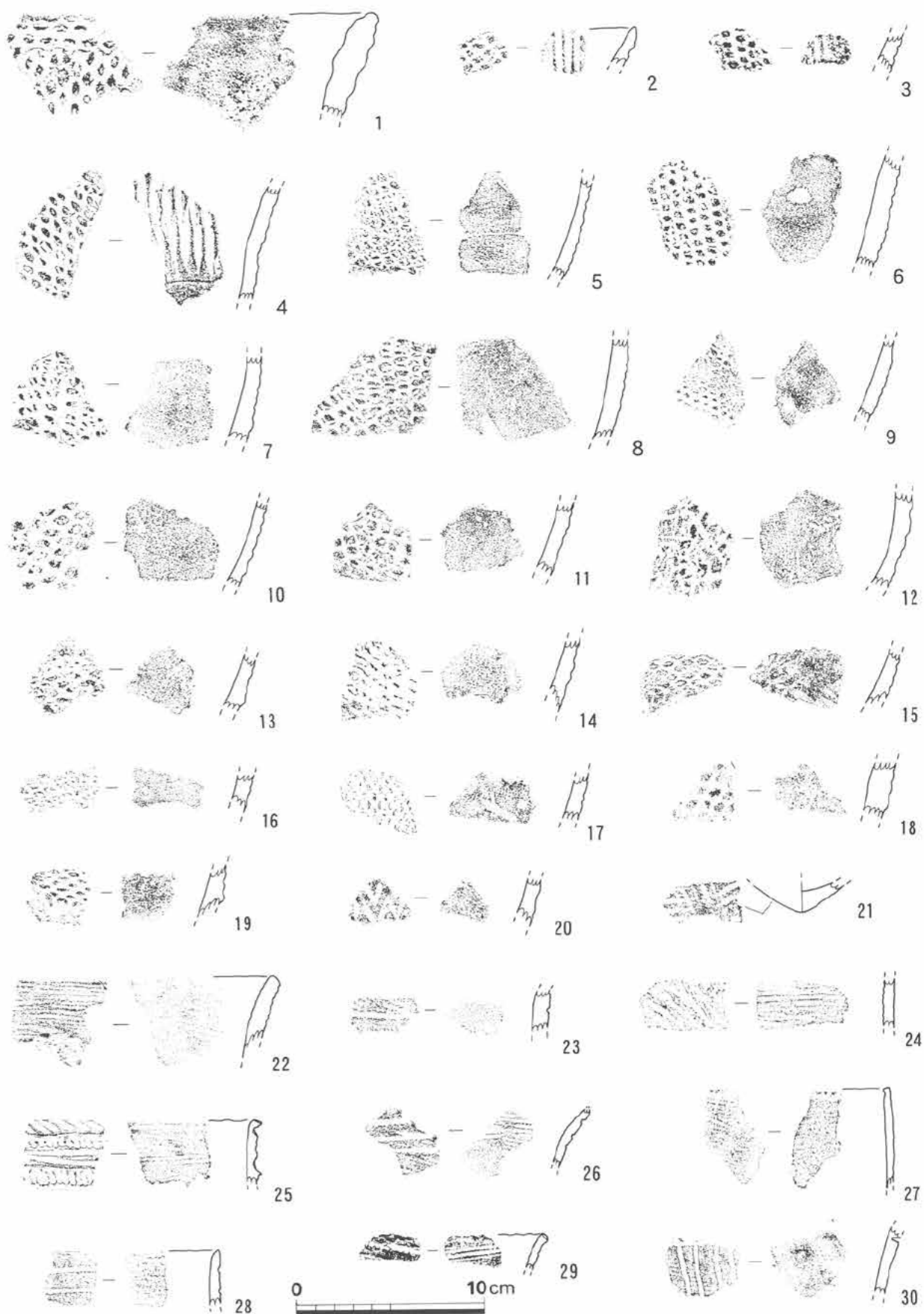


Fig. 51 縄文土器実測図① (1/3)

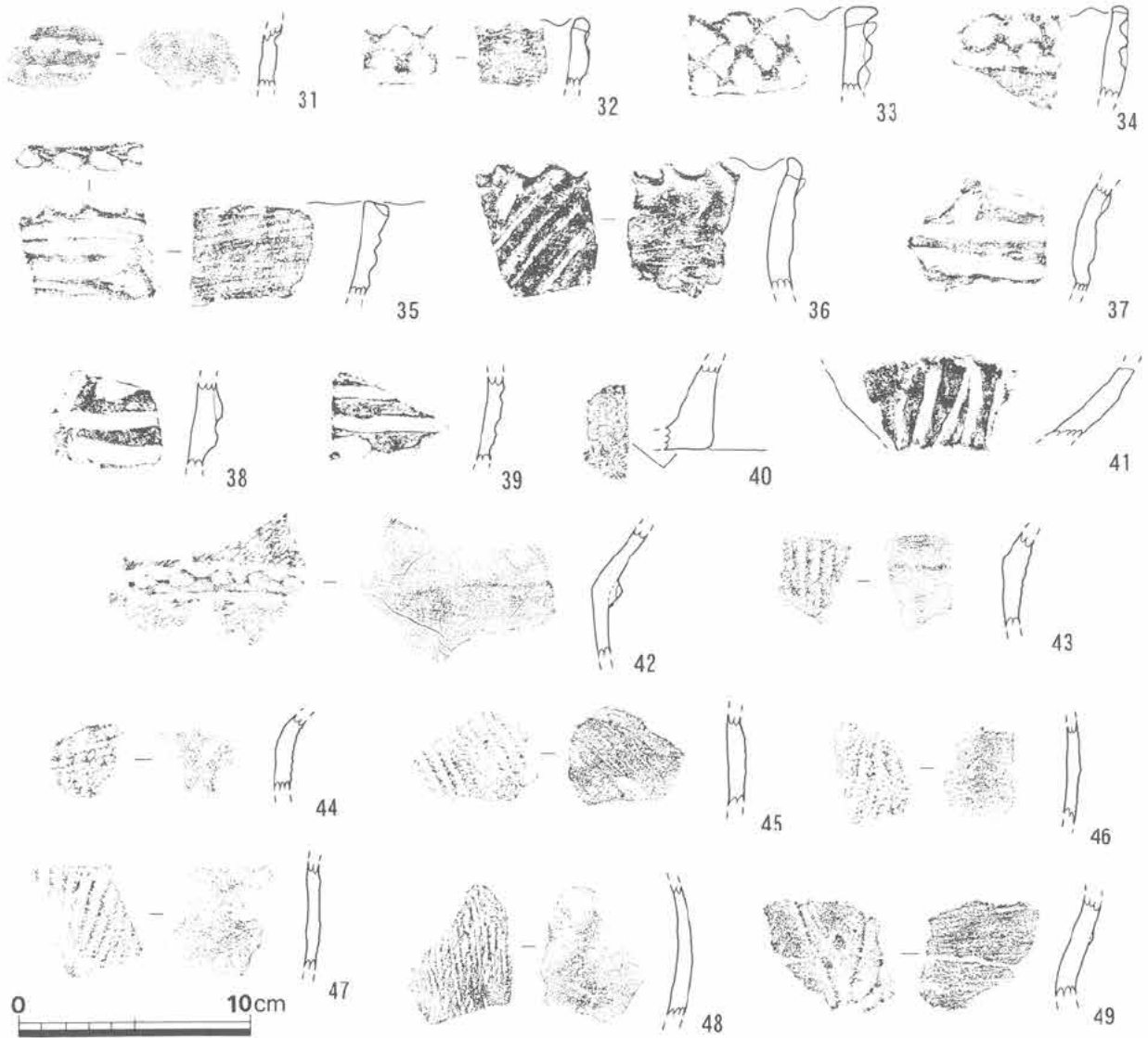


Fig. 52 縄文土器実測図② (1/3)

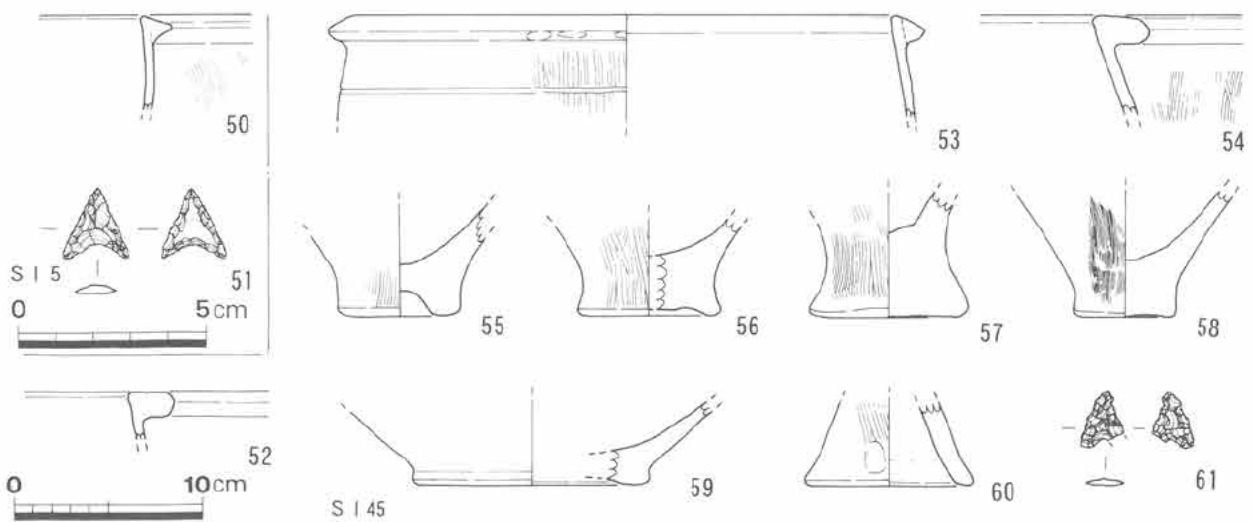


Fig. 53 S I 5・45 出土遺物実測図 (1/4, 1/2)

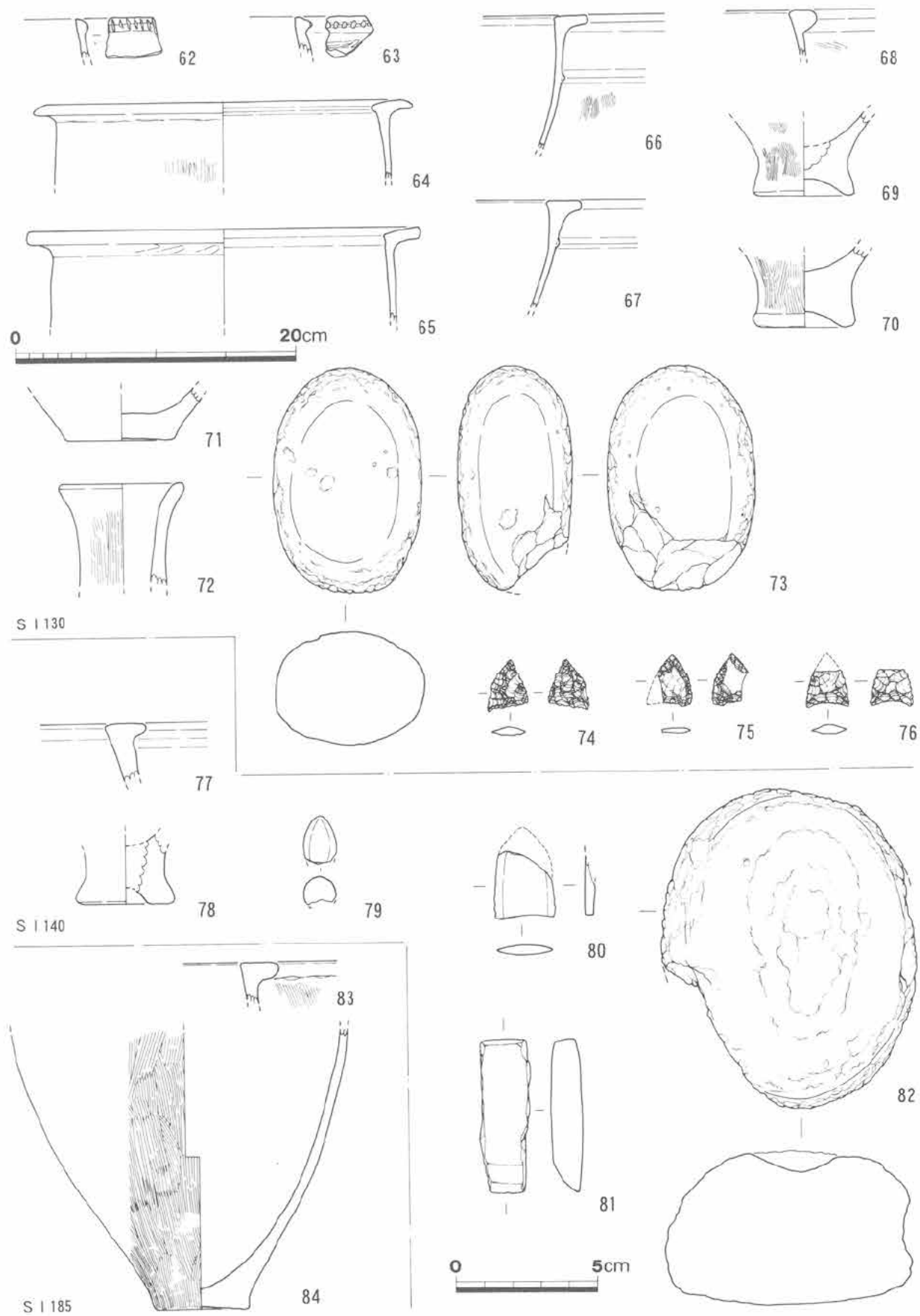


Fig. 54 S I 130・140・185 出土遺物実測図 (1/4, 1/2)

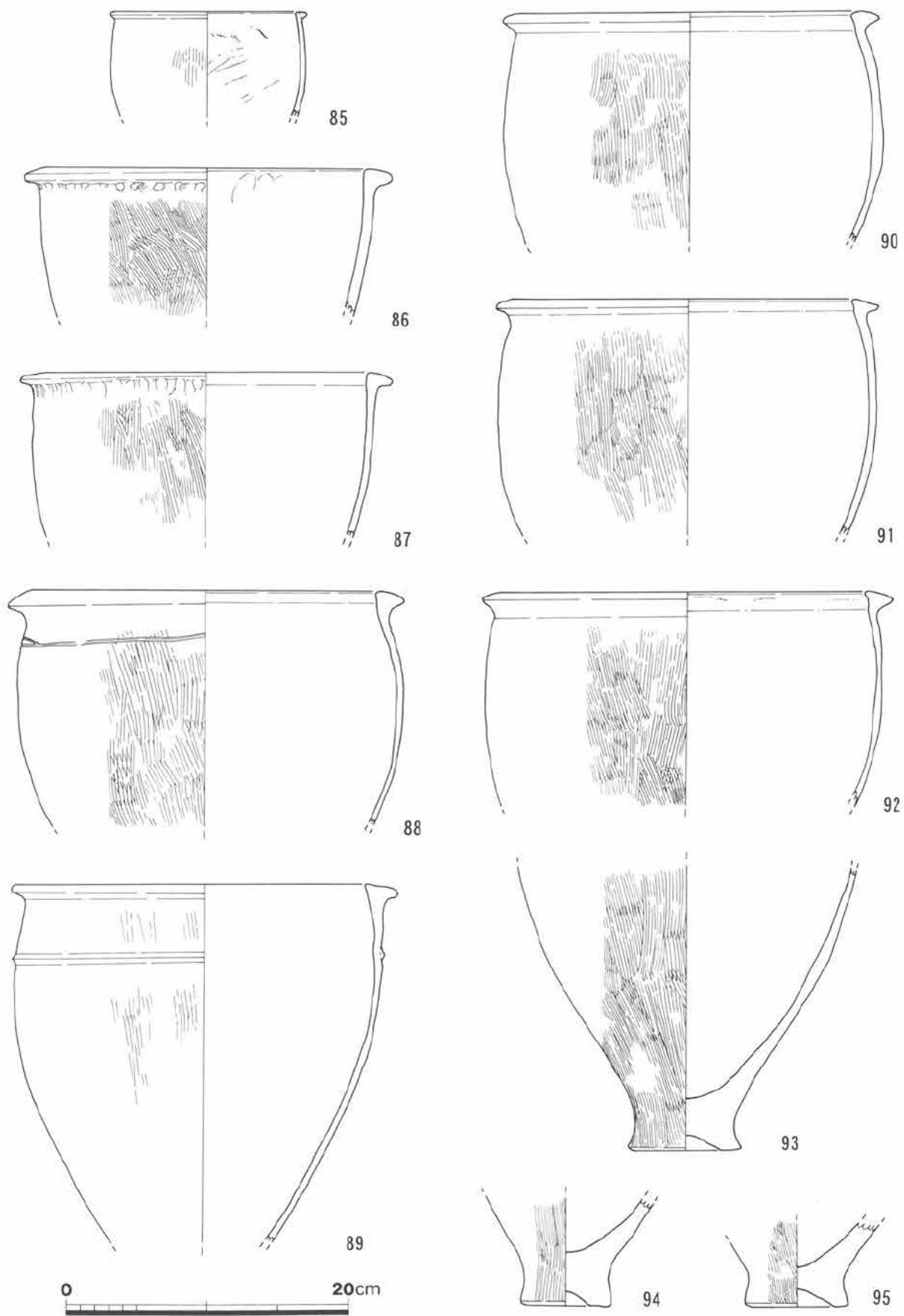


Fig. 55 SK35 出土遺物実測図① (1/4)

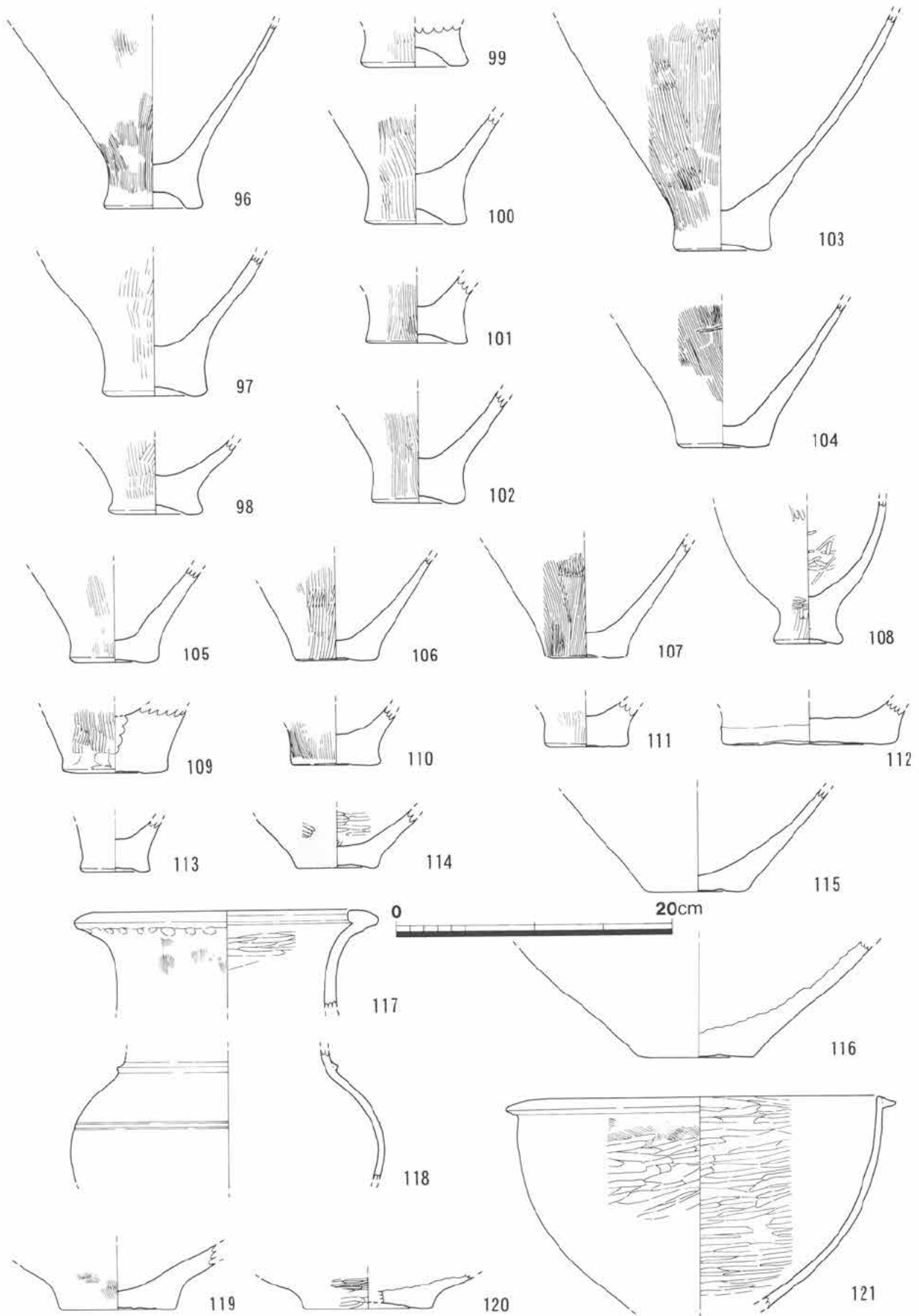


Fig. 56 SK35 出土遺物実測図② (1/4)

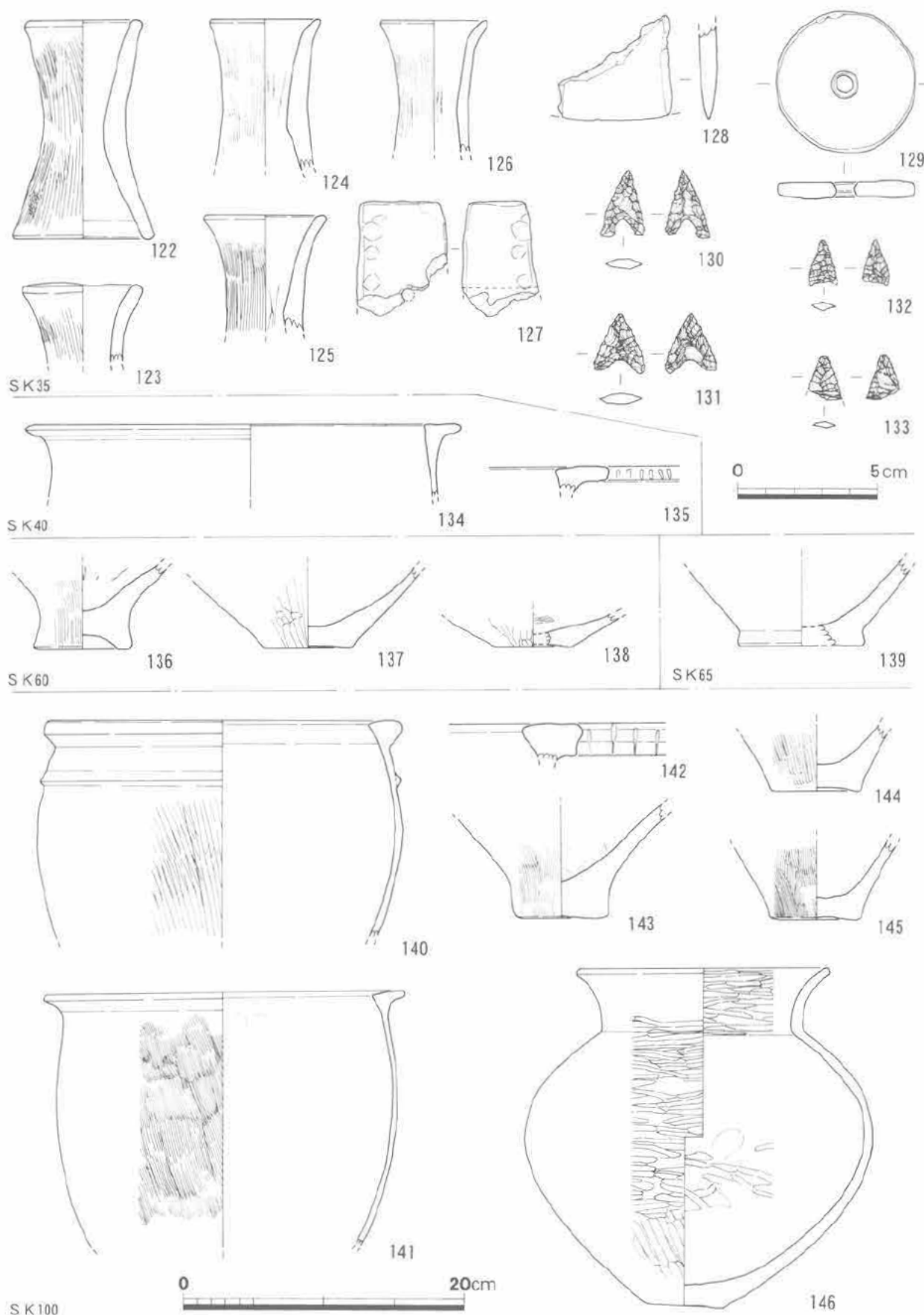


Fig. 57 SK35・40・60・65・100 出土遺物実測図 (1/4, 1/2)

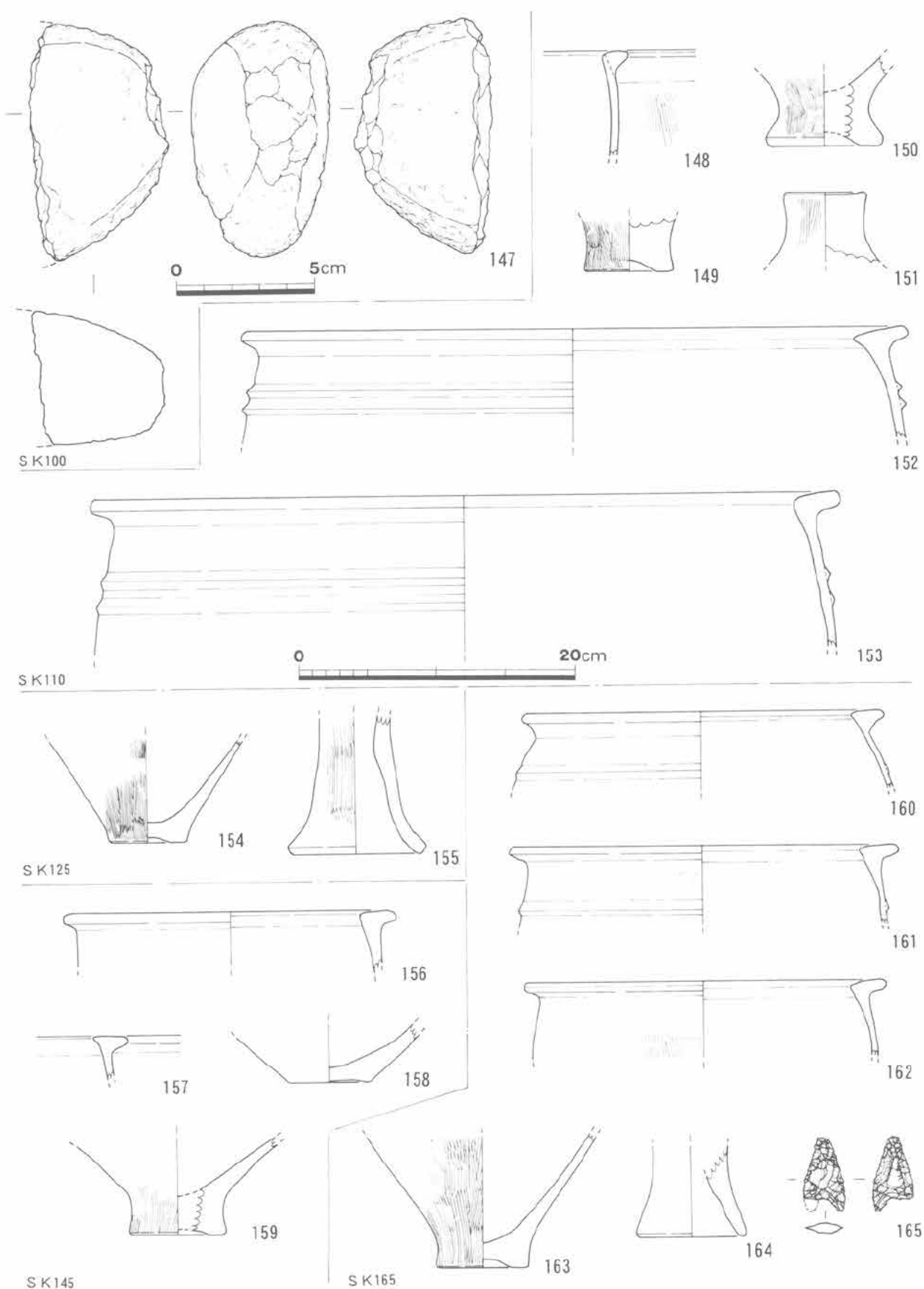


Fig. 58 SK100・110・125・145・165 出土遺物実測図 (1/4, 1/2)

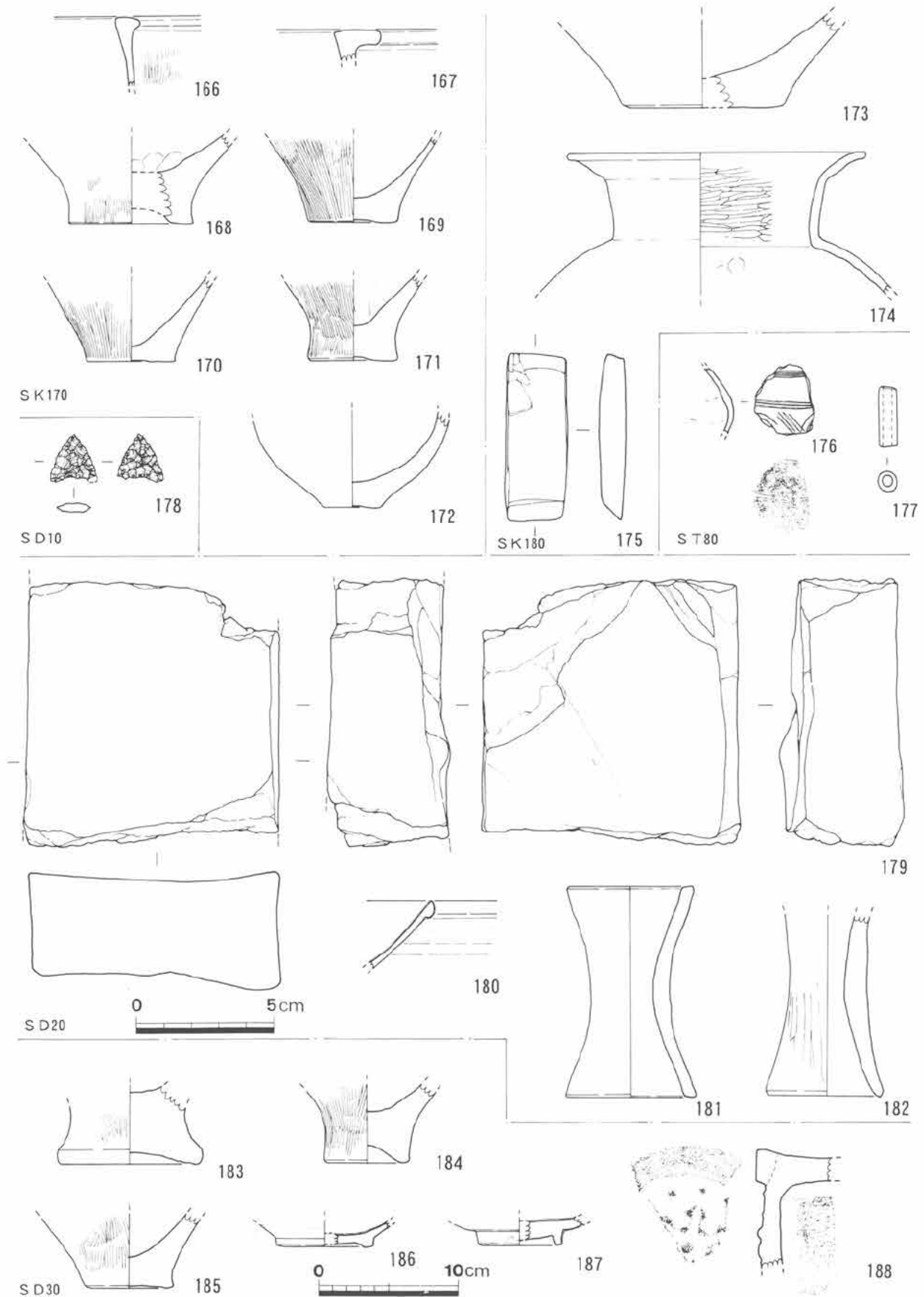


Fig. 59 SK170・180、ST80、SD10・20・30 出土遺物実測図 (1/4, 1/2)

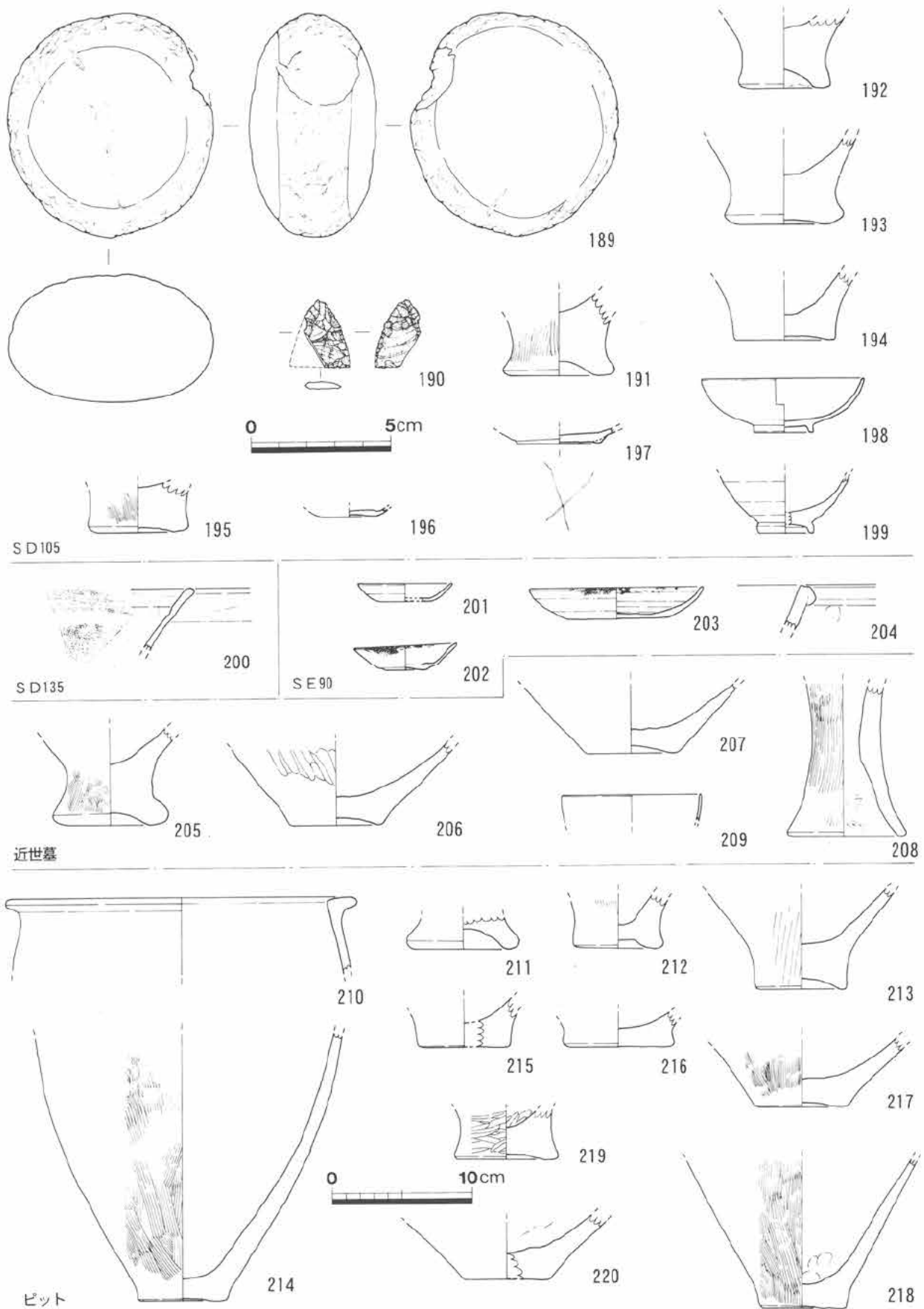


Fig. 60 SD105・135、SE90、近世墓、ピット出土遺物実測図（1/4, 1/2）

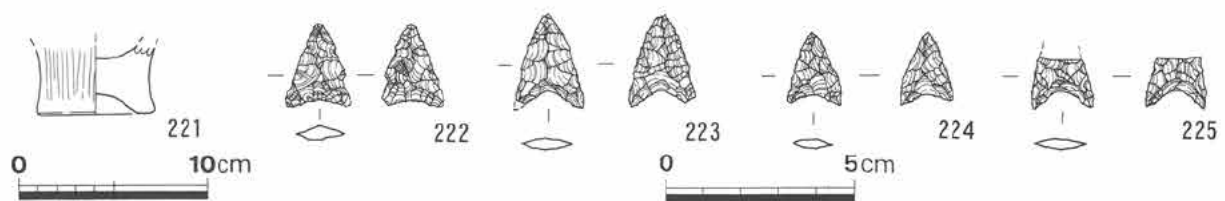


Fig. 61 表探遺物実測図 (1/4, 1/2)

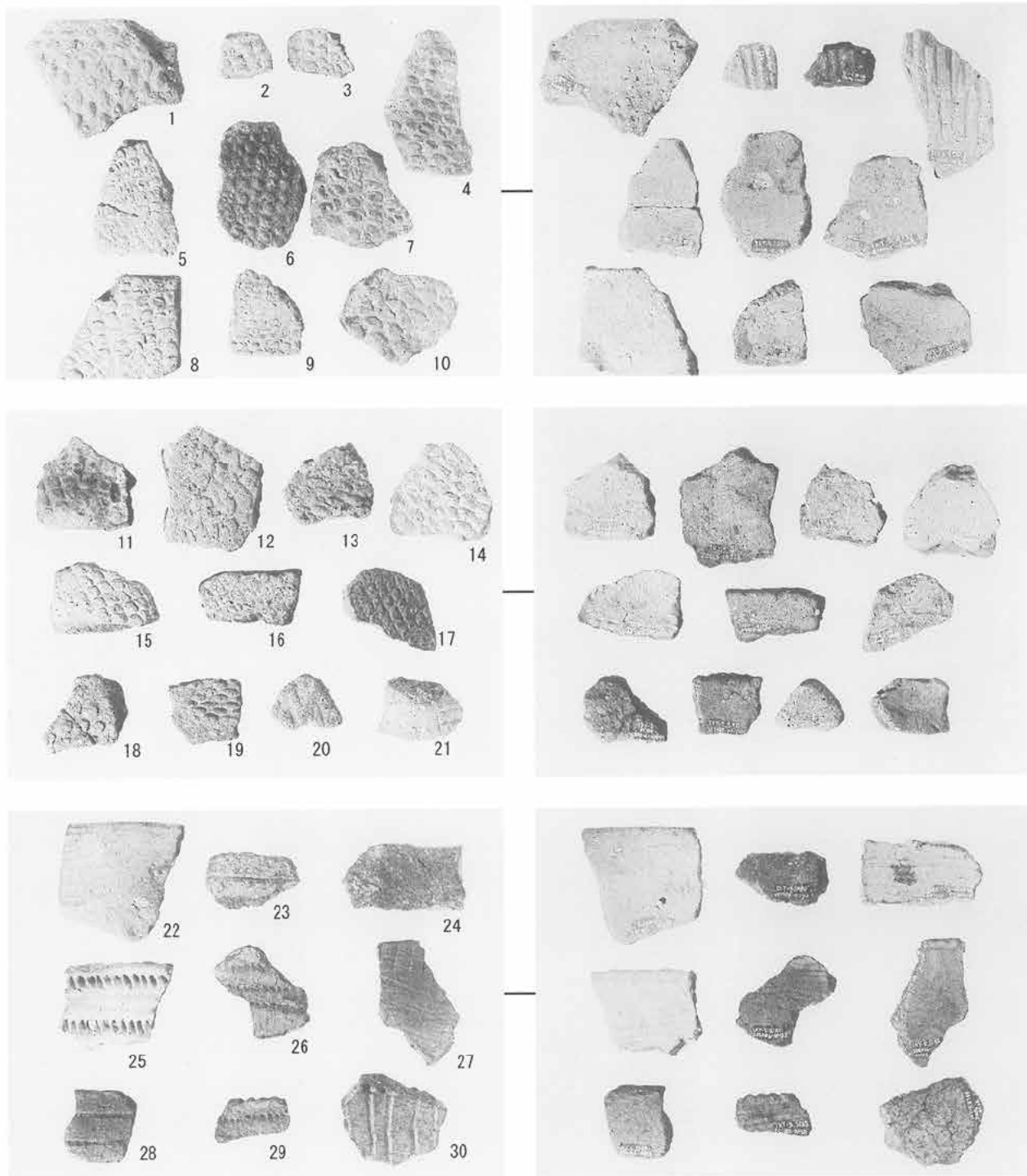


Fig. 62 出土遺物 (写真①)

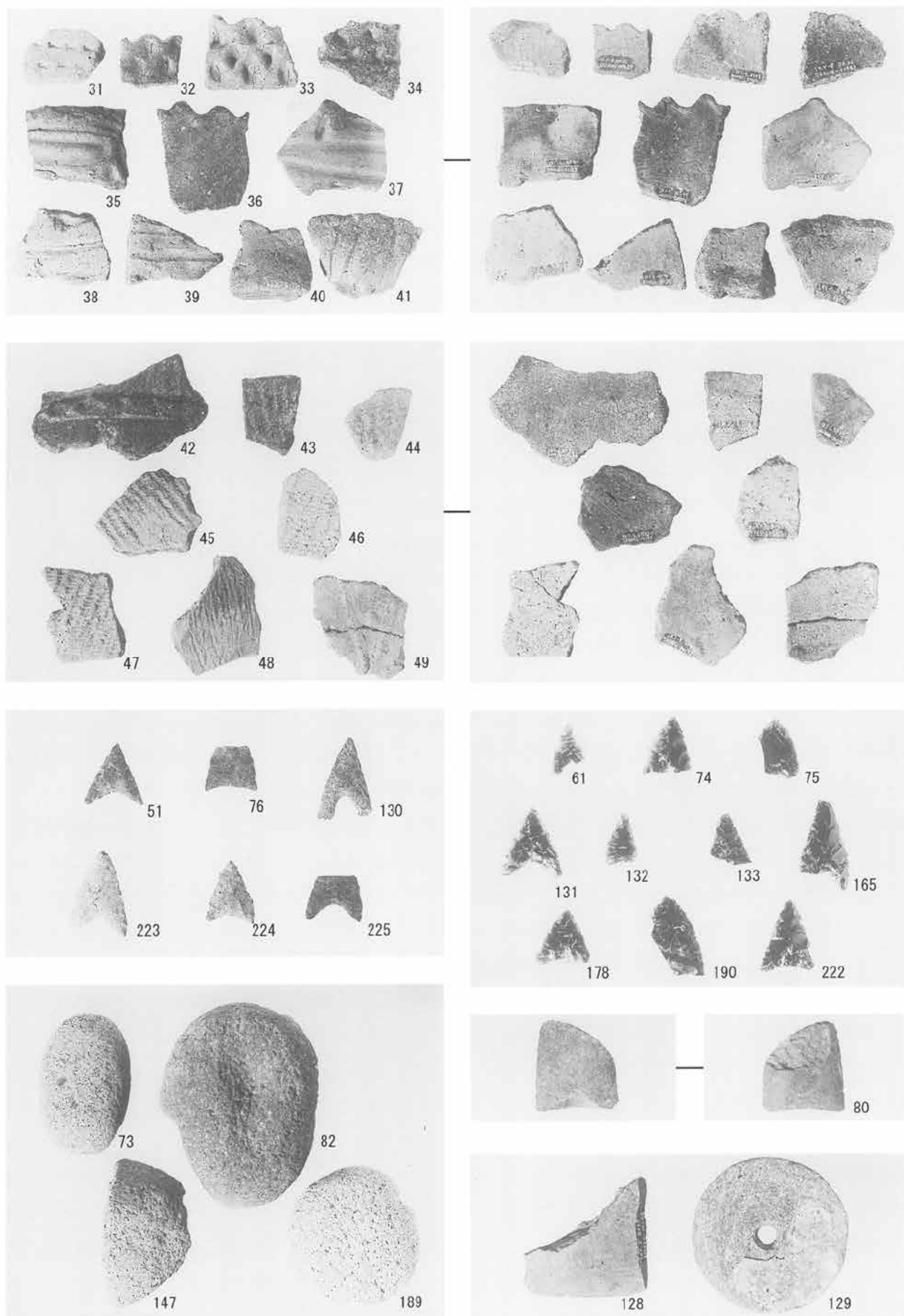


Fig. 63 出土遺物（写真②）

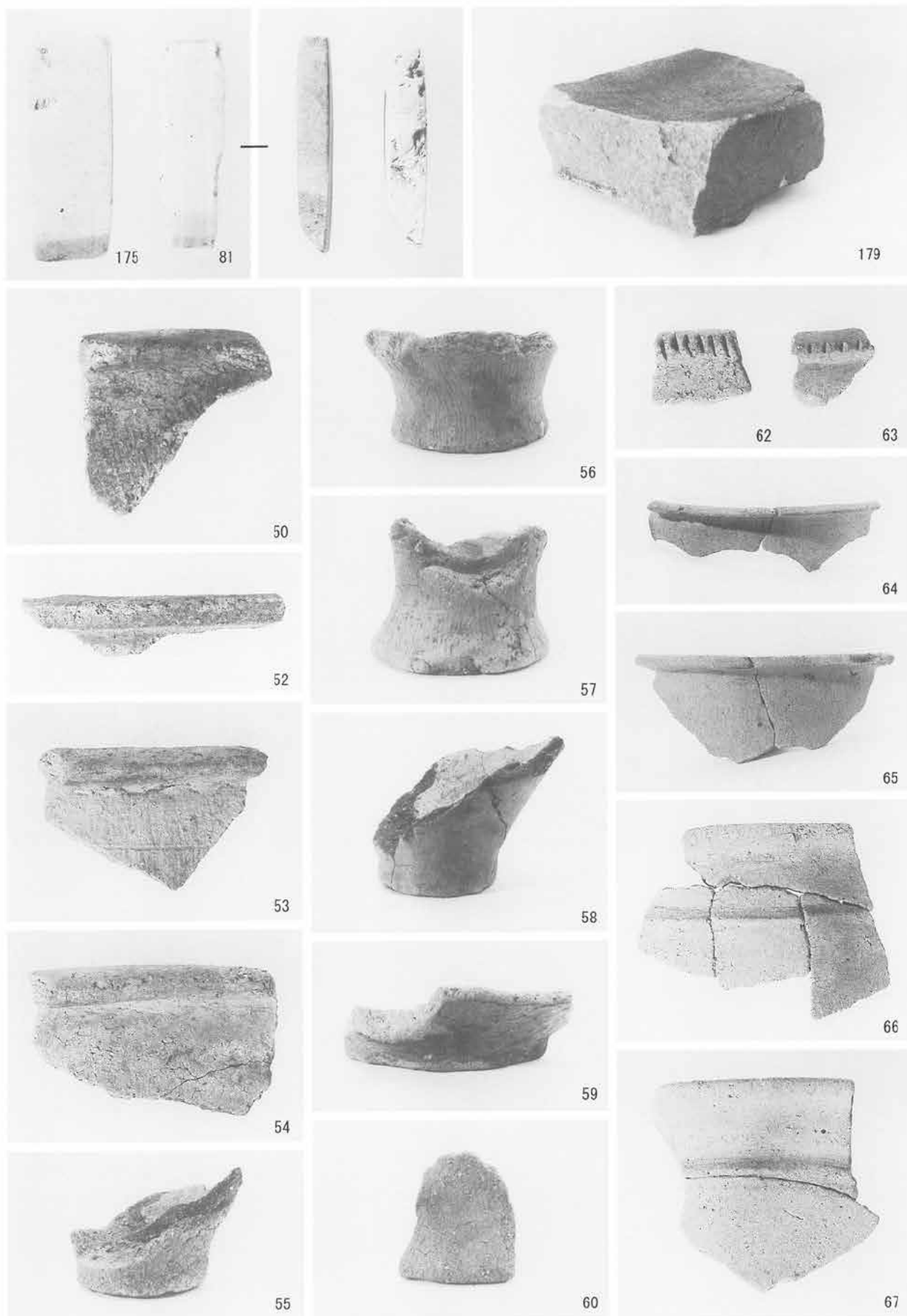


Fig. 64 出土遺物（写真③）

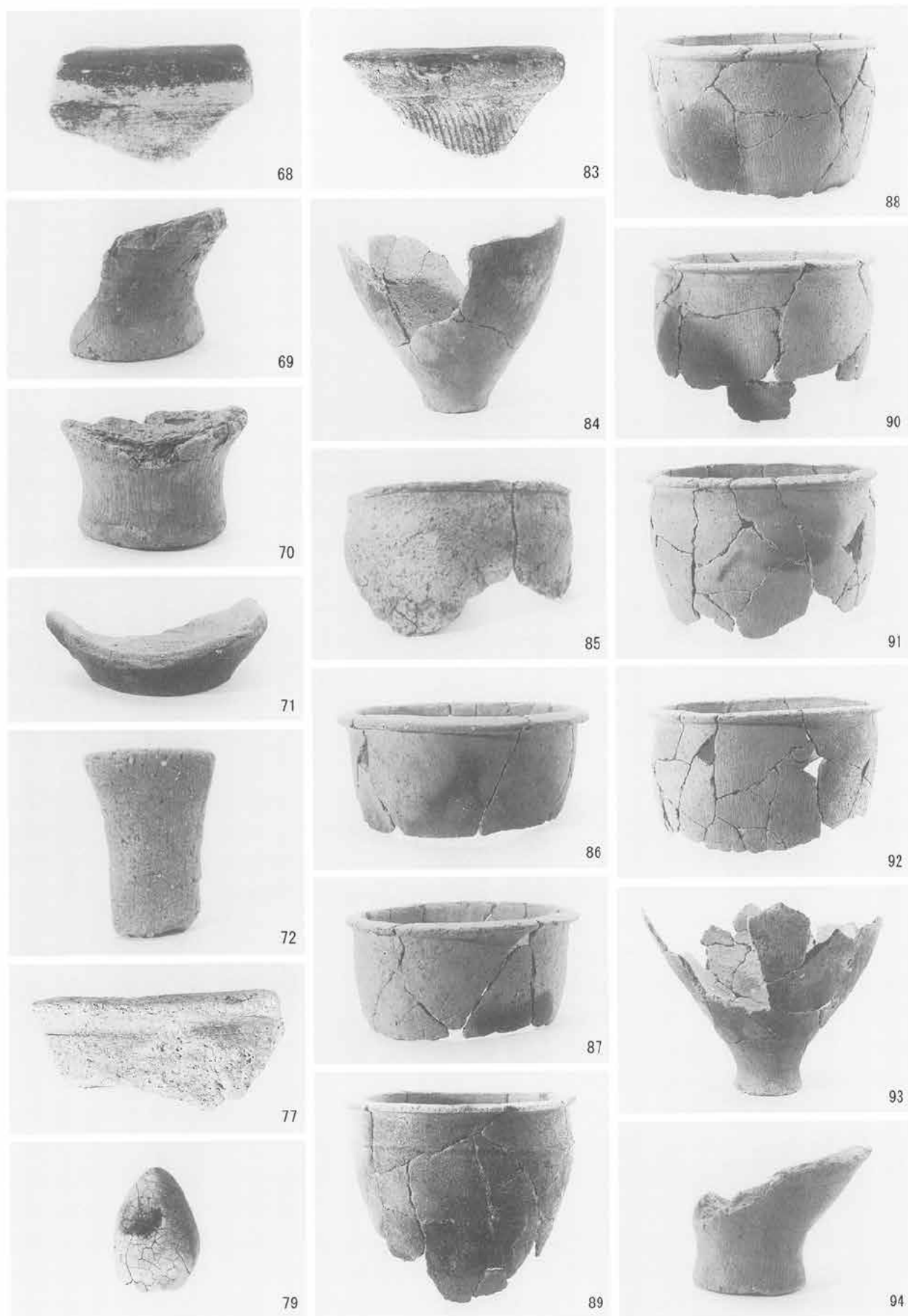


Fig. 65 出土遺物（写真④）

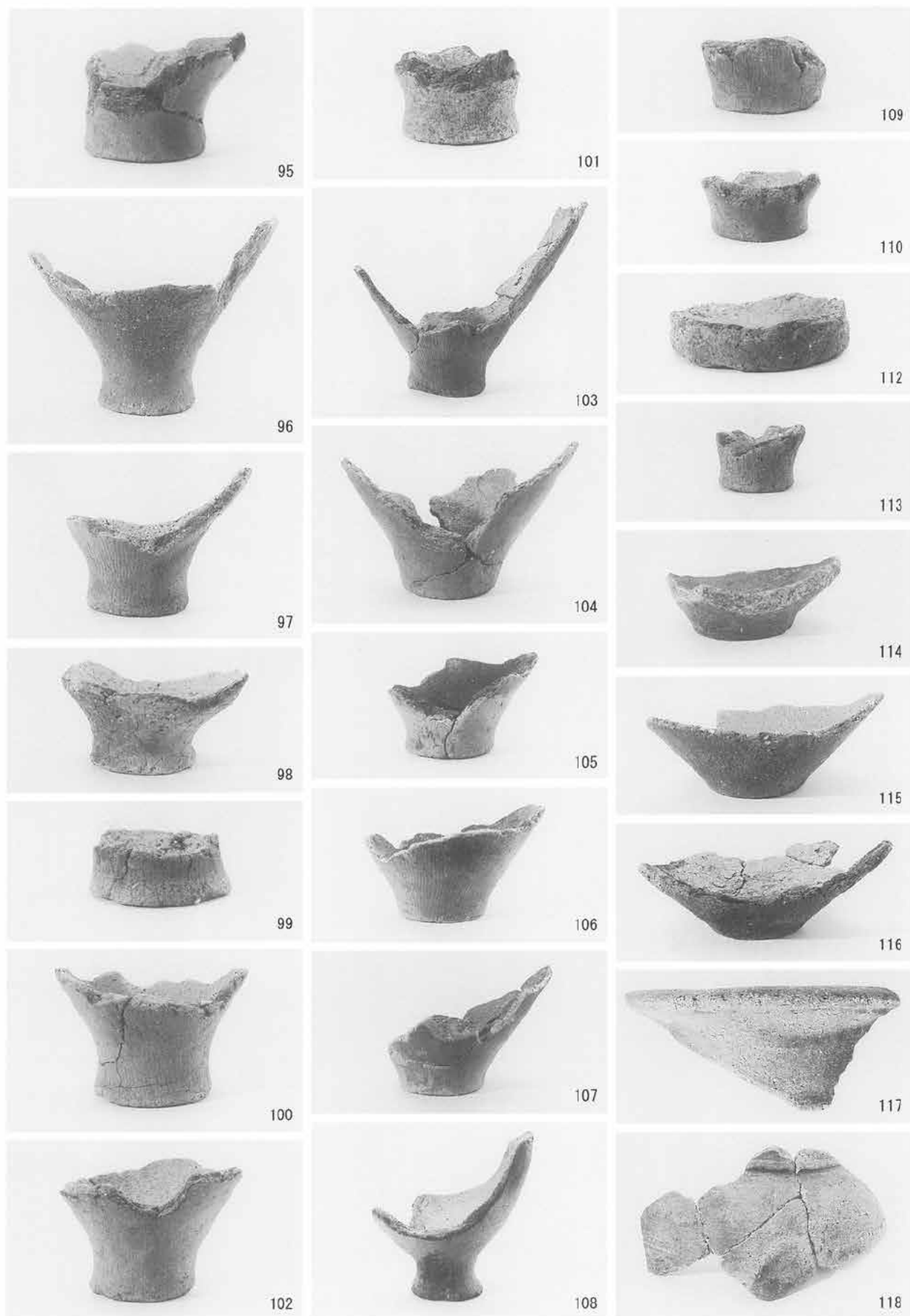


Fig. 66 出土遺物（写真⑤）

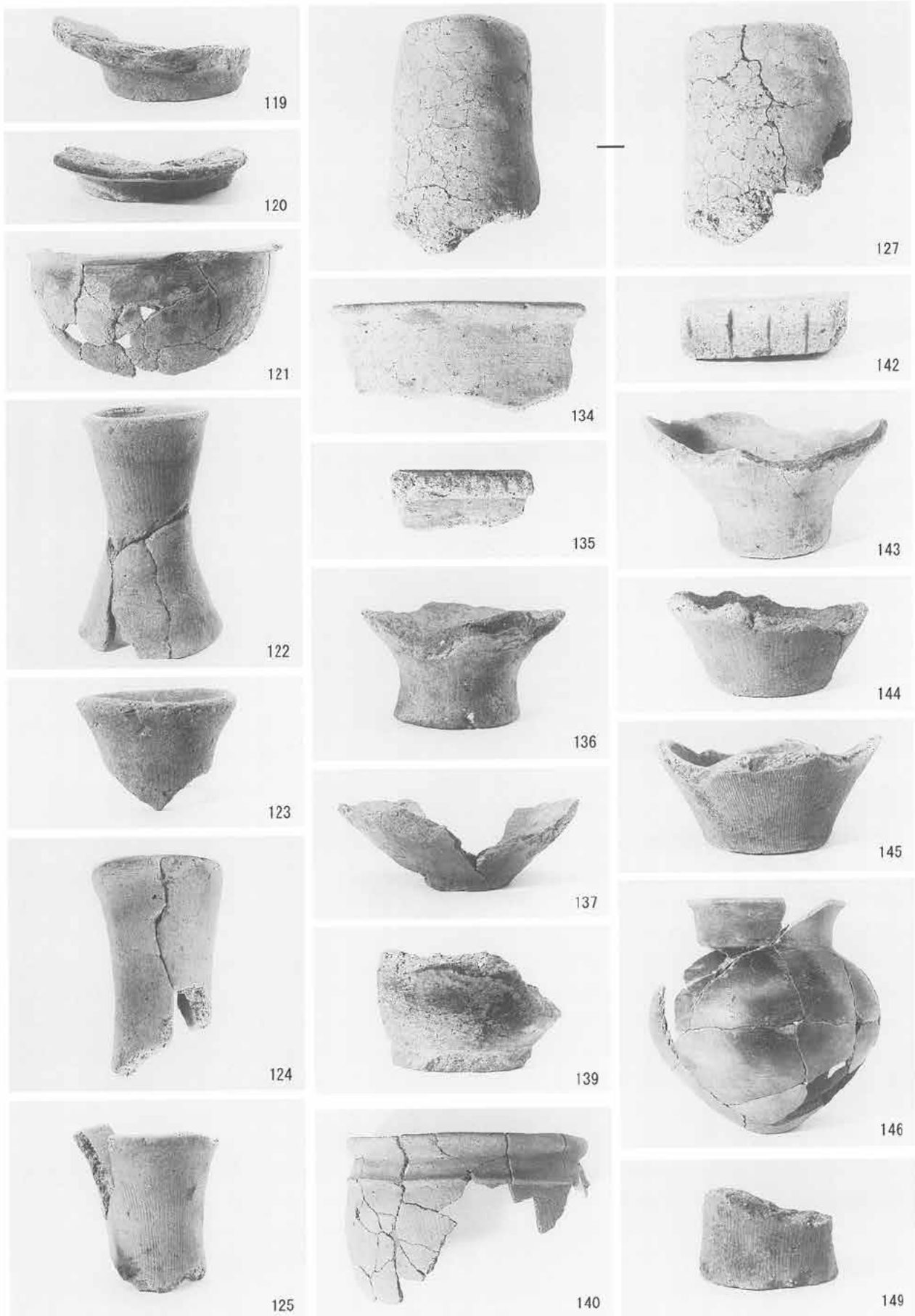


Fig. 67 出土遺物 (写真⑥)

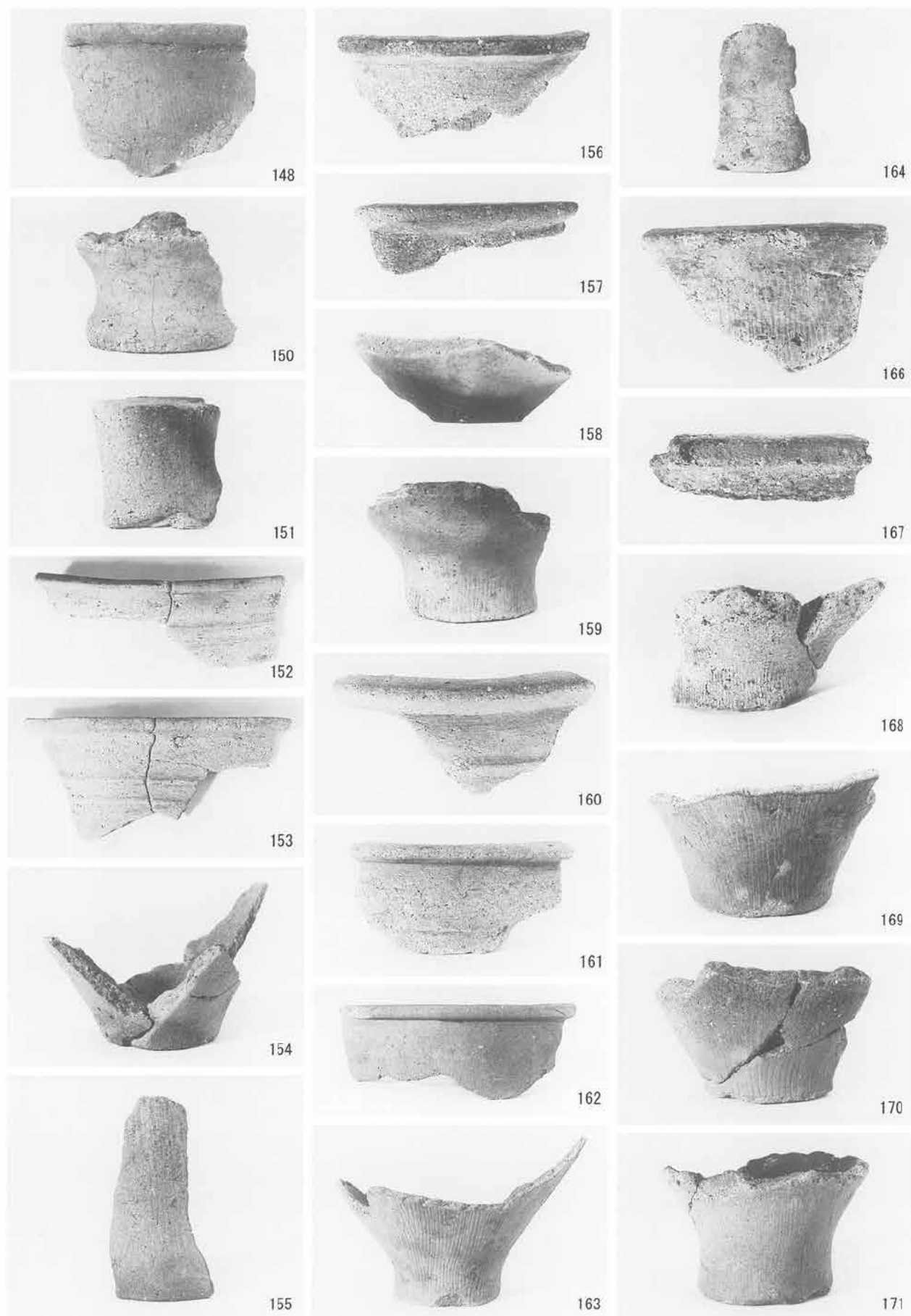


Fig. 68 出土遺物（写真⑦）

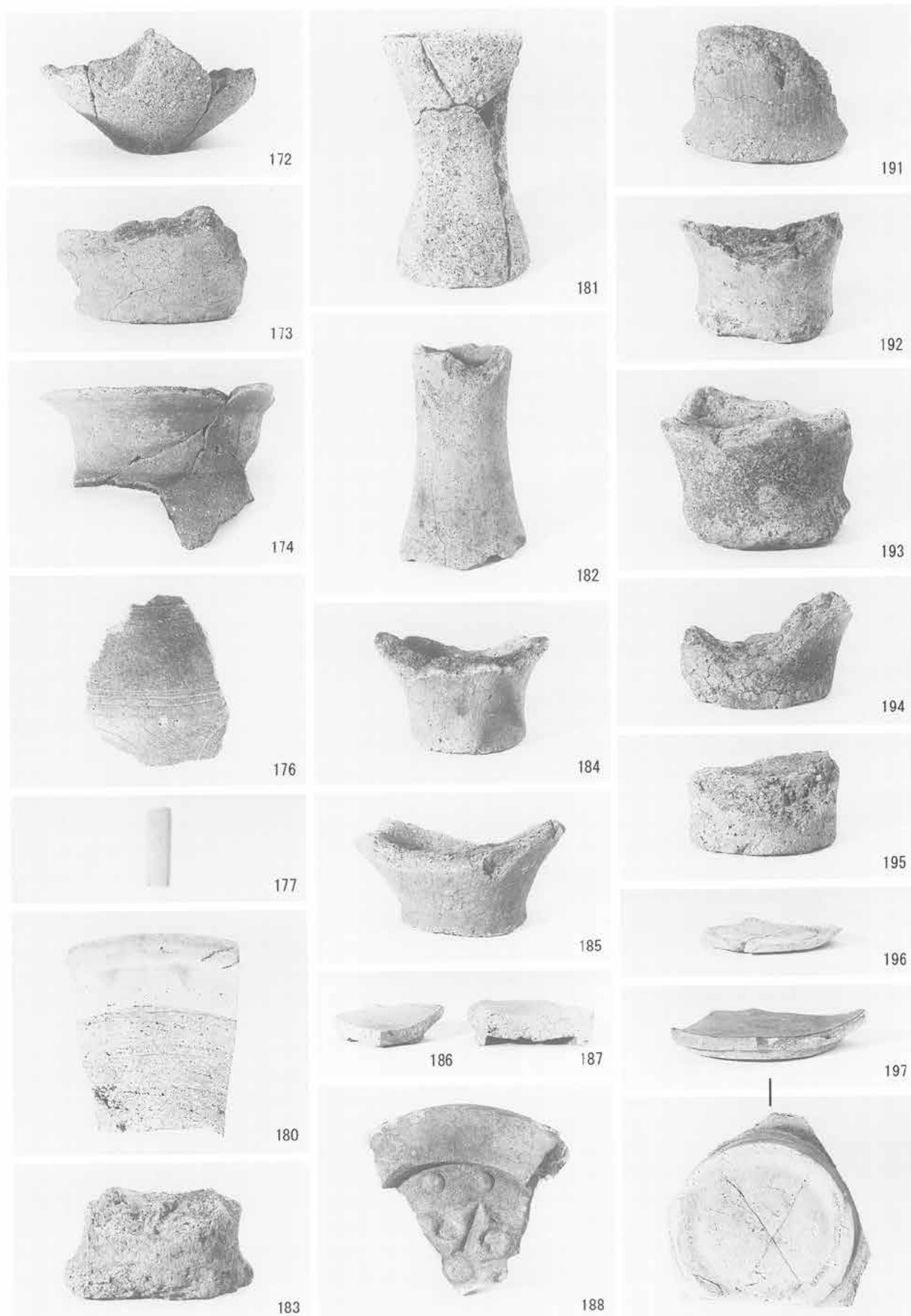


Fig. 69 出土遺物（写真⑧）

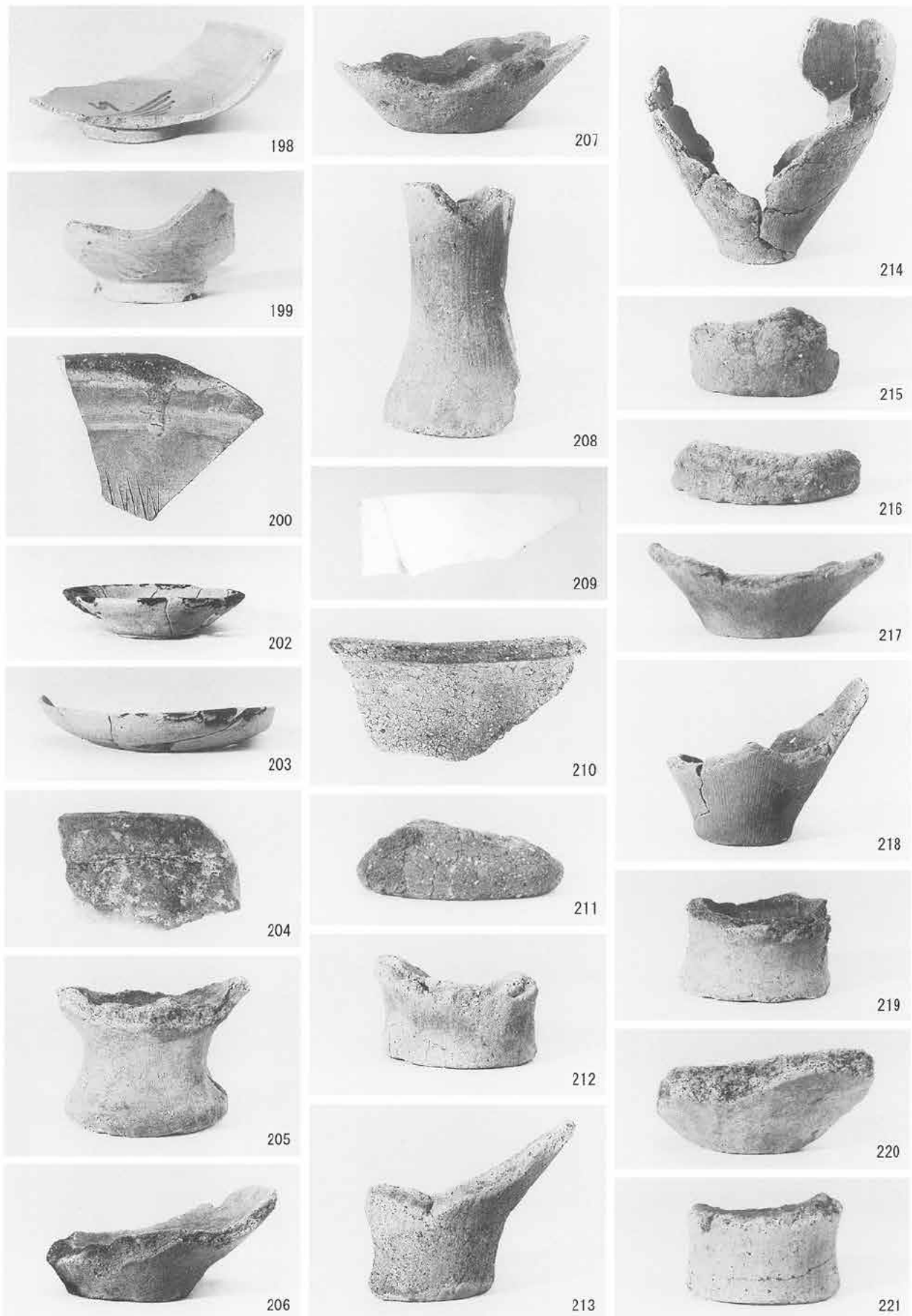


Fig. 70 出土遺物 (写真⑨)

4. ま と め

縄文土器について

今回の調査では計 141 点の縄文土器が出土した。前述したように出土状況は不安定であるが、市ノ上台地上における縄文期の状況を検討する上では貴重な資料であり、ここで簡単に整理しておきたい。なお、（ ）内の番号は Fig. 51・52 の遺物番号と同一である。

A 類（1～21） 早期の押型文土器である。

a：外面に楕円文を施し、内面に原体条痕を施すものも見られる。

b：山形文で、図示した 2 点のみの出土である。

B 類（22） 早期の条痕文土器と考えられる。図示した 1 点のみの出土である。

C 類（23） 外面に貝殻文を施す土器で、図示した 1 点のみの出土である。塞ノ神式か？

D 類（24） 条痕文土器の一群で、前期の轟式と考えられる。

E 類（25） 外面に刺突文を施し、内面は条痕を施すもので、図示した 1 点のみの出土である。焼成は非常に良好である。曾畑式の新しい段階の資料と考えられる。

F 類（26～29） 外面に二枚貝の腹縁による刺突文、内面は二枚貝の貝殻条痕を施す。前期の資料か？

G 類（30） 外面に沈線と刺突文を施した資料で、図示した 1 点のみの出土である。

H 類（31） 押引文で、図示した 1 点のみの出土である。

I 類（32～41） 胎土に大量の滑石粉末を含み、外面に凹点文・凹線文による文様を施した、いわゆる阿高式の系譜を引く坂の下式土器である。46 点と最も多く出土している。

J 類（42～49） 中期の船元式と考えられる。胎土に角閃石を多く含む。

a：外面に縄文を施すタイプである。

b：外面に低い突帯を貼り付けるタイプで、図示した 1 点のみの出土である。

分類別の出土数は上述したとおりで、早期～後期初頭の土器群が見られる。南隣りで実施した第 3 次調査では中期の土坑 6 基が確認され、阿高式系土器と船元式土器とが共伴することなく別々の土坑から出土し、且つ包含層中の出土傾向においても阿高式系土器が上層から、船元式土器が下層から出土するといった事実関係が認められている。遺跡の立地と併せて考えても、当時における瀬戸内地域との交流の一端が窺える事例として非常に興味深い。

石器について

Tab. 10 は今回の調査で出土した石器類の一覧で、表採資料を含む全ての遺構出土品をカウントしたものである。打製石器に関しては当然ながら縄文期と弥生期のものが混在しており、両者を区別することは容易でないが、肉眼観察で識別できる姫島産黒耀石は、その出土傾向から縄文時代早期にもたらされたものと考えられる。また、敲石・凹石等については両時期のものが混在している可能性が高い。大陸系磨製石器の出土比率については、組成に多くのノイズが含まれており、一概には判断できない。本遺跡とは

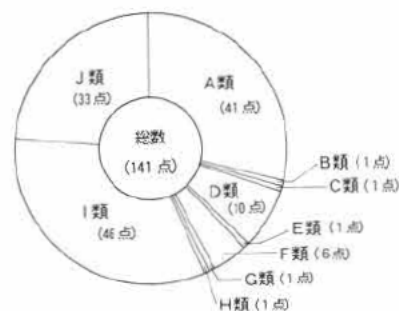


Fig. 71 縄文土器組成図

Tab. 10 出土石器組成一覧表

種別	石核			剥片			打製石鏃		石 皿	凹 石	敲 石	石 製 円 盤	磨 製 石 鏃	石 庖 丁	今山産磨製石斧	扁平片刃石斧	紡 錘 車	砥 石	軽 石	
	黒 耀 石	サ ヌ カ イ ト	チ ャ ー ト	黒 耀 石	姫島産黒耀石	サ ヌ カ イ ト	チ ャ ー ト	黒 耀 石												サ ヌ カ イ ト
数量	18	19	1	558	5	205	1	10	6	1	1	9	1	1	3	2	3	1	3	12

ば同時期の弥生集落が調査された、南東 3.5km の耳納連山北麓の扇状地上に立地する山川南本村遺跡では、前期末～中期初頭段階の出土石器組成が整理されており、大陸系磨製石器の出土比率が極めて低い点が指摘されている。この山川南本村遺跡の石器組成と比較した場合、本遺跡での大陸系磨製石器の占める割合が必ずしも少ないとはいえないものの、前期末の段階で既に一定量の大陸系磨製石器が認められる筑後川以北の福岡平野や三国丘陵上の集落と比較した場合、やはり筑後川以南の集落における出土傾向とは隔世の感がある点は否めない。

弥生時代の遺構・遺物について

竪穴住居 5 軒、土坑 13 基、土墳墓などが検出されたが、数基の土坑を除いては良好な出土遺物が認められず、遺構の細かな時期決定は困難である。後世の遺構からも大量の弥生土器が出土しているが、いずれも城ノ越式～須玖Ⅱ式段階に比定され、中でも城ノ越式～須玖Ⅰ式段階に出土量のピークが見られる。刻目突帯文の甕は細片を含めて 4 点のみの出土であった。過去に南側で実施した第 1～3 次調査では中期中葉の甕棺墓や祭祀土坑なども確認されている。一方で、丘陵端部に立地する今回の調査区では中期前半の遺構・遺物が主体を為している。勿論、第 1～3 次調査でも前期末～中期初頭の遺構・遺物も多く確認されているものの、わずかながら第 5 次調査の方が古い段階の遺構・遺物が多い傾向にあり、集落の中心が徐々に南方へ移動していった可能性が考えられる。

近世の遺構について

立地から見て、検出された遺構は南側に展開する有馬藩別邸に関連した遺構と考えられる。溝は屋敷の区画割りに伴うものと思われるが、墓地が存在しており、また該期の出土遺物も極端に少ないことから生活跡とは考え難く、別邸の北側に営まれた墓域を取り囲む区画溝と考えられる。

最後に、縄文土器に関しては福岡県総務部国立博物館対策室の水ノ江和同氏よりご教示を賜った。記して感謝致します。

【参考文献】

- 間壁忠彦・間壁霞子 「里木貝塚」 『倉敷考古館研究集報』第 7 号 1971 年
 立石雅文 「市ノ上北屋敷遺跡（弥生時代）」 『久留米市史』第 12 巻 資料編（考古） 1994 年
 富永直樹 「市ノ上北屋敷遺跡（縄文時代）」 『久留米市史』第 12 巻 資料編（考古） 1994 年
 久留米市教育委員会 『山川南本村遺跡―第 1～4 次調査―』 久留米市文化財調査報告書 第 148 集 1999 年



Fig. 72 遺跡周辺の全景（南上空から）

Ⅲ. 上野遺跡（第2次調査）

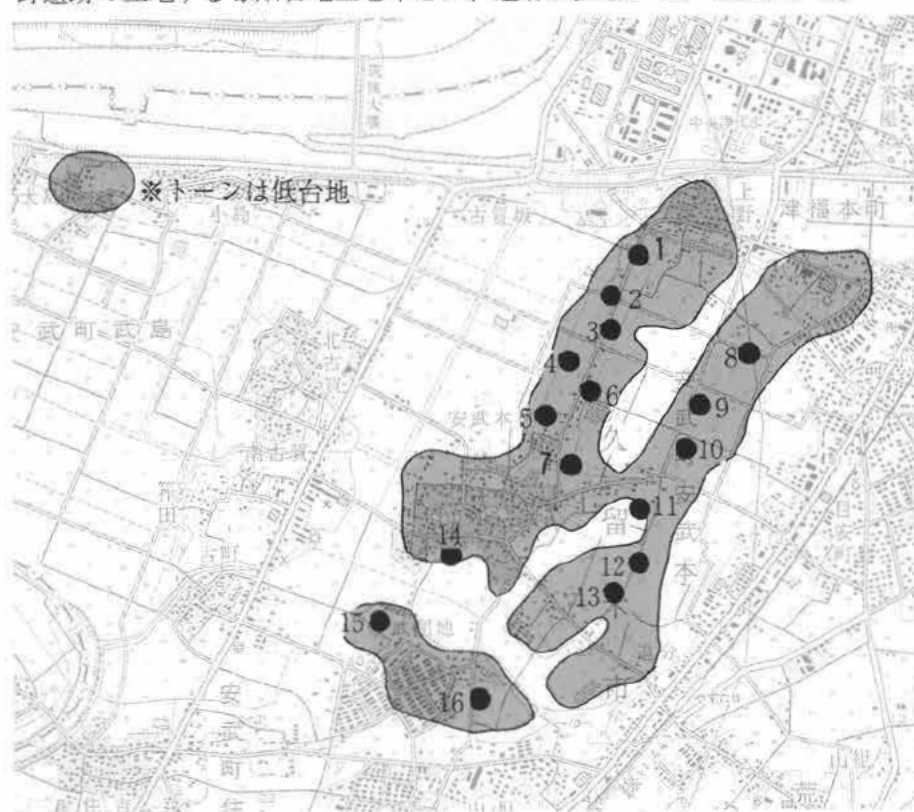
1. はじめに

本調査は、平成12年9月26日に地権者である[黒塗り]氏より、久留米市安武町安武本字上野2365-2、2366-2における専用住宅建設に先立つ、埋蔵文化財包蔵地の確認調査依頼書が提出されたことに始まる。依頼地は周知の遺跡である上野遺跡の範囲に含まれることから、同年10月11日に遺構の残存状況や密度を把握するために確認調査を実施した結果、堅穴住居やピット等の遺構が確認された。地権者と協議の結果、工事の概要から判断して盛土等による現状保存は困難であるため、やむを得ず発掘調査を実施することで合意した。その後、同年10月19日付で発掘調査依頼書を受け、同年11月6日より発掘調査に入る運びとなった。

2. 位置と環境

阿蘇外輪山に源を発する九州最大の河川である筑後川は、久留米市街地の北西付近で流路を大きく南西へと転じ、大きな蛇行を繰り返しながら有明海へと注ぐ。この筑後川左岸には沖積作用によって大きく開析されたいくつかの独立低台地が点在する。上野遺跡の所在する安武地区では、昭和61年度から平成7年度までの10年間にわたって実施された県営圃場整備に伴い、47地点で発掘調査が行われた。遺跡の大半は低台地上に形成されており、これらの遺跡を総称して「安武地区遺跡群」と呼称している。上野遺跡は安武地区遺跡群の北西部にあたる、通称「塚畑台地」の北端に立地する。

安武地区遺跡群における遺構の主体は、縄文時代早期、弥生時代、奈良～平安時代であり、ここでは上野遺跡の立地する塚畑台地上を中心に、遺跡の変遷について整理する。



遺 跡 名

1. 上野遺跡
2. 塚畑遺跡
3. 女堀遺跡
4. 安武三反野遺跡
5. 押方遺跡
6. 野畑遺跡
7. 念仏塚遺跡
8. 庄屋野遺跡
9. 穴口遺跡
10. 古牟田遺跡
11. 野瀬塚遺跡
12. 坂本遺跡
13. 今泉遺跡
14. 城崎遺跡
15. 西鳥遺跡
16. 東鳥遺跡

Fig. 73 周辺の遺跡分布図 (1/25,000)

縄文時代の遺構はすべて落し穴状遺構で、安武地区遺跡群全体では200基以上が確認されている。大半が東の庄屋野台地から南の今泉台地にかけて集中しており、塚畑台地上で確認できる落し穴状遺構は数基に過ぎない。

弥生時代になると塚畑台地上における土地開発は目を見張るものがある。前期末の段階では、居住域が確認された塚畑遺跡、貯蔵穴が集中する野畑遺跡、18基の小児棺が検出された安武三反野遺跡など、土地利用の規制が認められる。中期になると居住域が南方へと展開し、墓域は台地の南側に営まれるようになる。後期～終末期は塚畑台地上が最も盛行する時期である。この時期の集落の特徴は、堅穴住居に比べて掘立柱建物の占める割合がほぼ1:4と圧倒的に多い点にある。掘立柱建物の大半は1間×1間の建物であるが、1間×2間の建物も20%近くあり、後者は居住用の建物とも考えられている。また台地の至るところに溝が掘られ、溝内からは大量の土器が投棄された状態で出土する。石器組成では縄文系の石器が多く見られ、大陸系磨製石器は全体の10%にも満たない。これはいち早く大陸文化を受け入れたであろう北部九州の中にあっては特異な現象といえる。

律令期は筑後国三潁郡田家郷に属することとなる。庄屋野遺跡や今泉遺跡では地方豪族の居宅と考えられる建物確認され、野瀬塚遺跡からは工房と考えられる40棟以上の建物群が検出されている。また念仏塚遺跡や押方遺跡でも多くの掘立柱建物が確認されているが、該期の堅穴住居はほとんど検出されていない。この他、念仏塚遺跡からは墨書土器も出土している。

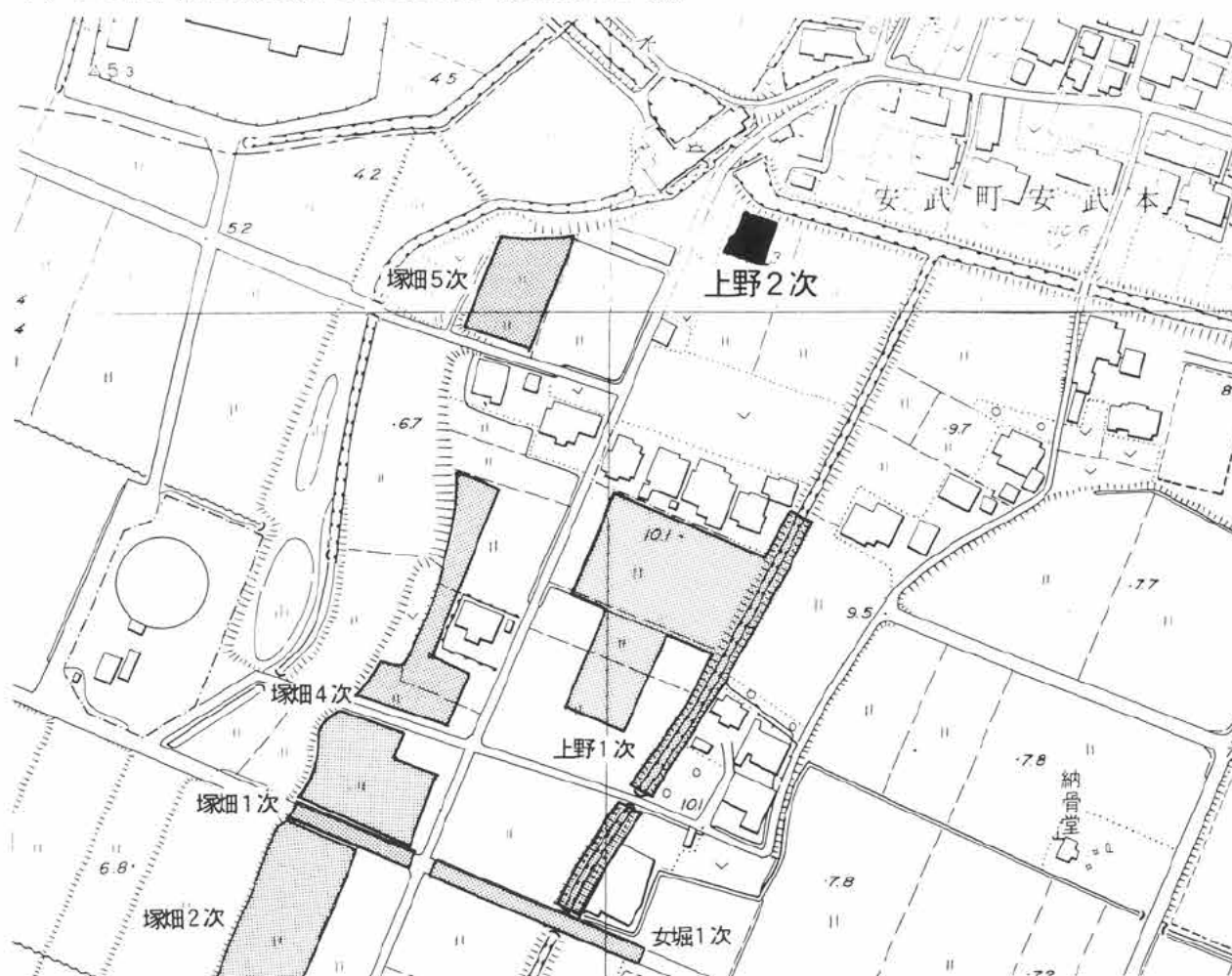


Fig. 74 調査地点の位置と周辺地形図 (1/2,500)

3. 調査の記録

（1）調査の概要

平成12年11月6日より重機による表土剥ぎを開始する。現地表面から-50 cmで遺構検出面に達する。竪穴住居やピットが確認でき、遺構の密度は濃い。7日より遺構の検出作業を開始する。11月に入っても気温25℃を越す夏日が続く。8日に平板による略図(1/100)を作成し、遺構の掘り下げを開始する。また並行して遺跡調査汎用システムによる遺構の測量を実施。遺構の掘り下げがほぼ終了した段階で調査区の清掃を行い、16日にローリングタワーを用いて調査区の全景写真撮影を実施する。17日には調査区中央に位置する竪穴住居(S I 20)の割り付けを行い、水糸メッシュ法による実測作業(1/20)を開始す

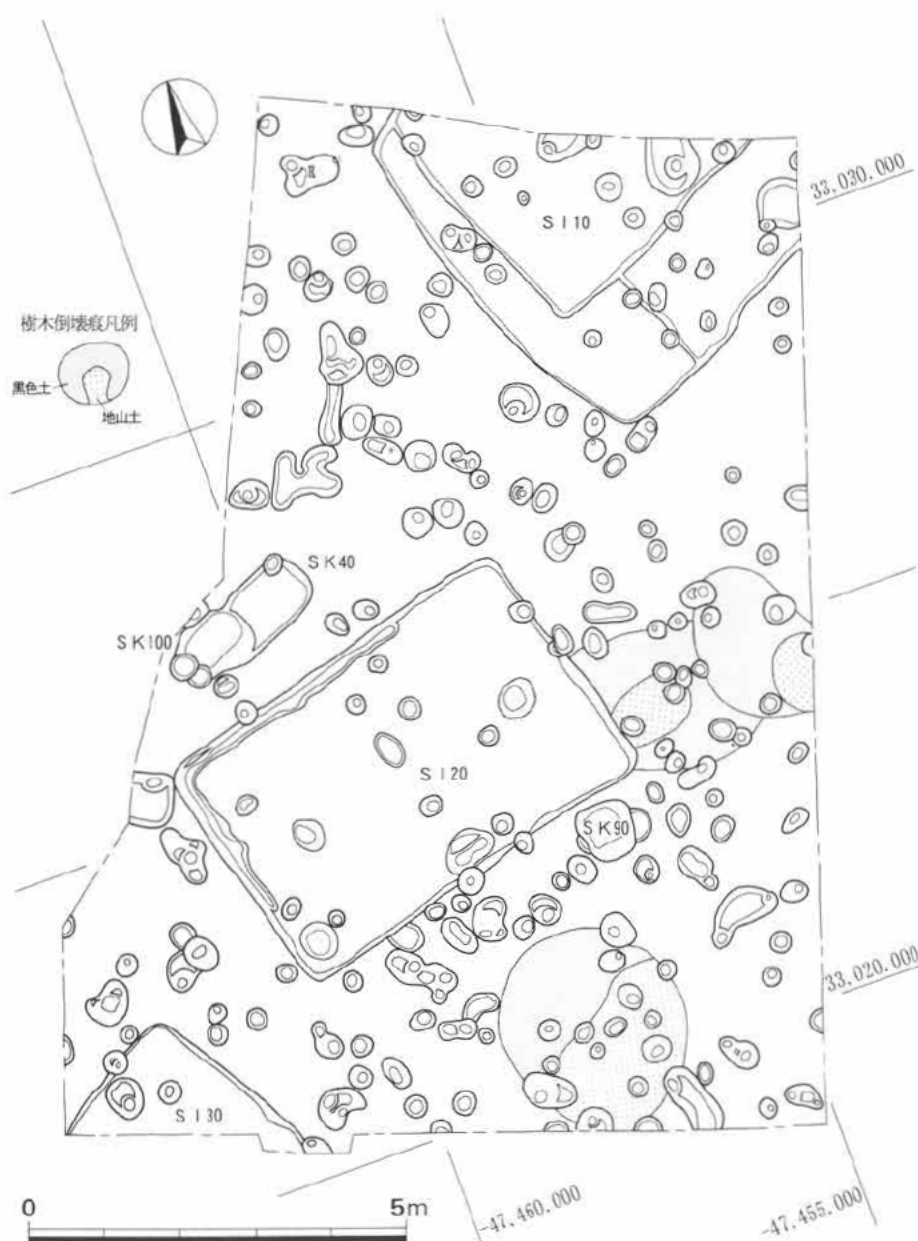


Fig. 75 上野遺跡第2次調査遺構配置図 (1/100)



Fig. 76 調査区全景 (東から)



Fig. 77 調査区全景 (南から)

る。また屋内土坑から遺物の出土が見られたため、個別に1/10で実測を行う。22日にエレベーション作業を行い、発掘器材を撤収する。24日に再び重機により調査区を埋め戻し、現地調査を終了した。整理作業は平成13年1月4日から1月31日まで実施した。

なお記録写真は、カラーリバーサル35mm、モノクローム35mm・6×7で撮影した。また遺跡調査汎用システム「カタタ」で測量したデータは、「カタタ3DC」に記録・保存している。

(2) 遺構の概要

すべて弥生時代の遺構で、竪穴住居3軒・土坑3基・ピットが確認された。この他には弥生時代以前の樹木倒壊痕を3基検出した。なお第1次調査では多くの溝が検出されていたが、今回の調査では全く確認されなかった。

竪穴住居

S I 10 (Fig. 78~80) 調査区の北東隅で検出した住居である。全容は把握できないが南北長5.30mを測る。また住居と重複して20基近くのピットが掘り込まれているが、大半が住居より後出するものである。床面には西側に幅60cm、南側に幅1.50mのベッド状遺構を設ける。なお住居の規模がやや大型であることや、ベッド状遺構の幅に差異が見られることから、2棟の住居が重複している可能性も考えられたが、土層観察でも重複関係が認められなかったため、1棟の住居と判断した。支柱穴は判然としない。埋土は暗褐色土で、ビニール袋に1袋程度の遺物が出土した。出土した甕の口縁部では刻目突帯口縁3・逆L字口縁4・く字口縁13といった具合に時期差のある遺物が混入している。

S I 20 (Fig. 81~85) 調査区の中央で検出した長方形プランの住居で、長軸5.15m、短軸3.20mを測る。深さは25cm程度で残存状況は比較的良い。北西コーナー付近を中心に全体の3分の1程度に幅15cm程度の浅い壁溝を有する。また支柱穴は2本で深さは30~40cmを測る。住居の中央には楕円形の浅い炉が設けられる。屋内土坑は南寄りの壁沿いに設けられ、土坑内からは甕や磨り石が出土した。また南東隅の大型のピット内からも小壺が1点出土している。埋土は上層が黒色土、下層が暗褐色土の堆積で、

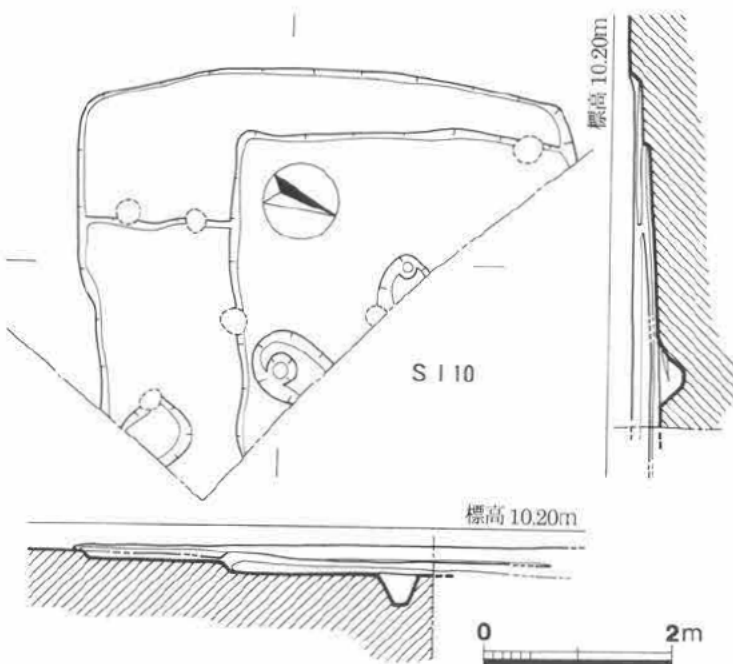


Fig. 78 S I 10 実測図 (1/80)



Fig. 79 S I 10 土層断面 (南から)



Fig. 80 S I 10 完掘状況 (西から)

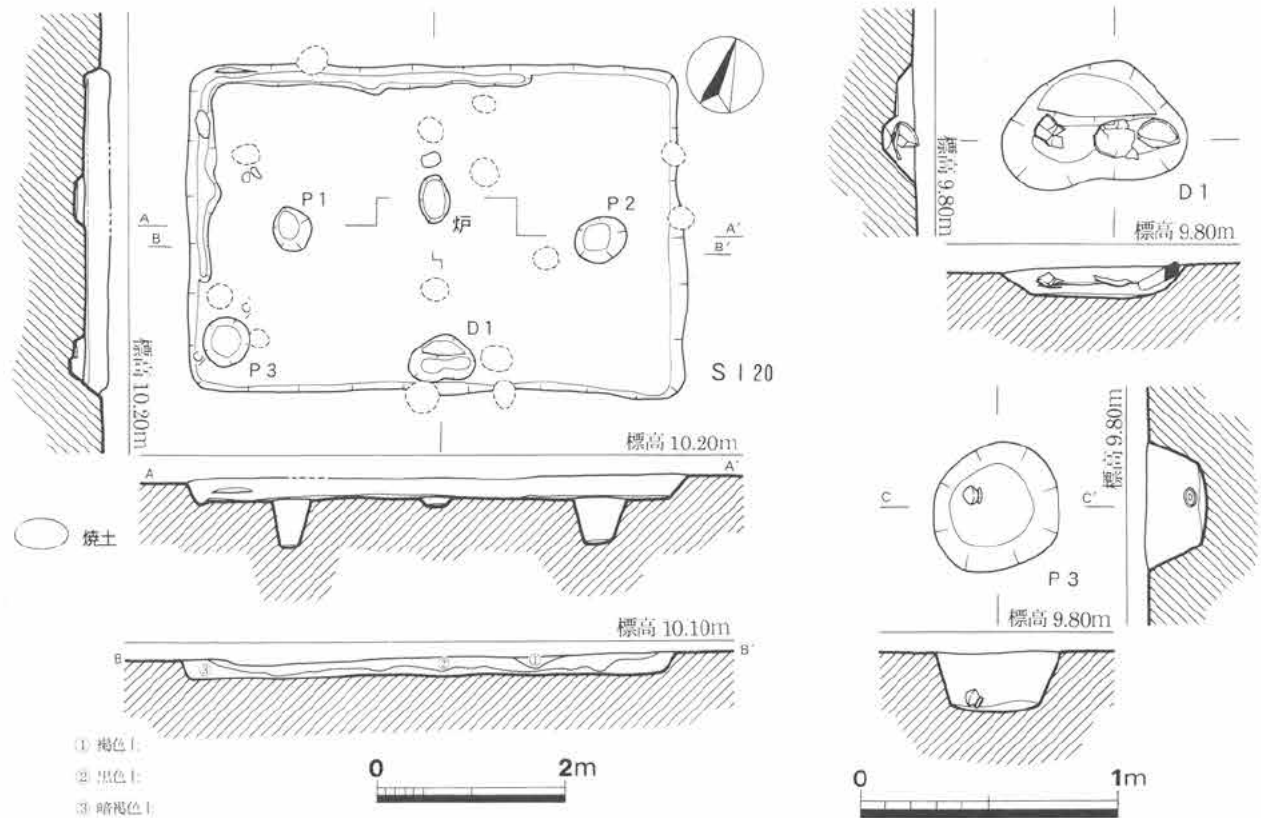


Fig. 81 S I 20 実測図 (1/80, 1/30)



Fig. 82 S I 20 床面検出状況 (南から)



Fig. 83 S I 20 完掘状況 (南から)



Fig. 84 S I 20・D1 遺物出土状況 (北から)

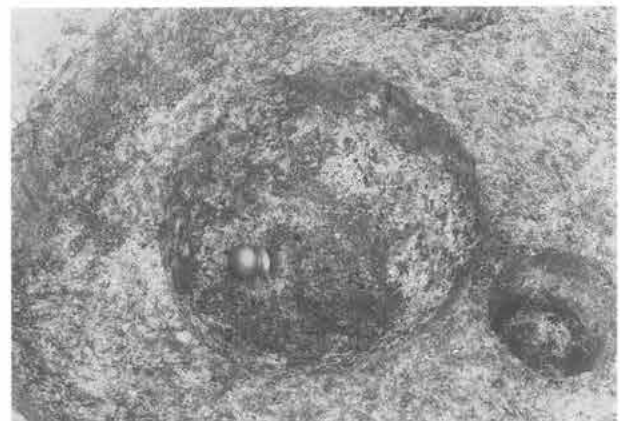


Fig. 85 S I 20・P3 遺物出土状況 (南東から)

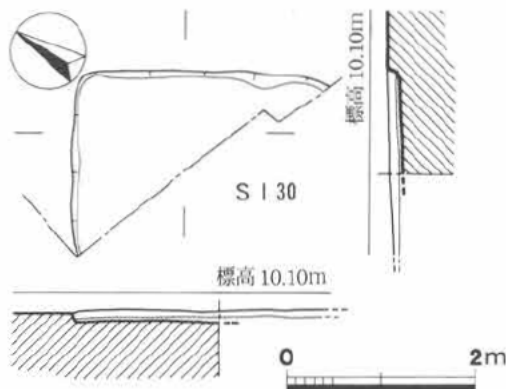


Fig. 86 S I 30 実測図 (1/80)



Fig. 87 S I 30 完掘状況 (東から)

遺物の大半が②層の黒色土中より出土した。床面の一部から焼土や炭化材が少量出土したが、床面が被熱した状況は見られなかった。出土遺物はパンコンテナー1箱程度であるが細片が多く、住居廃絶時の状況を示しているとは言い難い。器種が窺える資料では甕が最も多く、それ以外では小壺や鉢が少量見られる。甕の口縁部では三角口縁1・逆L字口縁6・く字口縁19、底部では平底8・凸レンズ底7といった組成を示し、後期の資料が大半を占める。また石器はすべて黒曜石とサヌカイトの剥片で、計20点出土した。

S I 30 (Fig. 86・87) 調査区の南西隅で検出した竪穴状の遺構で、規模・形態から竪穴住居と判断した。深さは10 cm程度と浅く、床面はほぼ平坦である。柱穴等は確認できなかった。埋土は暗褐色土で、出土遺物の大半が弥生土器の細片である。また丹塗りの壺が1点、床面に置かれた状態で出土した。

土坑

SK40 (Fig. 88~90) S I 20の北側に位置する土坑で、西側のSK100より先行する。長軸1.60m程度、短軸0.80m、深さ10 cm余りを測る。底面はほぼ平坦で、埋土は暗褐色土であり、上部に薄い黒色土の堆積が認められる。出土遺物は甕の底部片1点以外には、細片が数点見られる程度である。

SK90 (Fig. 88・91) S I 20の南東に位置する土坑である。一辺が70~80 cm程度の隅丸方形を呈し、深さは50 cmを測る。形態から見て掘立柱建物の柱穴の可能性もあるが、このピット以外には対応する遺構が存在しないため、ここでは一つの土坑として取り上げた。埋土は暗褐色土であるが、出土遺物は皆無である。

SK100 (Fig. 88・90) SK40を切る土坑で、平面プランは長軸1.20m、短軸0.85mの楕円形を呈し、深さは45 cmを測る。埋土は暗褐色土で、弥生土器が多く出土しているが大半が細片である。また用途不明の土製品も出土した。

(3) 遺物の概要

出土遺物はパンコンテナー3箱程度で、半数近くがS I 20より出土した。また弥生土器・石器以外では須恵器の蓋1点と、土師器の坏2点が見られるのみで、大半が弥生時代の所産である。遺物の詳細は観察表 (Tab. 11) に記しているため、ここでは主な遺物の概要を述べる。

3は頸部に突帯を貼り付ける甕である。9は壺の胴部で少なくとも突帯が5条以上廻る。18は磨り石で片面のみ使用されている。19は完存品の小壺である。胴部下半にはケズリが施される。20は丹塗りの鉢であるが、表面がかなり剥落している。26は不明土製品である。両面に線刻が施されているがモチーフは不明である。29は高杯の口縁部である。

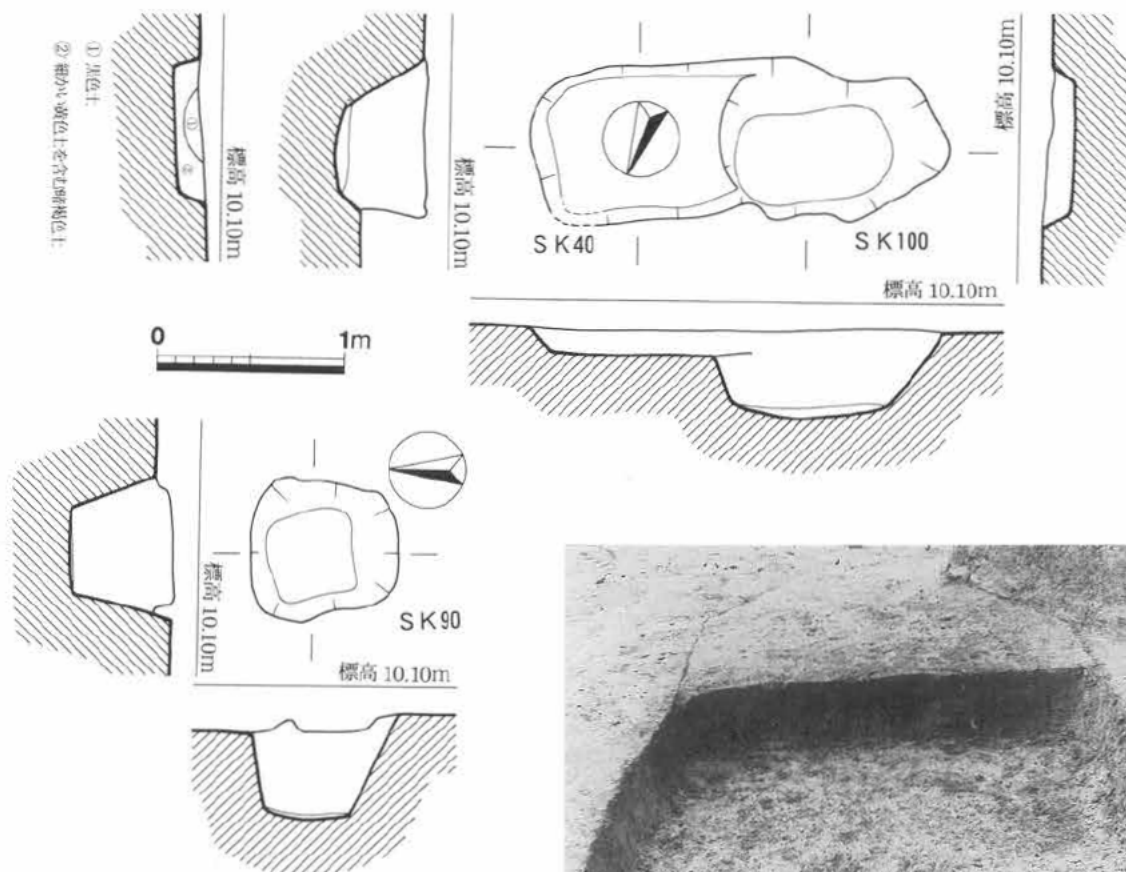


Fig. 88 SK40・90・100 実測図 (1/40)

Fig. 89 SK40 土層断面（東から）

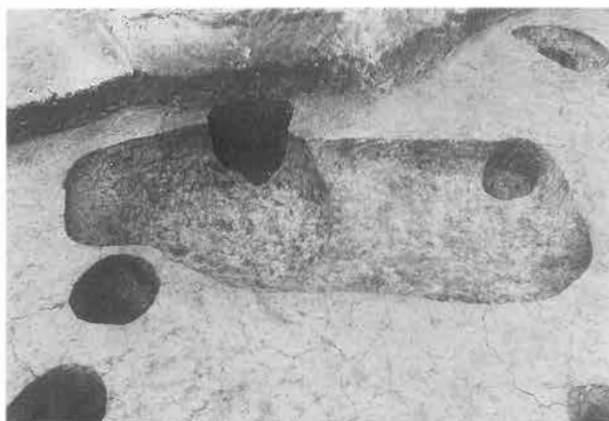


Fig. 90 SK40・100 完掘状況（南から）



Fig. 91 SK90 完掘状況（西から）

4. ま と め

第2次調査は塚畑台地の北西端部に位置し、上野遺跡の縁辺部にあたるものである。南方 100mの地点で実施した第1次調査では20条以上の溝が検出されたが、約7,000 m²という調査面積にも関わらず、竪穴住居は僅かに10軒程度が確認されたに過ぎなかった。これは調査地点が後世の削平を受けた結果と考えることもできるが、20条以上にも及ぶ条溝が密集している状況から見て広域な居住空間の存在は考えられない。一方で台地の縁辺部では過去の調査で多くの竪穴住居や掘立柱建物が確認されており、今回の

第2次調査地点も同様の立地であることから、塚烟台地上における居住施設はこのような台地縁辺部に営まれていたものであろう。また歴史時代の遺物が数点出土したが、第1次調査でも9世紀後半の土坑が1基確認されており、わずかながら該期の遺構が台地の北端部にまで展開していることが明らかとなった。

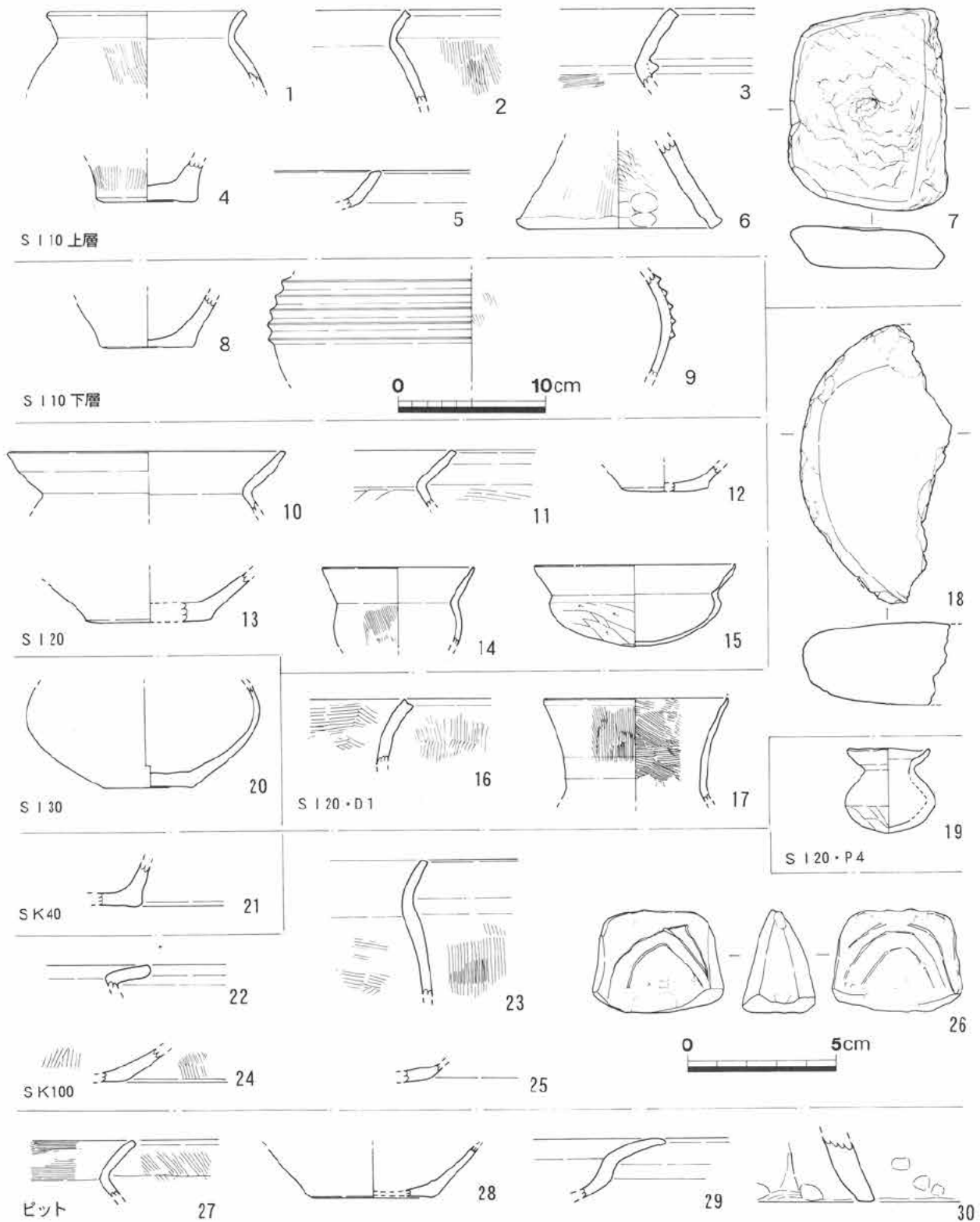


Fig. 92 出土遺物実測図 (1/4, 土製品は1/2)

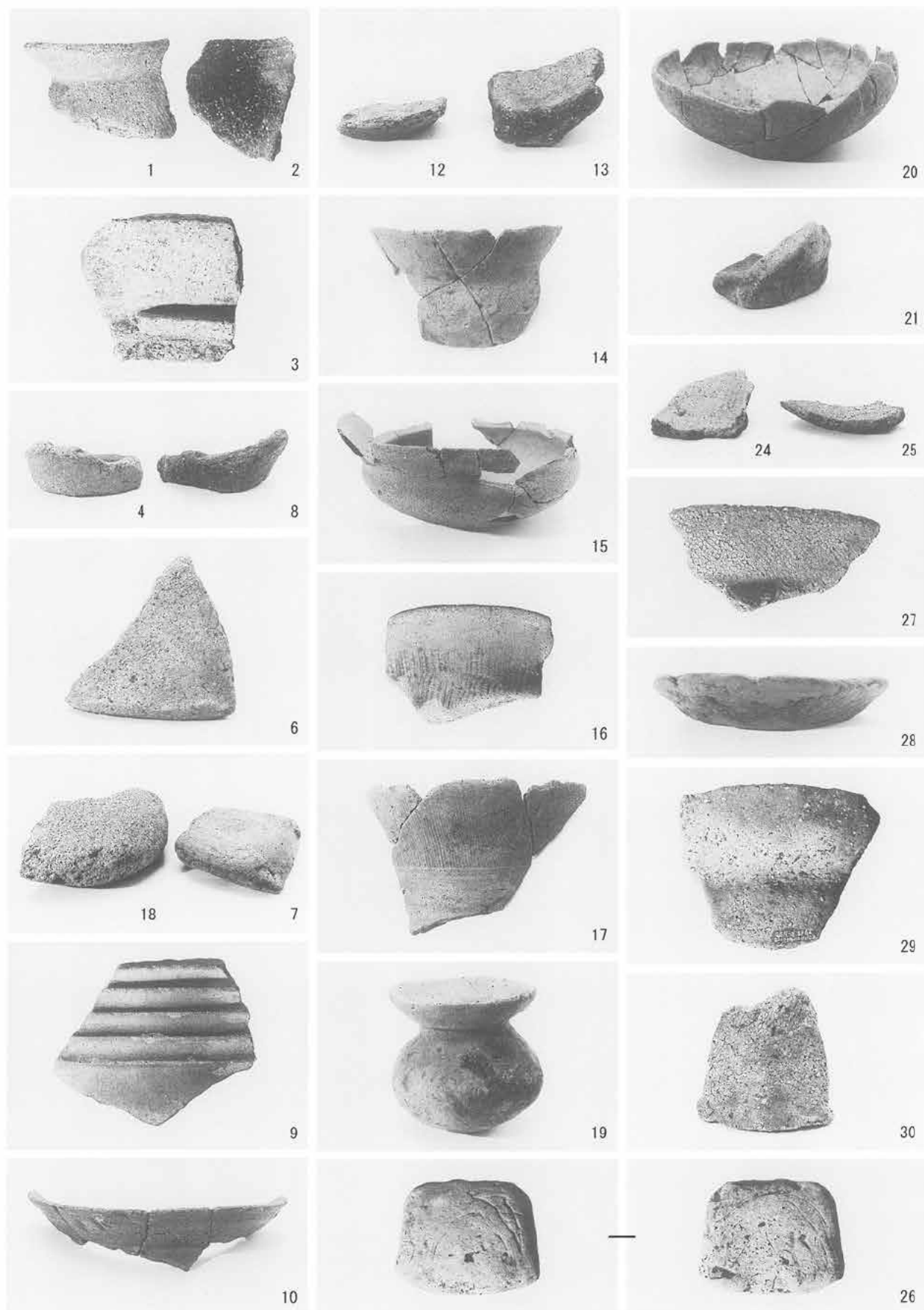


Fig. 93 出土遺物 (写真)

Tab. 11 上野遺跡第2次調査出土遺物観察表

遺物No	出土遺構	材質	器種	法量			色調		調整		胎土	備考	登録番号
				口径 (長)	底径 (幅)	器高 (厚)	外面	内面	外面	内面			
1 Fig. 92・93	S I 10 上層	弥生土器	甕	13.6		(5.3)	にぶい褐色	橙色	ヨコナデ 刷毛目	ヨコナデ ナデ	1~3mmの砂粒		200014 -00004
2 Fig. 92・93	S I 10 上層	弥生土器	甕			(6.3)	にぶい黄褐色 黒色	灰白色	ヨコナデ 刷毛目	ヨコナデ ナデ	1~3mmの砂粒		200014 -00005
3 Fig. 92・93	S I 10 上層	弥生土器	甕			(5.4)	浅黄褐色	浅黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ 刷毛目	1~3mmの砂粒 角閃石		200014 -00001
4 Fig. 92・93	S I 10 上層	弥生土器	甕		7.0	(2.6)	橙色	黒褐色	刷毛目 ナデ	ナデ	砂粒 多量の角閃石		200014 -00006
5 Fig. 92	S I 10 上層	弥生土器	高坏			(2.6)	橙色	橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	1~3mmの砂粒		200014 -00002
6 Fig. 92・93	S I 10 上層	弥生土器	器台		14.0	(6.1)	橙色	にぶい黄褐色	刷毛目 ナデ	刷毛目 ナデ押さえ	1~3mmの砂粒 角閃石、金雲母		200014 -00003
7 Fig. 92・93	S I 10 上層	片岩	凹石	13.8	10.5	2.9	オリーブ灰色	オリーブ灰色				重量730g	200014 -00007
8 Fig. 92・93	S I 10 下層	弥生土器	甕		6.4	(3.1)	褐色	灰褐色	ナデ	ナデ	1~4mmの砂粒 角閃石		200014 -00008
9 Fig. 92・93	S I 10 下層	弥生土器	壺			(7.2)	褐色 にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ヨコナデ	刷毛目 ナデ	微砂粒 角閃石		200014 -00009
10 Fig. 92・93	S I 20 上層	弥生土器	甕	19.0		(3.8)	橙色	橙色	ヨコナデ	ヨコナデ ケズリ?	1~4mmの砂粒 角閃石		200014 -00014
11 Fig. 92	S I 20 上層	弥生土器	甕			(4.0)	橙色	橙色	ヨコナデ 刷毛目	ヨコナデ ケズリ?	細砂粒 角閃石		200014 -00013
12 Fig. 92・93	S I 20 上層	弥生土器	甕		6.0	(1.5)	にぶい褐色	にぶい褐色	ナデ 刷毛目	ナデ	細砂粒		200014 -00012
13 Fig. 92・93	S I 20 上層	弥生土器	甕		8.6	(2.7)	暗赤褐色	にぶい黄褐色	ナデ 刷毛目	ナデ	砂粒 角閃石		200014 -00011
14 Fig. 92・93	S I 20 上層	弥生土器	鉢	10.4		(5.6)	褐色	にぶい褐色	ヨコナデ 刷毛目	ヨコナデ ナデ	微砂粒 微量の角閃石	口縁部外面に凹溝痕	200014 -00015
15 Fig. 92・93	S I 20 上層	弥生土器	鉢	13.8		5.6	明赤褐色	明赤褐色	ヨコナデ ケズリ	ヨコナデ ナデ	細砂粒 角閃石		200014 -00010
16 Fig. 92・93	S I 20 D 1	弥生土器	甕			(4.3)	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ヨコナデ 刷毛目	ヨコナデ 刷毛目	5mm程度の砂粒 角閃石		200014 -00016
17 Fig. 92・93	S I 20 D 1	弥生土器	壺	12.6		(6.9)	褐色	褐色	ヨコナデ 刷毛目	ヨコナデ 刷毛目	1~3mmの砂粒 角閃石		200014 -00017
18 Fig. 92・93	S I 20 D 1	安山岩	磨石	(19.0)	(10.2)	5.6	灰白色	灰白色				重量1290g	200014 -00018
19 Fig. 92・93	S I 20 P 3	弥生土器	小壺	5.7		5.8	明赤褐色	明赤褐色	ナデ ケズリ	ナデ	微砂粒 赤色粒子		200014 -00025
20 Fig. 92・93	S I 30	弥生土器	壺		6.0	(6.9)	褐色	褐色	ミガキ ナデ	ナデ	微砂粒 微量の角閃石	丹塗り	200014 -00019
21 Fig. 92・93	SK40	弥生土器	甕			(2.7)	褐色	灰黄褐色	ナデ	ナデ	1~3mmの砂粒 角閃石		200014 -00020
22 Fig. 92	SK100	弥生土器	甕			(1.6)	明黄褐色	黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	1~6mmの砂粒		200014 -00026
23 Fig. 92	SK100	弥生土器	甕			(9.4)	赤褐色 黒褐色	赤褐色 黒褐色	ヨコナデ 刷毛目	ヨコナデ 刷毛目	1~4mmの砂粒 角閃石		200014 -00027
24 Fig. 92・93	SK100	弥生土器	甕			(1.9)	にぶい黄褐色	にぶい褐色	刷毛目 ナデ	刷毛目 ナデ	1~3mmの砂粒 角閃石		200014 -00029
25 Fig. 92・93	SK100	弥生土器	甕			(1.0)	褐色	にぶい黄褐色	ナデ	ナデ	細砂粒 多量の角閃石		200014 -00028
26 Fig. 92・93	SK100	土製品	不明	4.5	3.4	2.4	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ナデ	ナデ	微砂粒	両面に線刻あり	200014 -00030
27 Fig. 92・93	SP61	弥生土器	甕			(3.8)	にぶい褐色	にぶい赤褐色	ヨコナデ 刷毛目	ヨコナデ 刷毛目	砂粒 角閃石		200014 -00022
28 Fig. 92・93	SP59	弥生土器	甕		8.6	(3.4)	明赤褐色	明赤褐色	ナデ	ナデ	細砂粒	丹塗り?	200014 -00021
29 Fig. 92・93	SP62	弥生土器	高坏			(4.1)	にぶい黄褐色 ~暗褐色	にぶい黄褐色	ナデ	ナデ	2~3mmの砂粒		200014 -00023
30 Fig. 92・93	SP64	弥生土器	器台			(4.8)	褐色	褐色	ナデ押さえ	ナデ押さえ	2~3mmの砂粒 角閃石		200014 -00024

・「法量」の単位はcmであり、()内の数値は現存値を示す。

・「色調」は『新版標準土色帖』(日本色研事業株式会社, 1997年版)による。

・「胎土」は0.5mm未満の砂粒を微砂粒、1mm未満を細砂粒、2mm未満を砂粒と表記した。

IV. 念仏塚遺跡（第4次調査）

1. はじめに

本調査は、平成12年10月30日に地権者である[黒塗り]氏より、久留米市安武町安武本字念仏塚2487外における専用住宅建設に先立つ、埋蔵文化財包蔵地の確認調査依頼書が提出されたことに始まる。依頼地は周知の遺跡である念仏塚遺跡の範囲に含まれ、平成2年度に東隣接地で実施された第1次調査では9世紀後半の掘立柱建物・土坑・井戸・鍛冶遺構などの遺構や、墨書土器などの遺物も出土していることから、依頼地にも該期の遺構が広がっている可能性が極めて高いものであった。同年11月22日に遺構の残存状況や密度を把握するために確認調査を実施した結果では、わずかにピットが確認されたものの、遺構の密度は極めて低いものであった。しかしながら対象地内にも前述のとおり重要な遺構の存在が予測されたことから、今回の開発では直接、遺構に与える影響はなかったものの、地権者と協議の結果、発掘調査を実施することで合意した。その後、同年12月25日付で発掘調査依頼書を受付け、平成13年1月10日より発掘調査に入る運びとなった。

2. 位置と環境

念仏塚遺跡は「安武地区遺跡群」の中に含まれ、上野遺跡の南方800mに位置する。周辺遺跡の歴史的環境に関しては第III章の上野遺跡と重複するため、ここでは念仏塚遺跡の第1～3次調査の概要を述べるにとどめる。

第1次調査は圃場整備事業に先立って昭和62年度に実施された。縄文時代の落とし穴状遺構2基、9世紀後半を中心とする掘立柱建物・柵列・土坑・鍛冶遺構などが確認された。



Fig. 94 調査地点の位置と周辺地形図 (1/2,500)

第2次調査は圃場整備事業に先立って平成2年度に実施され、8世紀前半～9世紀後半の掘立柱建物・溝・土坑・井戸・鍛冶遺構、及び近世墓などの遺構が確認されている。特に9世紀後半の土坑（SK54）からは大量の墨書土器が出土している。

第3次調査は専用住宅建設に先立って平成10年度に実施され、8世紀後半～9世紀後半の掘立柱建物やピットなどが確認された。調査面積や遺構密度に比して出土遺物が極端に少ない点が特徴である。

3. 調査の記録

（1）調査の概要

平成13年1月10日より重機による表土剥ぎを開始する。調査区の大半は現地表面から－40 cm、東端では－20 cmで遺構検出面に達するが、遺構の密度は極めて低く、ピットや土坑状の遺構が見られるに過ぎない。11日より遺構の検出作業、及び平板による略図（1/50）を作成し、遺構の掘り下げを開始する。12日より遺跡調査汎用システムによる遺構の測量を開始。15日、筑後地方は記録的な大雪に見舞われたが、翌16日午後には雪はすっかり解け、作業への影響はほとんどなかった。18日には遺構の掘り下げが終了し、調査区の清掃を行い、ローリングタワーを用いて調査区の全景写真撮影を実施する。翌19日に再び重機により調査区を埋め戻し、現地調査を終了した。整理作業は平成13年2月1日から3月30日まで実施した。

なお記録写真は、カラーリバーサル35 mm、モノクローム35 mm・6×7で撮影した。また遺跡調査汎用システム「カタタ」で測量したデータは、「カタタ3DC」に記録・保存している。

（2）遺構の概要

歴史時代の土坑1基と近世墓1基、及びピットを検出した。調査区の大半は開墾による削平を受けているため、遺構はかなり希薄で、表土を除去すると苗代を埋め戻した痕跡である黄色砂層と暗青灰色粘質土層となる。

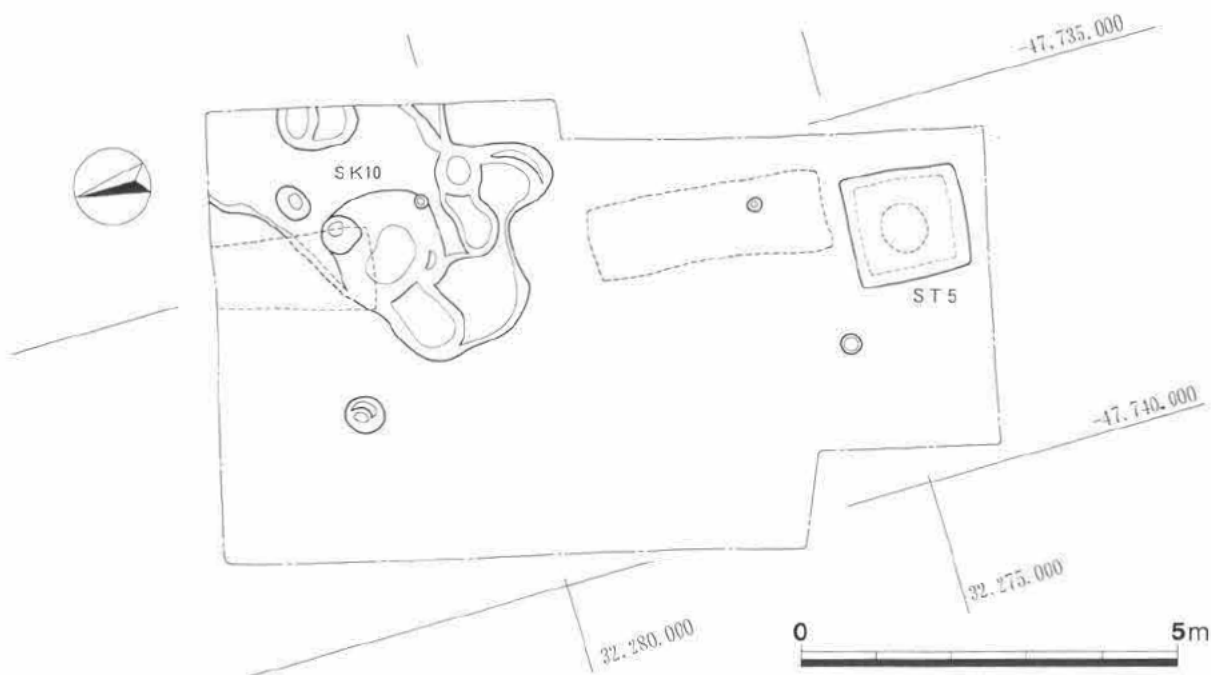


Fig. 95 念仏塚遺跡第4次調査遺構配置図（1/100）



Fig. 96 調査区全景（南から）



Fig. 97 調査区全景（北から）

土坑

SK10 (Fig. 98~100) 調査区の北東隅で検出した、平面プランが不定形を呈する土坑である。土坑が重複している可能性も考えられるが、遺構の検出された条件が悪いために層位的にも捉え辛く、ここでは一つの土坑として取り扱った。底面は凹凸が随所に認められるが、北東部は比較的平坦である。深さは最深部で80 cm程度に達する。①層は旧耕作土が土圧で沈んだもので遺物の出土は見られない。遺物はパンコンテナー3箱近くにも及び、大半が②層からの出土である。また②層中には大量の炭片や焼土片が含まれていたが、③層には焼土等が全く含まれていないことや、壁面も被熱した痕跡が認められないことから、これらの焼土片は本土坑に伴うものではないと考えられる。出土遺物の99%が土師器で、甕・鉢・鍋・蓋・坏・皿・黒色土器A類碗などの器種があり、器種が判別できる部位で見れば、煮炊具と供膳具の比率はほぼ等しい。土師器以外では須恵器が甕・蓋・坏が破片を含めて36点出土している他、平瓦1点と鉄鏃2点が出土している。

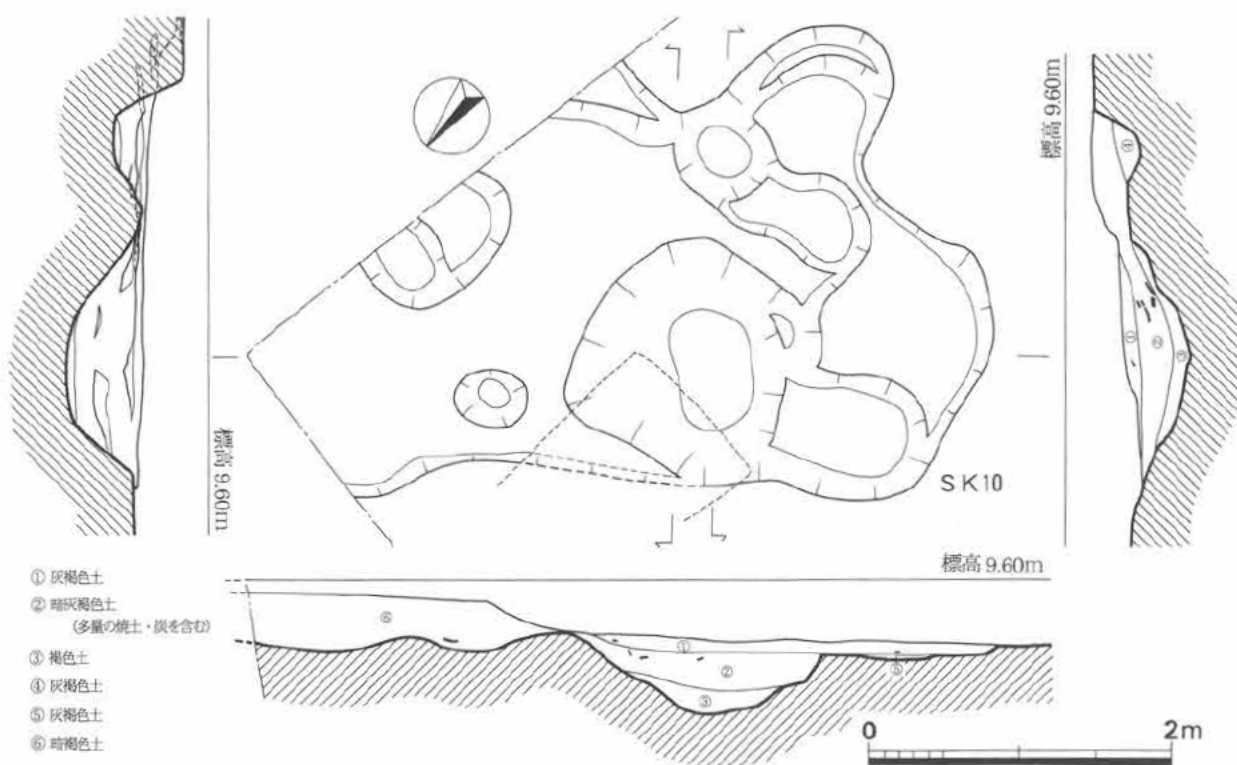


Fig. 98 SK10 実測図 (1/50)



Fig. 99 SK10 南側遺物出土状況 (西から)



Fig. 100 SK10 完掘状況 (西から)

近世墓

ST5（Fig. 101～103） 一辺 1.45m×1.60mのほぼ方形プランを呈する。完掘していないため、深さの正確な数値は明らかでないが、ボーリングステッキによる調査では深さ 1.40m程度に達するようである。また中央には径 60 cm程度の棺の痕跡と考えられる円形プランが確認できる。埋土は少量の灰色土混じりの黄褐色土であるが、棺の痕跡部分は締まりの悪い灰褐色粘質土であった。埋土中から近世陶磁器や土師器、須恵器が少量出土したが、いずれも細片である。

（3）遺物の概要

出土遺物はパンコンテナー 3 箱に及び、大半がSK10出土の土師器である。またSK10出土遺物中にはネズミの門歯痕と考えられるキズが付いた遺物が多く見受けられる点が特徴として挙げられる。土坑（SK10）と近世墓（ST5）に伴う遺物以外では、サヌカイトの石核と剥片が各 1 点、及び東播系捏鉢片 1 点が見られるに過ぎない。遺物の詳細については観察表（Tab. 12・13）に記しているため、そちらを参照されたい。

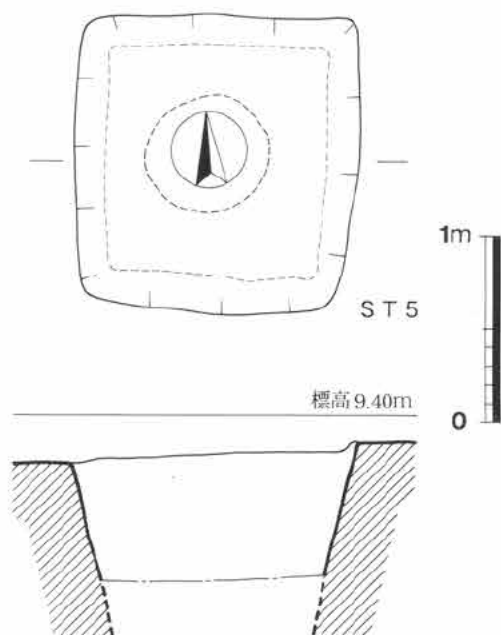


Fig. 101 ST5実測図（1/40）

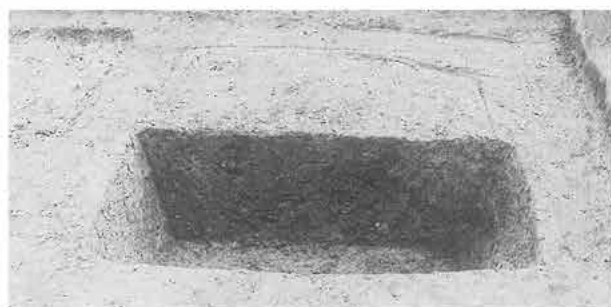


Fig. 102 ST5土層断面（北西から）



Fig. 103 ST5全景（北西から）



Fig. 104 調査区南壁土層（北東から）



Fig. 105 作業風景（南から）

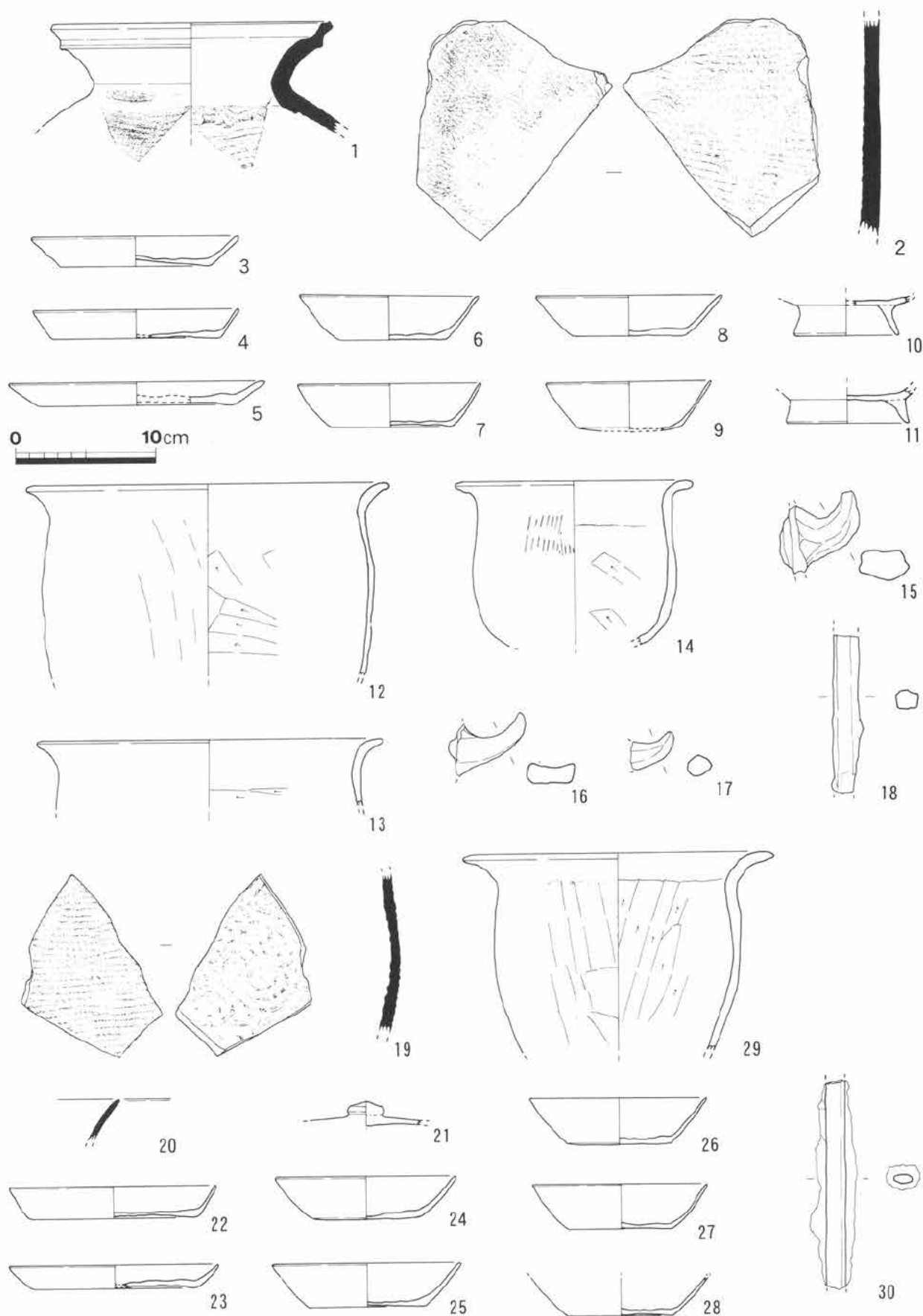


Fig. 106 SK10 出土遺物実測図 (1/4, 鉄器は1/2)

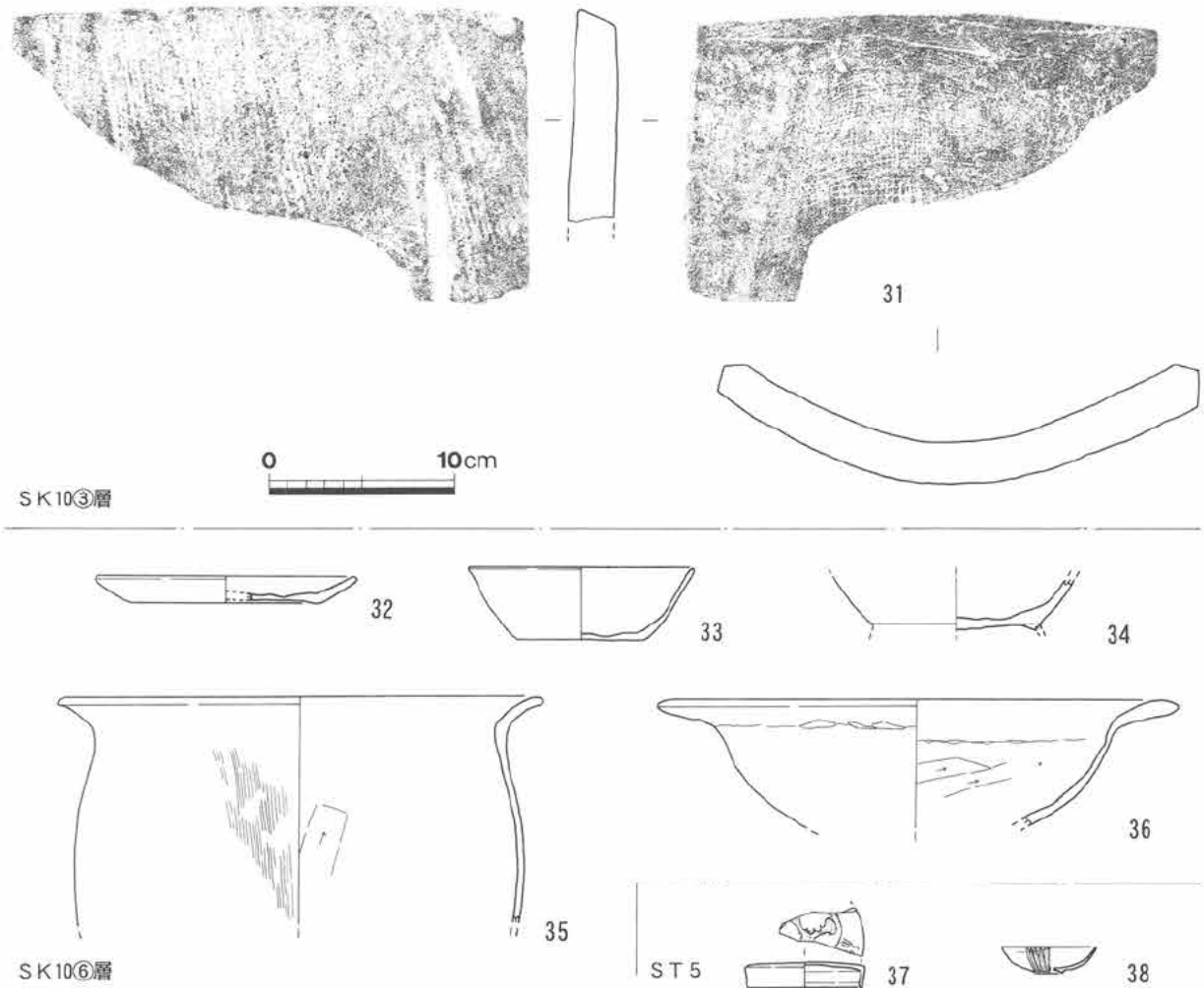


Fig. 107 SK10、ST5出土遺物実測図（1/4）

Tab. 12 念仏塚遺跡第4次調査出土遺物観察表①

遺物No	出土遺構	材質	器種	法 量			色 調		調 整		胎 土	備 考	登録番号
				口 径	底 径	器 高	外 面	内 面	外 面	内 面			
1 Fig. 106・108	SK10 ②層	須恵器	甕	20.2		(7.9)	灰白色 暗赤褐色	暗灰色	回転ナデ 平行タタキ	回転ナデ 青海波タタキ	細砂粒		200019 -00035
2 Fig. 106・108	SK10 ②層	須恵器	甕			(15.4)	灰赤色 灰色	灰色	格子目タタキ	青海波タタキ →平行タタキ	細砂粒		200019 -00011
3 Fig. 106・108	SK10 ②層	土師器	皿	14.8	10.6	2.2	橙色	橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	微砂粒	底部ヘラ切り	200019 -00029
4 Fig. 106・108	SK10 ②層	土師器	皿	14.6	12.0	2.1	浅橙色	浅橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	赤色粒子 微砂粒	底部ヘラ切り	200019 -00005
5 Fig. 106・108	SK10 ②層	土師器	皿	18.2	13.8	1.7	橙色	浅橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	赤色粒子 微砂粒	底部ヘラ切り	200019 -00006
6 Fig. 106・108	SK10 ②層	土師器	坏	12.7	7.6	3.3	浅黄褐色 にぶい橙色	にぶい黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	赤色粒子 微砂粒	底部ヘラ切り	200019 -00027
7 Fig. 106・108	SK10 ②層	土師器	坏	13.0	8.6	3.1	橙色	明黄褐色 黒色	ヨコナデ	ヨコナデ	赤色粒子 微砂粒	底部ヘラ切り	200019 -00003
8 Fig. 106・108	SK10 ②層	土師器	坏	13.2	7.8	2.9	にぶい橙色	橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	赤色粒子 微砂粒	底部ヘラ切り	200019 -00004
9 Fig. 106・108	SK10 ②層	土師器	坏	11.6	7.4	3.5	橙色	橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	多量の赤色粒子 微砂粒	底部ヘラ切り	200019 -00028
10 Fig. 106・108	SK10 ②層	土師器	碗		7.4	(2.8)	橙色	黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	多量の赤色粒子 微砂粒	底部ヘラ切り	200019 -00007

Tab. 13 念仏塚遺跡第4次調査出土遺物観察表②

遺物No	出土遺構	材質	器種	法 量			色 調		調 整		胎 土	備 考	登録番号
				口 径 (長)	底 径 (幅)	器 高 (厚)	外 面	内 面	外 面	内 面			
11 Fig. 106・108	SK10 ②層	土師器	碗		8.7	(2.6)	橙色	にぶい黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	赤色粒子 微砂粒	底部ヘラ切り	200019 -00030
12 Fig. 106・108	SK10 ②層	土師器	甕	26.0		(13.8)	にぶい黄色	にぶい黄色	ヨコナデ 刷毛目	ヨコナデ ケズリ	角閃石 砂粒	内面に門歯痕	200019 -00031
13 Fig. 106・108	SK10 ②層	土師器	甕	24.8		(4.8)	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ ケズリ	少量の角閃石 砂粒		200019 -00032
14 Fig. 106・108	SK10 ②層	土師器	甕	16.8		(11.8)	明赤褐色	にぶい褐色 褐色	ヨコナデ 刷毛目	ヨコナデ ケズリ	多量の角閃石 細砂粒		200019 -00008
15 Fig. 106・108	SK10 ②層	土師器	把手			(5.9)	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ押さえ	ナデ押さえ	細砂粒		200019 -00009
16 Fig. 106・108	SK10 ②層	土師器	把手			(4.6)	橙色	褐色	ナデ押さえ	ナデ押さえ	赤色粒子、砂粒 微量の角閃石		200019 -00034
17 Fig. 106・108	SK10 ②層	土師器	把手			(2.8)	明赤褐色 黒褐色	明赤褐色 黒褐色	ナデ押さえ	ナデ押さえ	角閃石 細砂粒		200019 -00010
18 Fig. 106・108	SK10 ②層	鉄	鏝?	(5.6)	0.8	0.6							200019 -00012
19 Fig. 106・108	SK10 ③層	須恵器	甕			(12.8)	灰色	灰白色	平行タタキ	青海波タタキ	微砂粒		200019 -00023
20 Fig. 106・108	SK10 ③層	須恵器	坏			(3.0)	灰色	灰色	回転ナデ	回転ナデ	微砂粒		200019 -00024
21 Fig. 106・108	SK10 ③層	土師器	蓋			(1.8)	橙色	褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	多量の赤色粒子 微砂粒		200019 -00020
22 Fig. 106・108	SK10 ③層	土師器	皿	14.6	11.6	2.3	橙色	褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	赤色粒子 微砂粒	底部ヘラ切り	200019 -00019
23 Fig. 106・108	SK10 ③層	土師器	皿	14.8	11.4	1.6	橙色	褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	赤色粒子 微砂粒	底部ヘラ切り	200019 -00018
24 Fig. 106・108	SK10 ③層	土師器	坏	12.8	7.6	3.1	橙色	褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	赤色粒子 微砂粒	底部ヘラ切り	200019 -00017
25 Fig. 106・109	SK10 ③層	土師器	坏	13.4	8.3	3.1	黄橙色	褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	多量の赤色粒子 微砂粒	底部ヘラ切り 外底部に門歯痕	200019 -00014
26 Fig. 106・109	SK10 ③層	土師器	坏	12.6	7.4	3.4	橙色	褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	赤色粒子 微砂粒	底部ヘラ切り 見込みに門歯痕	200019 -00013
27 Fig. 106・109	SK10 ③層	土師器	坏	12.4	7.4	3.2	橙色	褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	赤色粒子 微砂粒	底部ヘラ切り	200019 -00015
28 Fig. 106・109	SK10 ③層	土師器	坏		7.5	(2.8)	褐色	浅黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	赤色粒子 微砂粒	底部ヘラ切り	200019 -00016
29 Fig. 106・109	SK10 ③層	土師器	甕	22.2		(14.1)	にぶい黄褐色 赤色	にぶい黄褐色	ヨコナデ 刷毛目	ヨコナデ ケズリ	角閃石 砂粒	外面に煤付着	200019 -00021
30 Fig. 106・108	SK10 ③層	鉄	鏝?	(7.4)	0.7	0.35							200019 -00026
31 Fig. 107・109	SK10 ③層	瓦	平瓦	(16.1)	25.5	2.3	灰白色	灰白色	布目 ケズリ	縄文タタキ	細砂粒	凹面に糸切り痕 および模骨痕あり	200019 -00025
32 Fig. 107・109	SK10 ⑥層	土師器	皿	14.0	10.0	1.5	にぶい黄褐色	にぶい褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	赤色粒子 微砂粒	底部ヘラ切り	200019 -00037
33 Fig. 107・109	SK10 ⑥層	土師器	坏	12.0	6.6	3.9	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	少量の赤色粒子 微砂粒	底部ヘラ切り	200019 -00036
34 Fig. 107・109	SK10 ⑥層	黒色土器	碗			(2.9)	にぶい黄褐色	黒色	ヨコナデ	ヨコナデ	赤色粒子 微砂粒	底部ヘラ切り A類	200019 -00038
35 Fig. 107・109	SK10 ⑥層	土師器	甕	26.2		(12.2)	浅黄褐色	浅黄褐色	ヨコナデ 刷毛目	ヨコナデ ケズリ	角閃石 砂粒	内面に門歯痕	200019 -00039
36 Fig. 107・109	SK10 ⑥層	土師器	鍋	28.0		(6.8)	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ヨコナデ ナデ押さえ	ヨコナデ ケズリ	金雲母 砂粒	外面に煤付着	200019 -00041
37 Fig. 107・109	ST5	磁器	蓋	6.2		1.4	透明	藍色	草花文	無紋	白色精良		200019 -00001
38 Fig. 107・109	ST5	磁器	紅皿	5.0	1.6	1.4	透明		蓮弁	無紋	白色精良		200019 -00002

- ・「法量」の単位はcmであり、()内の数値は現存値を示す。
- ・「色調」は『新版標準土色帖』(日本色研事業株式会社, 1997年版)による。
- ・「胎土」は0.5mm未満の砂粒を微砂粒、1mm未満を細砂粒、2mm未満を砂粒と表記した。

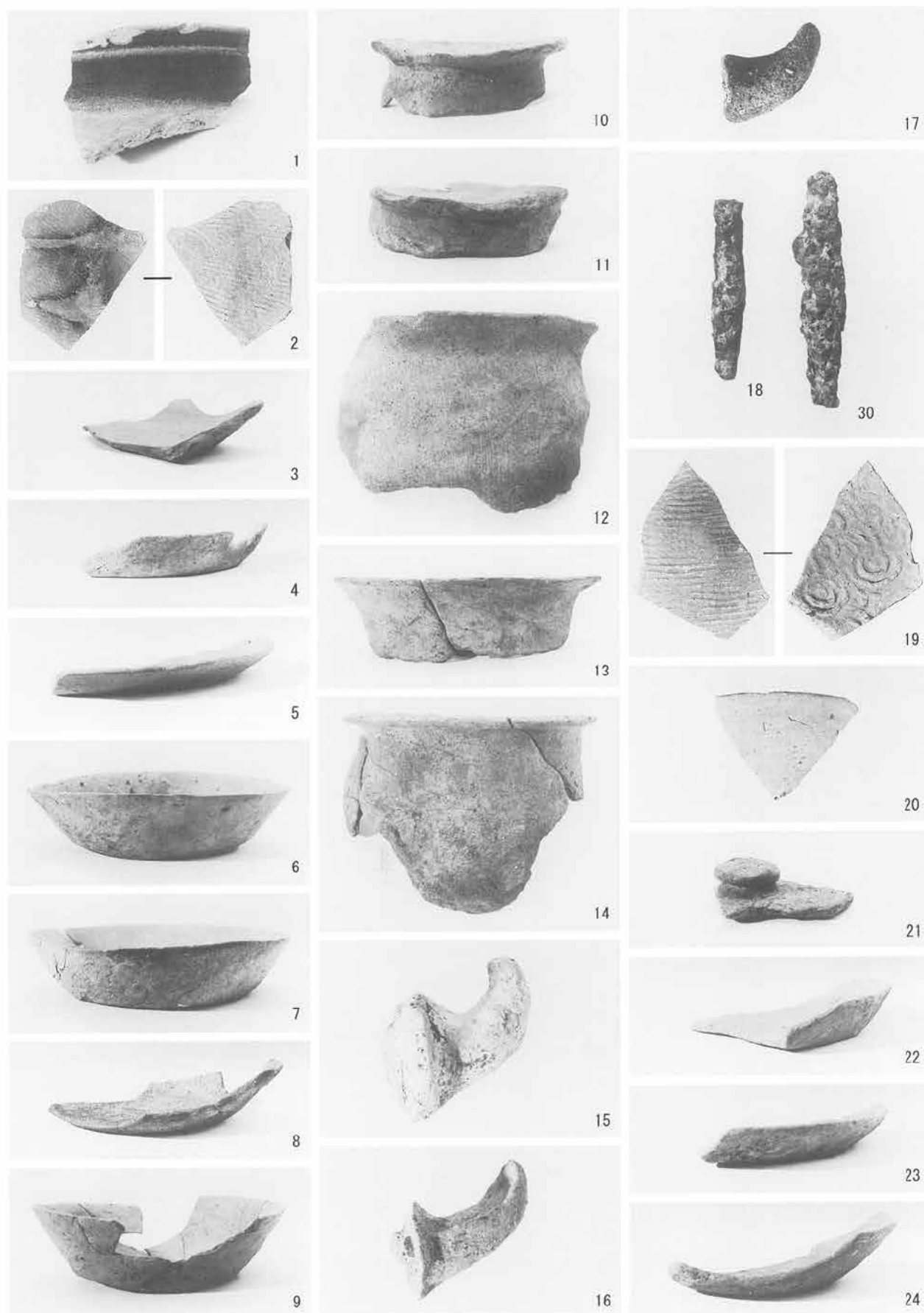


Fig. 108 出土遺物 (写真①)

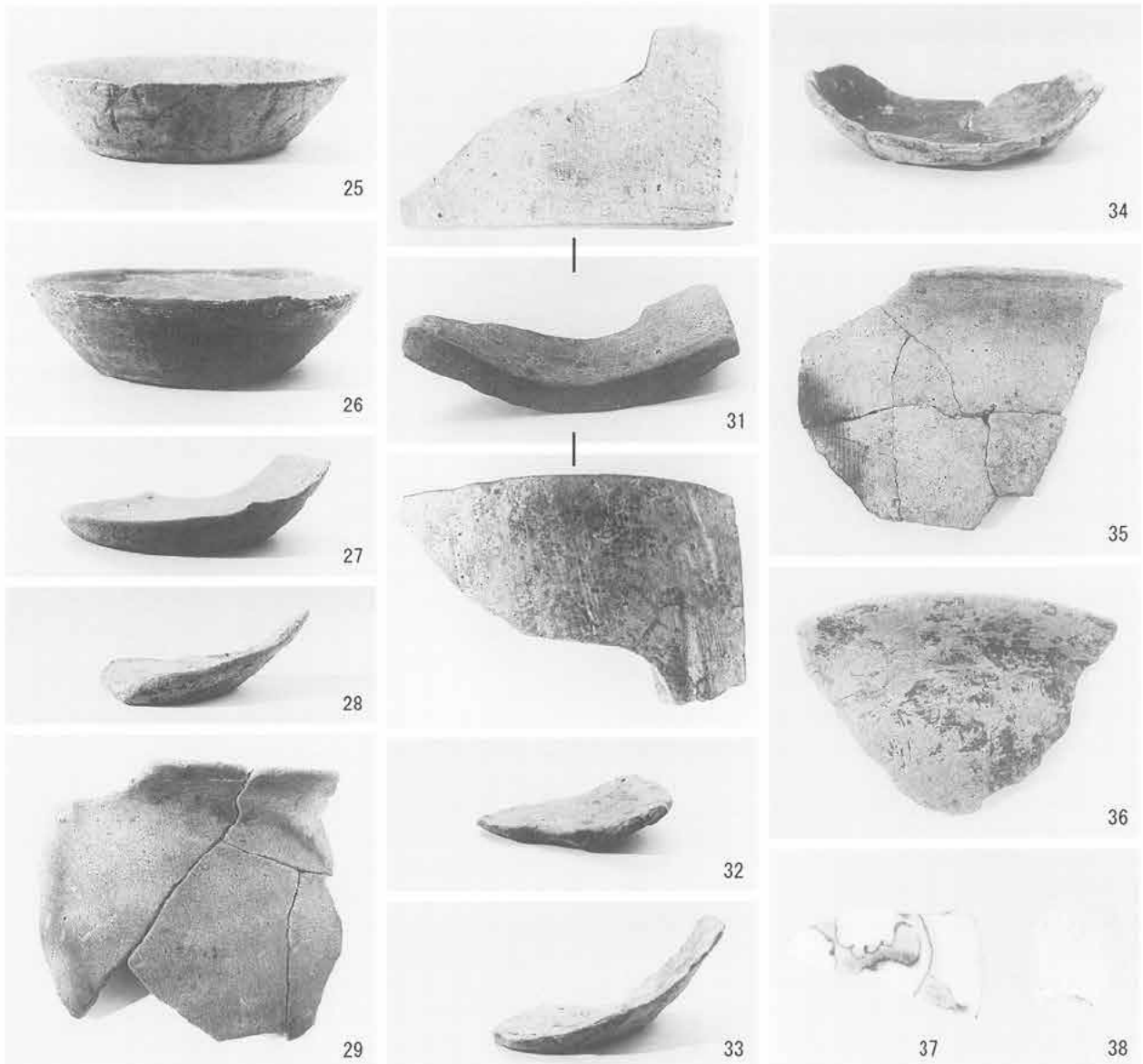


Fig. 109 出土遺物（写真②）

4. ま と め

先に実施した第1・2次調査では、鍛冶関連遺構や鉄滓、墨書土器など、9世紀後半代の遺構・遺物が確認されている。一方、今回の調査で確認された歴史時代の遺構は土坑1基のみであった。このように今回は鍛冶関連遺構の存在を積極的に示すような資料は出土していないが、周辺の調査成果を併せて考えれば、念仏塚遺跡は鍛冶工房としての性格付けが可能であろう。

最後にSK10下層から出土した平瓦について若干触れておきたい。この平瓦は凸面に縄目叩き、凹面には糸切り離し痕と、現状で幅2cm程度の模骨痕、及び布目跡が認められる。限られた情報から瓦の製作技法を推察すれば、直径42～45cm（乾燥・焼成による収縮率を80%と仮定した場合）、立ち上がり角85°の桶に、糸切りによって切り離した粘土板を巻き付け、縄目叩きを施して成形・調整し、4分割した後にヘラケズリで面取りを施した工程が復元される。

* 瓦の製作技法の復元に関しては、文化財保護課の小澤太郎の観察による。

V. 西小路遺跡（第8次調査）

1. はじめに

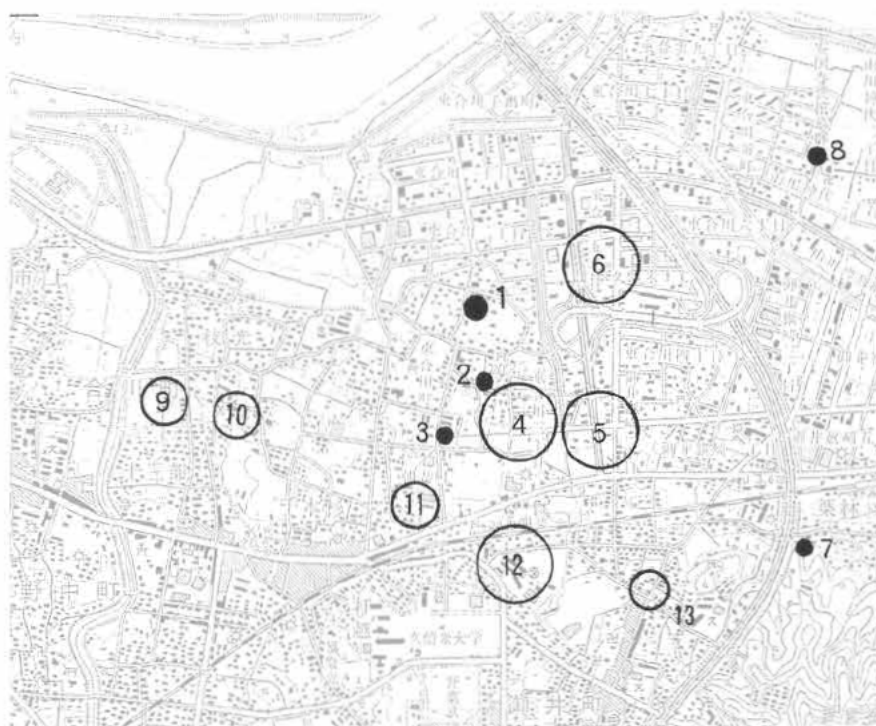
本調査は平成12年度に久留米市東合川町字西小路465-1、465-2番地において実施した第7次調査の補足調査である。第7次調査の際には生垣や植木が存在するため調査区北西端部付近は未調査のまま残されていたが、第7次調査によって縄文時代、弥生時代、奈良時代、平安時代、中世、近世に及ぶ多彩な遺構が検出され、その中でも石冠、石棒など特殊遺物が出土した縄文時代後期の堅穴住居や、弥生時代の箱式石棺墓が近接する部分に存在することから、それらの遺構の広がりを確認するため、第8次調査を行う運びとなったものである。

調査は対象面積712㎡の内、住宅進入路の造成によって掘削される第7次調査区の北西端部に隣接する約28㎡分を調査した。現地における発掘調査は平成13年1月30日より開始し、同年2月9日に終了している。

2. 位置と環境

西小路遺跡が所在する東合川町は久留米市の東部に位置する。付近は市街地に近接することから近年開発が著しく、農業地帯から市街地へと急速に景観が変化しつつある地域である。

遺跡は水縄山地西端部に所在する高良山より派生し、遺跡北部を西流する筑後川左岸側へ向かって延びる低位段丘の先端部に立地し、標高は約11mを測る。この低位段丘付近は市内でも有数の遺跡が集中して所在する地域であり、簡単に列举するだけでも、まず縄文時代では早・前・晩期の横道遺跡、前期の水洗遺跡、早～晩期のへボノ木遺跡、後期・晩期の神道遺跡、晩期の広野遺跡、早・晩期の上遺跡、前・後期の朝妻遺跡などが挙げられるが、まだ十分な調査が及んでおらず、集落などの実態は不明である。



遺 跡 名

1. 西小路遺跡
2. 水洗遺跡
3. 上遺跡
4. へボノ木遺跡
5. 神道遺跡
6. 下見遺跡
7. 山川前田遺跡
8. 安国寺甕棺墓群
9. I期国庁(古宮)
10. II期国庁(阿弥陀)
11. III期国庁(朝妻)
12. IV期国庁(横道)
13. 二本木遺跡

Fig. 110 周辺の遺跡分布図 (1/25,000)

弥生時代では中・後期のへボノ木遺跡、中期の神道遺跡、後期～終末期の朝妻遺跡、中期の二本木遺跡、終末期～古墳時代前期の古宮遺跡などの集落があり、墓地としては中期の安国寺甕棺墓群がある。

続く古墳時代の様相は明らかではないが、7世紀末には低位段丘西端部に筑後国府が置かれ、以後12世紀後半に至るまで3遷する政庁地区とその関連遺構群が中・低位段丘上に広く展開する。

中世には高良大社の神領として荘園となり、有力農民の館と見られる遺構が散在する。以後は農村風景が近年まで広がっていた地域である。

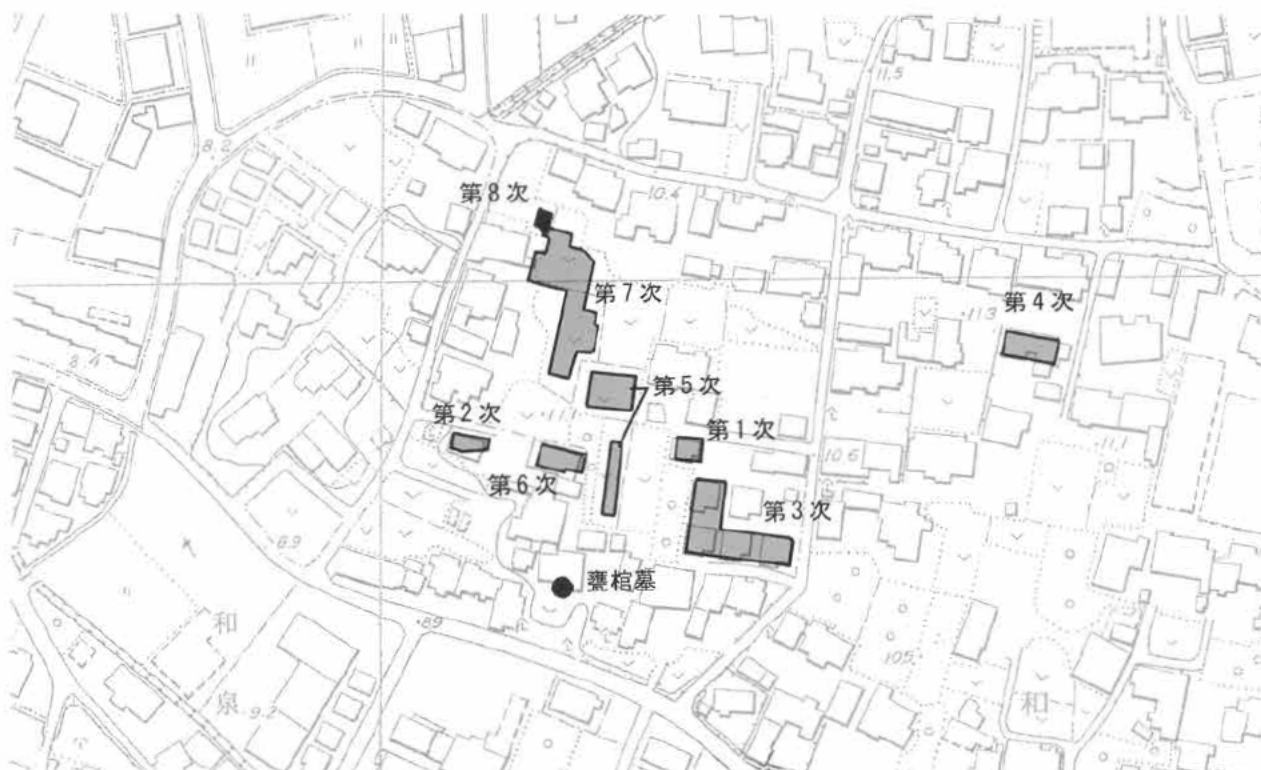


Fig. 111 調査地点の位置と周辺地形図 (1/2,500)

3. 調査の記録

(1) 調査の概要

先述したとおり、今回の調査は住居の進入路造成のため掘削が予定されていたものの、第7次調査の際には植木などがあったため未調査であった部分の補足調査であり、第7次調査区北西部で検出された縄文・弥生時代などの遺構の広がり把握することを目的とし、南北6.5m、東西4.5mの調査区を設定。なお、調査地の南東隅は一部が第7次調査区と重複する。

調査は平成13年1月30日に重機による表土剥ぎを行い、翌31日には遺構検出作業を行った後、各遺構の掘り下げを開始。2月8日には掘り下げを終了し、9日には写真撮影、実測作業と機材撤収を行い、13日に調査区を埋め戻し、調査を終了している。遺構の図面作成は遺跡調査汎用システム「カタタ3DC」を用いて遺構平面図を作成し、さらに土層図などは個別に図面を作成した。遺構写真はカラーリバーサル35mm、モノクロ35mm・6×7フィルムを用いて撮影している。

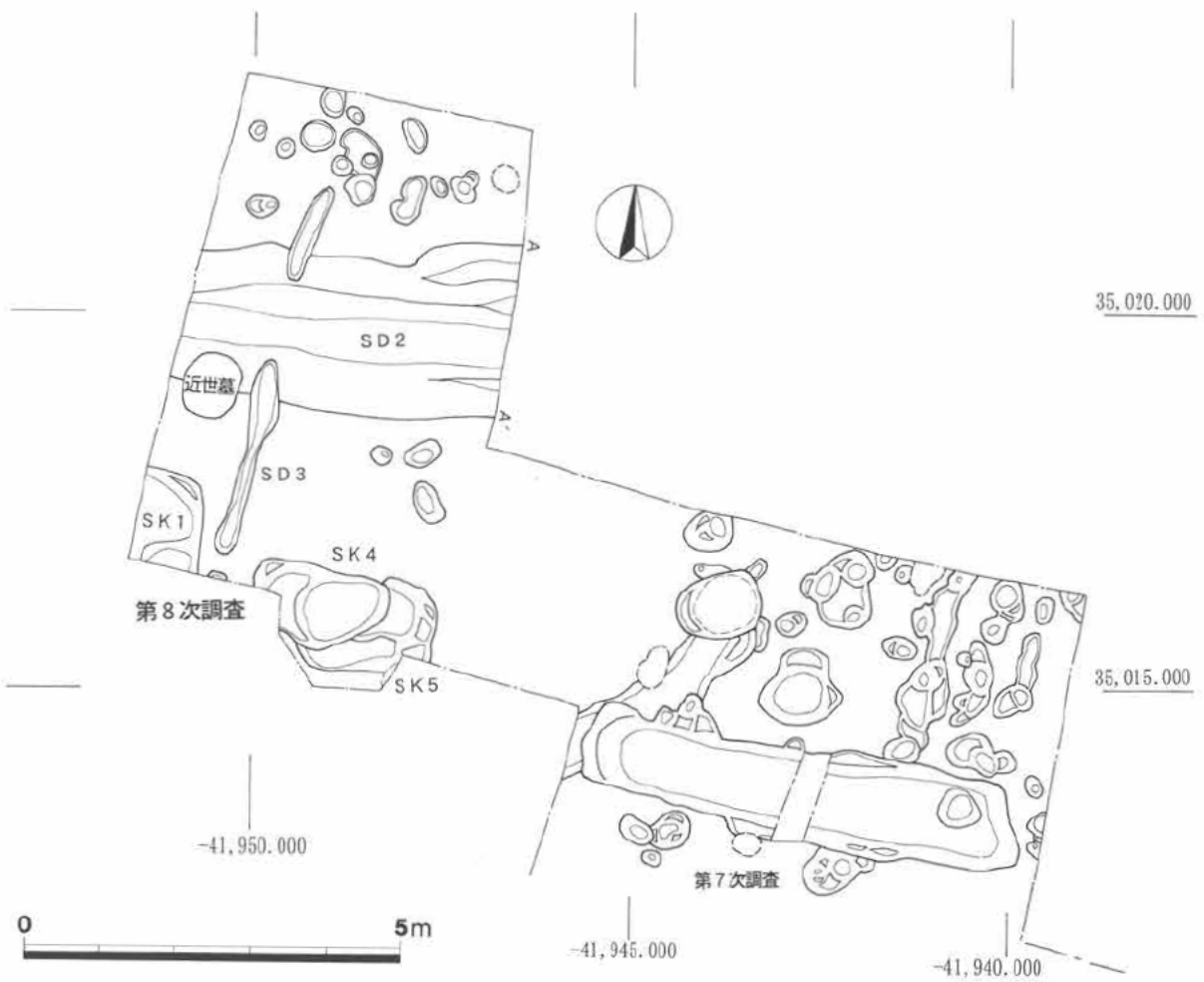


Fig. 112 西小路遺跡第8次調査遺構配置図 (1/100)



Fig. 113 調査区全景（北から）

(2) 遺構の概要

対象地は一度地下げされた後に盛土され、遺物包含層は全く残存していない。現地表面から約40cm盛土を掘り下げると、明黄色砂質土の遺構検出面に達する。地下げは本来の地表面より約1m近く掘り下げられたものと見られ、検出した近世墓は遺構検出面においてすでに人骨が多数散乱した状態であった。

今回検出した遺構は、土坑3基、溝2条、近世墓1基、ピット群である。

土坑

SK1 (Fig. 114) 調査区南西端部で検出。遺構は調査区外へ延びているが、南北1.2m分、東西95cm分を検出した。

深さは15～30cmを測り、平面形は隅丸長方形を呈するものと推定される。埋土は黄色砂質土が少量混入した褐色土による一括埋土。遺物は土師質土器の甕胴部片が12点出土したのみである。

SK4 (Fig. 115・116) 調査区南部で検出。遺構の一部は調査区外となるが、長軸1.3m、短軸は1.0m。底面は西側が一段高くなり、深さは40～60cmを測る。平面形は楕円形。



Fig. 114 SK1完掘状況(東から)

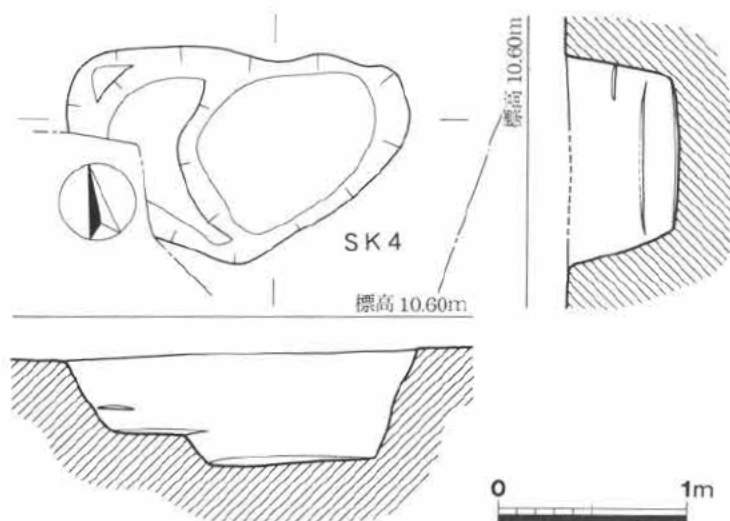


Fig. 115 SK4実測図(1/40)



Fig. 116 SK4完掘状況(東から)

埋土は黄色砂質土が多量混入する暗褐色土による一括埋土で、埋土中からは土師器細片19点、幕末～明治時代頃と見られる肥前系染付磁器片1点、白磁片3点、瓦器細片1点、釘状鉄製品2点、黒耀石剥片3点、砥石1点が出土している。SK5よりも後出する。

SK5 (Fig. 112) SK4よりも先出する土坑。第7次調査の際に東半部が検出されていたが、今回長軸1.8m、短軸1.3mの規模であることが判明。平面形は楕円形を呈し、深さは20～30cmを測る。埋土は暗褐色砂質土による一括埋土で、遺物は全く出土していない。

溝

SD2 (Fig. 117・118) 調査区中央部を東西に走行する溝。東側は北端・南端部を地下げの際に攪乱されるが、上端部幅1.8m、深さ90cmの規模を持つ溝を4.3m分検出した。断面はV字状を呈するが、壁面の傾斜は緩やかで、底面幅は40～60cmを測る。遺物は土師器、須恵器、輸入陶磁器、瓦質土器、

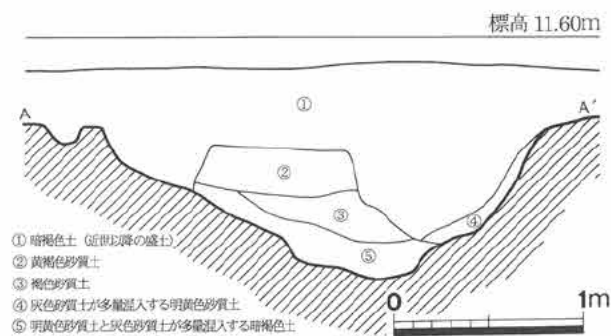


Fig. 117 SD2断面図 (1/40)



Fig. 118 SD2完掘状況 (西から)

陶器などが出土。SD3よりも先出する。

SD3 (Fig. 112) 調査区を南北走行する溝。途中2ヶ所途切れる部分があるが、5.5m分を検出。幅 15~40 cm、深さ 5 cm前後。埋土は暗褐色土で、遺物は幕末~明治頃と見られる染付磁器片が1点出土したのみ。

その他の遺構

調査区北部を中心にピット群を検出したが、出土遺物は全くなかった。また、SD2よりも後出する近世墓1基を検出したが、掘り下げは行っていない。

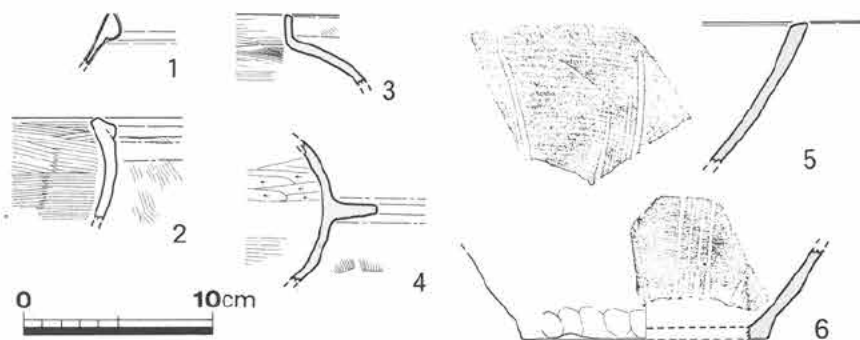


Fig. 119 SD2出土遺物実測図 (1/4)

(3) 遺物の概要

遺物はコンテナ1箱分、点数にして143点が出土した。

出土品には、土師器、須恵器、輸入陶磁器、瓦質土器、土師質土器、縄文土器、黒耀石剥片などがあるが、細片資料が多く、実測し得た遺物は少ない。

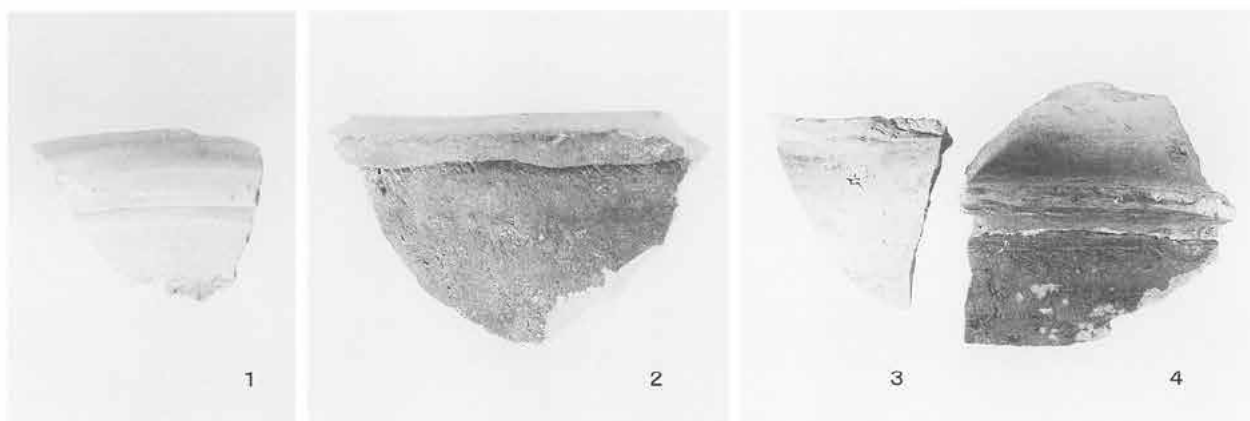


Fig. 120 出土遺物 (写真①)

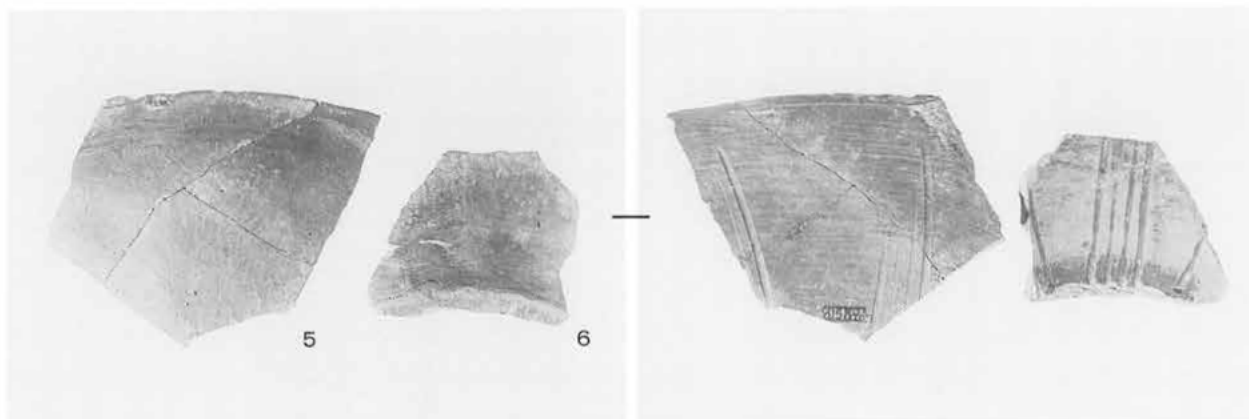


Fig. 121 出土遺物 (写真②)

SD2出土遺物 (Fig. 119~121)

1は口縁部のみ残存する白磁の碗。残存器高 2.8cm。2は土師器の土鍋口縁部片、胎土中には金雲母を含む。色調は内面が鈍い黄橙、外面が黒褐色。残存 5.4cm。

3は瓦質土器の茶釜片、胎土には2mm前後の砂粒、金雲母を含み、色調は内面が黄灰色、外面が灰黄色。残存器高 3.8 cm。4も瓦質の茶釜、銚部付近のみ残存。胎土中に2mm前後の砂粒、雲母を含む。色調は内外面共に黄灰色。7.5cm 分が残存。

5は瓦質土器の播鉢口縁部。胎土には微砂粒子を含み、色調は灰色を呈する。内面は横方向の刷毛目後、櫛目文の摺目を施す。残存器高 7.5cm。6も瓦質土器の播鉢底部片。胎土には微砂粒子を含み、色調は内面がにぶい褐色、外面が灰色を呈する。復元底径 13.0cm、器高は 4.8cm 分が残存する。

4. ま と め

今回の調査は、第7次調査の補足調査として、縄文・弥生時代の遺構の広がりをつまえることを主眼としたが、その時期に該当する遺構は検出されず、遺物についても、SD2から流込品の縄文時代の無文土器片 11 点、黒耀石剥片 11 点、サヌカイト剥片 6 点が出土し、SK4からは黒輝石剥片 3 点が出土したに過ぎない。これは周辺台地上で最も高い場所にある調査地付近が、近世墓の残り具合などから判断して1m近い削平を受けており、遺物包含層が失われたことによるものと判断される。

代わりに注目されるのが、東西溝SD2である。これまで西小路遺跡では中世の土坑、遺物は度々検出され、有力者層の館等が存在したことが推測されてきた。今回発見したSD2は上端部幅 1.8m の規模を持ち、断面も壁面の立ち上がりは緩やかながらもV字状を呈する。この溝より約 20m 北側は台地の端部となるが、SD2はその台地縁辺部に沿って東西走行し、台地上に所在した有力者層の居館などを囲んでいたものと考えられ、地形の状況などを勘案すると、恐らく一辺 100m 前後の規模を持つ館などが存在していたと想定される。付近では第7次調査SK119のように、大量の土鍋が出土した中世の土坑も検出されており、今後は中世遺構についても注意を要する。

その他の遺構は、南北溝SD3、土坑SK1・4が幕末以降のものと見られ、土坑SK5については出土遺物がないため、時期不明である。

VI. 山ノ内遺跡 (第1次調査)

1. はじめに

山ノ内遺跡は、久留米市津福本町に所在する。今回の調査は平成12年12月21日、社会福祉法人くわの福祉会理事長・桑野三郎、津福保育園園長・桑野康子両氏より保育園改築に先立つ埋蔵文化財包蔵地の事前審査依頼書が提出されたことに始まる。依頼地のすぐ西側は平成6年に埋蔵文化財包蔵地の事前審査依頼が提出され、確認調査が行われており、その結果土師器などを含む包含層が認められている。そのため、当該地も包含層や遺構が残っているものと予想された。平成13年1月17日に確認調査を実施したところ、土坑やピットを検出したため、地権者と協議を重ね、対象面積980㎡の内、園舎建設部分約500㎡について発掘調査を行うことで協議が成立した。それを受けて、平成13年7月27日調査依頼が提出され、9月3日より調査を開始し、9月21日に終了した。調査面積は473㎡である。

2. 位置と環境

耳納連山の西端にある高良山（標高314m）から西側へ派生するゆるやかな丘陵は、幾つかの小河川によって開析され、複雑に入り込んでいる。山ノ内遺跡は、小河川のうちの一つである湯ノ尻川に開析された丘陵の北端部に位置し、標高は約11mを測る。丘陵は、柳川県道の西まで延び、丘陵西端部北西側で湯ノ尻川と金丸川が合流し、筑後川へと注いでいる。この一帯は低地の水田地帯となっており、台地上との比高差は約4mを測る。北側は湯ノ尻川を挟んで、津福西小路遺跡や田中遺跡がある丘陵が延びており、その北側に金丸川が西流する。

1. 大隈城跡
2. 鳥飼小学校校庭遺跡
3. 津福古賀畑遺跡
4. 津福立石遺跡
5. 金丸遺跡
6. 宮ノ木遺跡
7. 隈丸遺跡
8. 津福西小路遺跡
9. 津福寺山遺跡
10. 山ノ内遺跡
11. 田中遺跡
12. 津福松山遺跡
13. 津福弓場遺跡
14. 庄屋野遺跡（第5次）
15. 庄屋野遺跡（第1～4次）
16. 津福瓢山遺跡

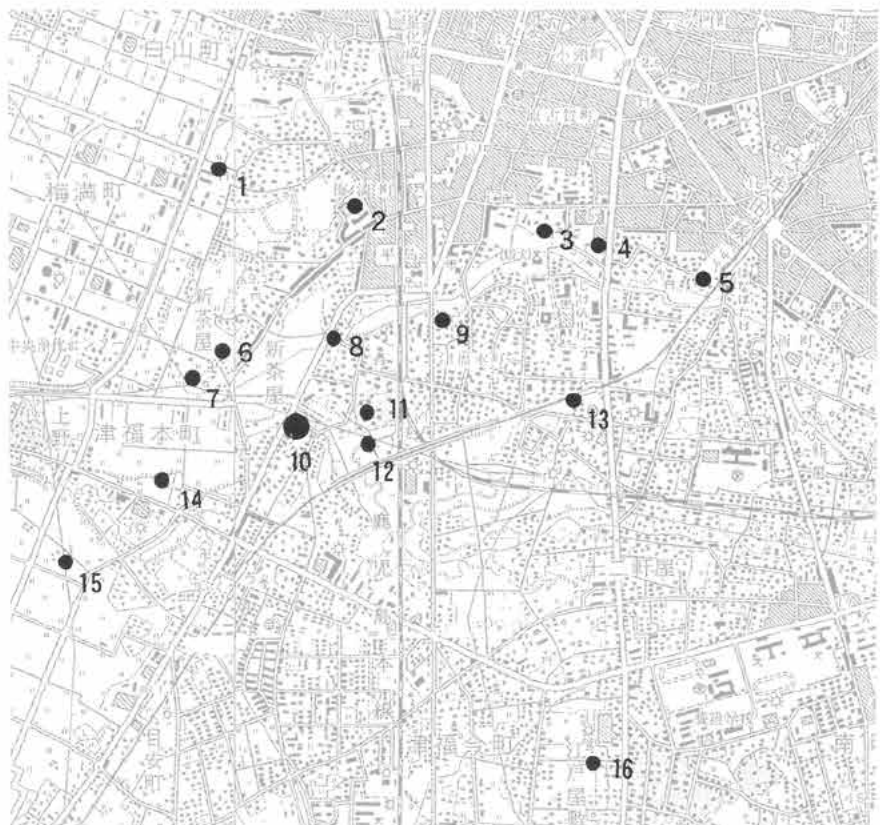


Fig. 122 周辺の遺跡分布図 (1/25,000)

遺跡がある津福本町には、昭和54年に発行された「福岡県遺跡等分布地図」に記載された遺跡はほとんどないが、平成3年以降7ヶ所の遺跡が新たに発見され、発掘調査が実施されている。

津福古賀畑遺跡は、金丸川右岸の丘陵上、現在の聖マリア学院で発見された遺跡で、古墳時代（4世紀前半）の竪穴住居1軒が検出されている。

津福立石遺跡は、金丸川の左岸で発見された遺跡で、ピットと溝を検出している。出土遺物は古墳時代のものが出土しているが、遺構に伴っておらず、中世の遺跡と考えられている。

津福寺山遺跡は、金丸川の左岸の丘陵先端部に位置し、奈良時代の溝、平安時代のピット、江戸時代の溝2条、土坑1基、ピットを検出している。出土遺物は縄文時代早期の土器・石器、弥生土器、土師器、須恵器、輸入陶磁器、近世陶磁器、瓦などが出土している。

津福西小路遺跡は、金丸川と湯ノ尻川に挟まれた丘陵先端部に位置する遺跡である。古墳時代（4世紀中～後半）の竪穴住居2軒・土坑3基、平安時代（10世紀末～11世紀初頭）の溝1条、中世の溝・井戸・土坑・土壌墓などが検出されている。

田中遺跡は、津福西小路遺跡の東南約200mの低台地上に位置し、4世紀後半の竪穴住居1軒、中世の土壌墓1基の他、歴史時代のピットなどを検出している。

宮ノ木遺跡は金丸川右岸の台地上に位置し、弥生時代後期の溝・井戸・土坑、古墳時代の溝などが検出されている。

これらの遺跡の他にも、津福弓場遺跡や津福松山遺跡などがあり、今後さらに遺跡が発見されることが予想される地域である。

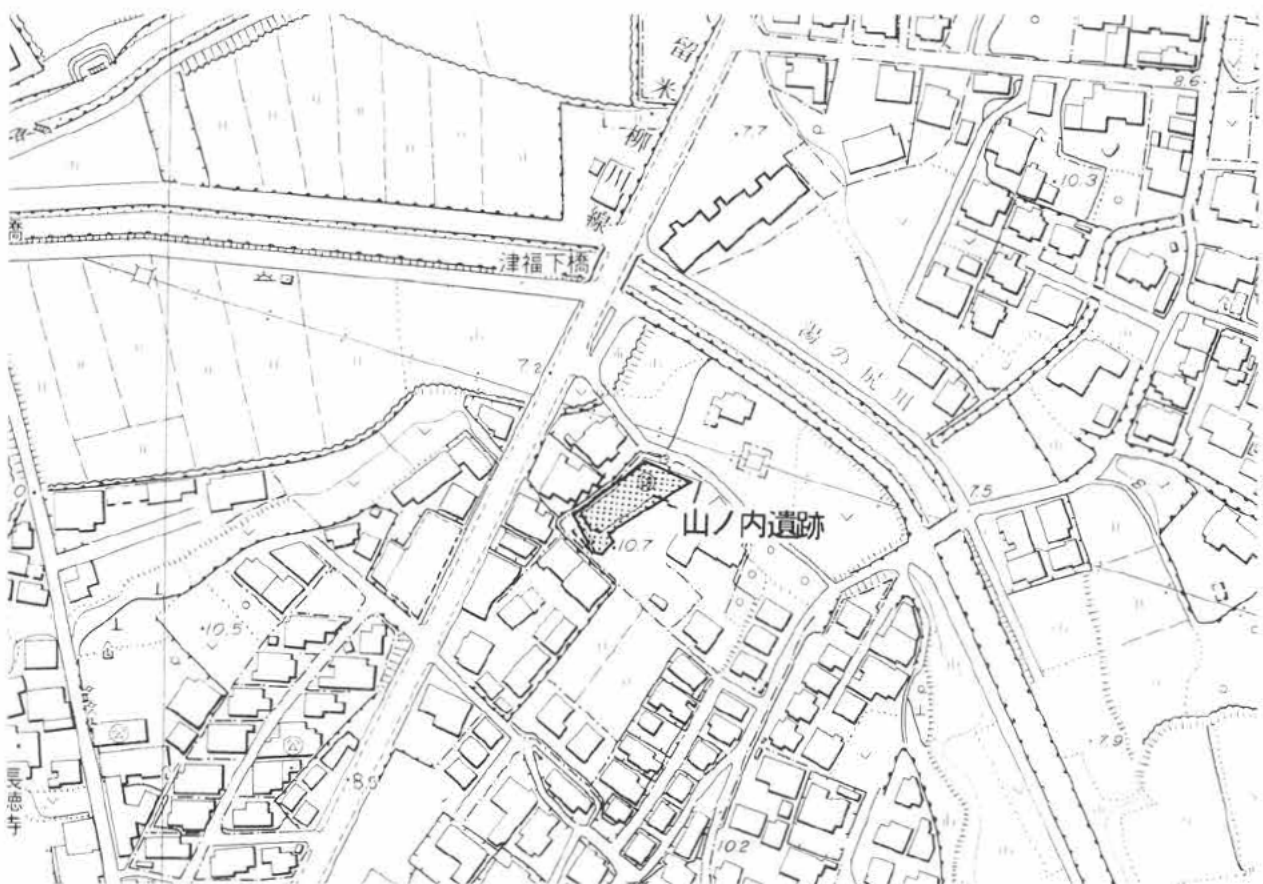


Fig. 123 調査地点の位置と周辺地形図 (1/2, 500)

3. 調査の記録

（1）調査の概要

9月3日より調査区を設定し、重機による表土剥ぎを開始する。南側は表土下約20cmで遺構面に達するが北に向かって地山が傾斜しており、北東端では表土下約60cmと深くなっていた。4日に表土剥ぎが終了し、平行して発掘機材の搬入を行い、作業員さんを入れ、遺構の検出作業を開始する。調査区の南西端で竪穴住居を検出したため、全容が分かるように重機で拡張を行った。調査区の中央部には、攪乱や建物の基礎が溝状に残っていた。7日から遺構の掘り下げを開始し、11日より遺跡調査汎用システムにより遺構の測量を始める。14日に遺構はほぼ掘り上り、全体写真のための清掃を開始する。気球による調査区の写真撮影を19日に行い、20日に遺構の測量が終了し、21日に重機による埋め戻し、及び機材撤収を行い、現地での調査を終了した。

遺構の実測は、落とし穴を水系メッシュ法（1/10）で行い、他は遺跡調査汎用システム「カタタ」を用いて測量を行い、そのデータは「カタタ3DC」に記録・保存されている。記録写真は、空中写真をモノクローム・カラーリバーサル共に6×6で（有）空中写真企画が撮影し、その他の遺構写真はモノクローム35mm・6×7、カラーリバーサル35mmで調査員が撮影した。

（2）遺構の概要

現地表面から-20～60cmで遺構検出面に達する。調査区の南及び西側は石垣で、一段低くなっている。地山面は南東端が高く、北西端との比高差約60cmを測る。調査区の中央部には縦横に攪乱や建物の基礎が残っていた。検出された遺構は落とし穴1基、竪穴住居2軒、掘立柱建物1棟、溝3条、土坑2基の他、多数のピットである。



Fig. 124 調査区全景（南東上空から）

落とし穴

S X 2 (Fig. 126・127)

調査区南東部で検出した。拡張区から僅かに広がっていたため、人力で表土を除去し、全体を確認できた。南西部の上面に浅い攪乱がみら



Fig. 126 S X 2完掘状況（南西から）

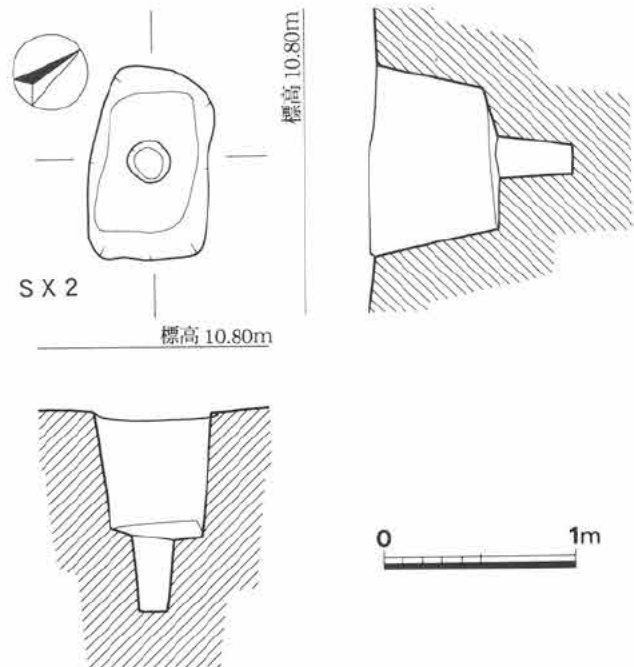


Fig. 127 S X 2実測図（1/40）

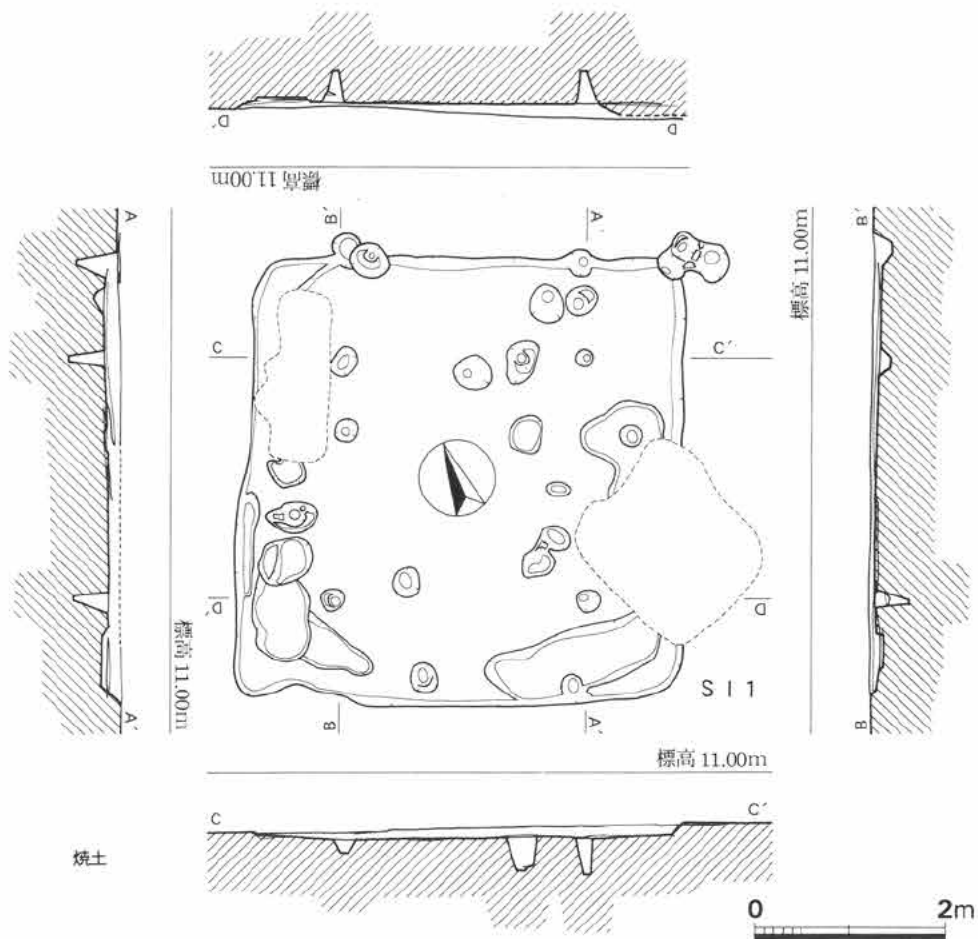


Fig. 128 S I 1実測図（1/80）

れたが、平面形は長辺約 1m、短辺約 55cm の若干崩れた隅丸長方形を呈する。床面は 75cm×60cm、深さ約 70cm の隅丸長方形を呈しており、床面中央部に径 20cm、深さ 40cm のピットが検出された。埋土は褐色で、出土遺物は無い。

竪穴住居

S I 1 (Fig. 128・129)

調査区南西側で検出した、長辺 4.8 m×短辺 4.6 m の方形プランを呈する住居である。住居の東壁及び北西側が攪乱で切られている。住居内埋土は黒褐色土で西側壁中央沿いに床面から数 cm 浮いた状態で焼土が確認された。床面から十数個のピットが検出されており、そのうちの径 20～40cm、深さ 20～40cm のピットが支柱穴になり、4 本柱になるものと思われる。出土遺物は、土師器高坏や甕の破片が出土している。



Fig. 129 S I 1 完掘状況(南東上空から)

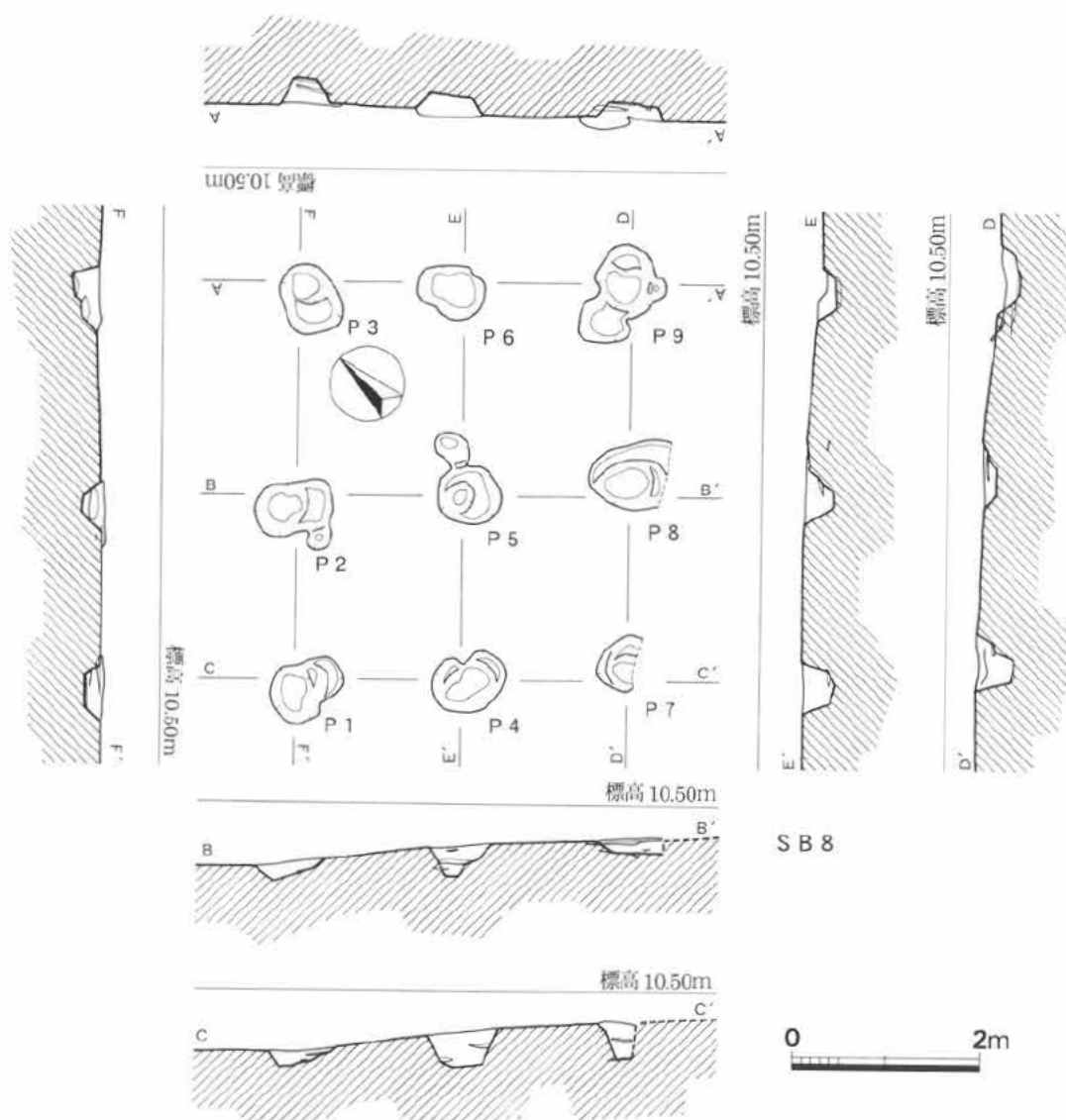


Fig. 130 S B 8 実測図 (1/80)

S I 7 (Fig. 125)

調査区の北東側で検出した。南壁は攪乱の溝に切られており、北壁は地山の傾斜で、東壁は調査区域外へ広がり、西壁の一部を検出したに止まっている。竪穴住居でないかも知れないが、西側壁が直線的に延びており、床面がほぼ平坦であるため竪穴住居として扱った。一辺約 4.5m の方形を呈しており、残存壁高は約 10cm である。床面から 10 個程のピットを検出している。そのうちの 2 個のピットは S B 8 に伴うものであり、住居に伴うと思われるピット 2 個を検出し、支柱穴は 4 個になるものと考えられる。住居内埋土は黒褐色であり、押型文土器や土師器甕・坏などの遺物が出土している。



Fig. 131 S B 8 完掘状況(北西から)

掘立柱建物

S B 8 (Fig. 130・131)

2 間 (4.2m) × 2 間 (3.6m) の総柱建物である。調査区の北側隅で検出した。一部のピットを攪乱で切られてはいるが、径 50~70cm の楕円形の掘方を持つ。各ピットとも建て替えられたものか段を有している。上面確認では切り合い等は不明であった。柱間は桁行 2.1m 等間、梁間 1.8m 等間を測る。計画方位は N-46°-E で、柱穴の深さ 15~40cm を測る。ピット内埋土は黒褐色で土師器甕などの遺物が出土している。

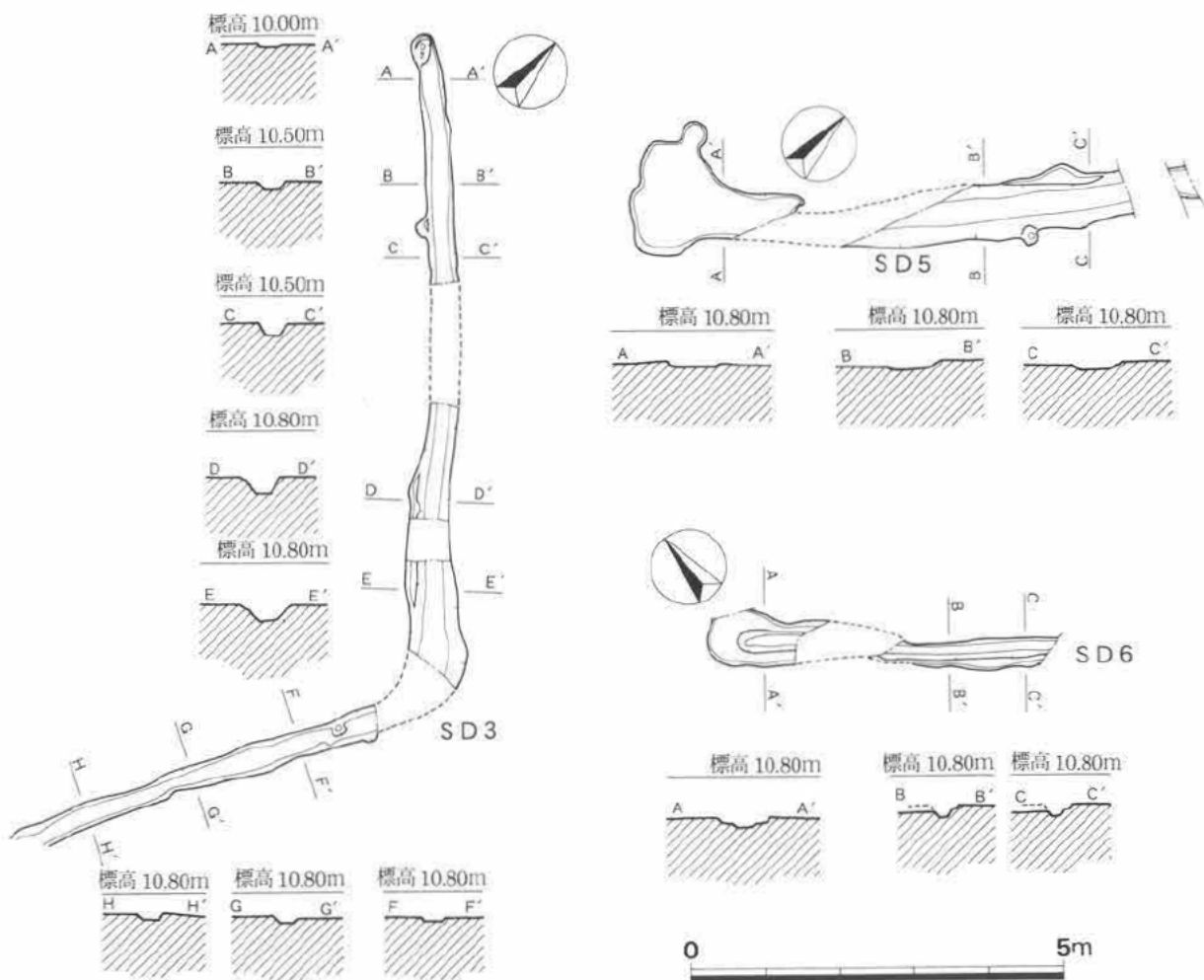


Fig. 132 SD 3・5・6 実測図 (1/100)



Fig. 133 SD3完掘状況(北東から)



Fig. 134 SD5完掘状況(北東から)



Fig. 135 SD6完掘状況(北東から)

溝

SD3 (Fig. 132・133)

調査区北東側で検出した。調査区の北側壁から約2mの地点から始まり、約9m東へ流れ、南へ折れ約5m分を検出した。コーナー部分に攪乱が切り込まれている。溝幅30～80cm、深さ5～20cmを測る。溝断面は逆台形状を呈し、底はゆるやかに北へ傾斜している。埋土は褐色で、土師器小皿・坏、瓦質の鉢、天目碗などが出土している。

SD5 (Fig. 132・134)

調査区の南東側で検出した溝である。長さ約7.5mを検出したが調査区外へ延びている。溝SD3のコーナー部分のすぐ北側から始まり、斜めに幼稚園の基礎に切られ、北側もSD6との切り合い部分を攪乱に切られ、北東側調査区壁沿いは重機で約3cmほど削り過ぎている。溝の南西側は土坑状に広がり、長軸約1.9m、短軸約1.0m、深さ約10cmを測る。溝幅は50～60cmで、深さは10～15cmであり、土師器細片が出土している。

SD6 (Fig. 132・135)

調査区北東側壁沿いで発見した。幅約70cm、長さ約4.5m、深さ約20cmを測る。二段掘りされており、下段は幅20cm前後、深さ約10cmになる。埋土は明褐色土で、土師器細片が出土しているが、図示出来る遺物の出土は無い。

土坑

SK4 (Fig. 125)

竪穴住居SI1の西側で検出した。長軸2.3m、短軸1.8mの平面系が楕円系を呈する土坑である。埋土は外側に黒色土が入り、中に黄褐色地山粘土が見られた。恐らく樹木倒壊痕と考えられたため、掘り下げは行っていない。

SK9 (Fig. 136)

調査区南西隅で検出した土坑である。長軸1.2m、短軸60cm、深さ15～25cmを測る、平面形は中央部がくびれた楕円形の土坑である。土坑の東側壁に確認面から-15cmに稜を持つ。底面は、長軸78cm、短軸45cmの中央部南側がくびれた楕円形で、東が深くなっている。土坑内埋土は、黒褐色を呈していた。土坑内埋土及び床面からの出土遺物は皆無である。

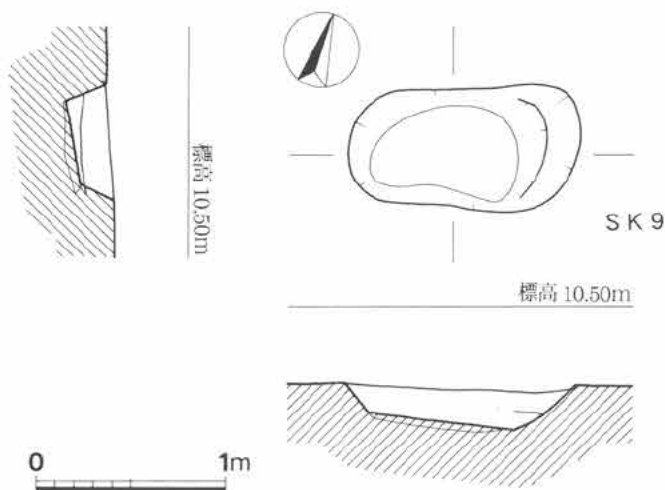


Fig. 136 SK9実測図 (1/40)

(3) 遺物の概要

山ノ内遺跡の発掘調査は、総面積 473 m² の調査であり、縄文～中世に及ぶ遺構が検出されたため、多くの遺物が出土するものと期待していたが、出土量は浅パンコンテナにして、たった1箱であった。調査地周辺の表面採集も試みたが、幼稚園の園庭として使用されており、砂などが入れられていたため、遺物の採集はできなかった。今回の調査で出土した遺物は細片が多く、材質や器種も不明なものが殆どであった。しかしながら、今回の調査は山ノ内地区で初めての調査であるため、整理作業の段階で、出来る限り多くの土器を実測することを主眼に置き、遺物のセレクトを行った。その結果、縄文時代早期の押型文土器をはじめ、古墳時代の須恵器坏・蓋、土師器甕、歴史時代の土師器坏、須恵器蓋、中世の土師器鉢、瓦質土器の鉢、陶器碗などの遺物が出土しており、計 24 点実測し、図示している。

縄文時代の遺物としては、押型文土器が 6 点出土している (Fig. 137・1～6)。これらの土器は、堅穴住居やピット出土で土師器などと共に出土しており、遺構に伴うものではない。

個別遺構出土遺物としては 7～15 がある。S I 1 出土遺物として 7～10、11～13 は S D 3 溝出土、14 は S I 7 出土、15 は S B 8 の P 3 からの出土である。ピットでは、16 が S P 11、17 は S P 12、18 は S P 13、19 は S P 14、20 は S P 16、21 は S P 17、22 は S P 19 からの出土である。22・23 は S I 1 を切って検出された攪乱からの出土である。

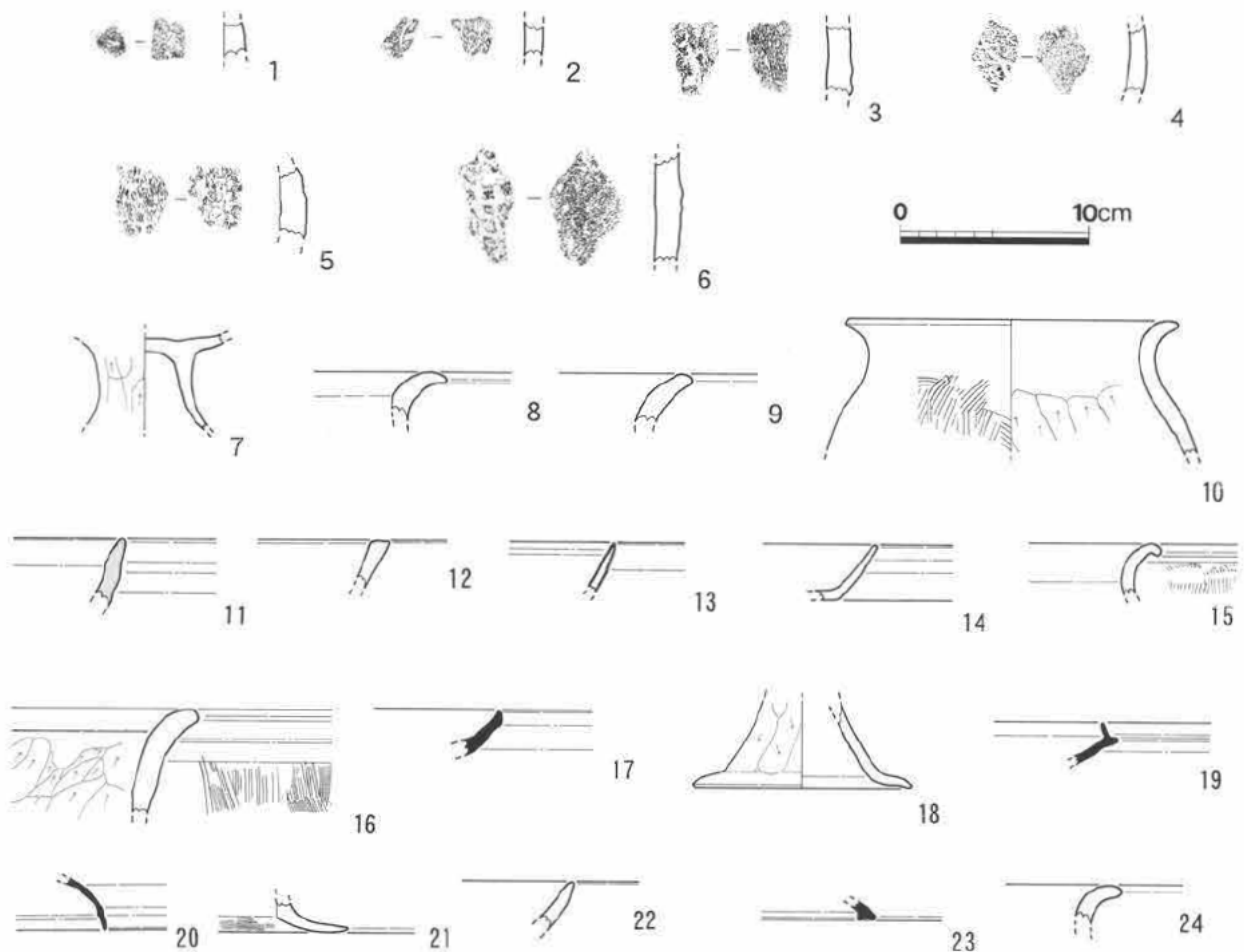


Fig. 137 出土遺物実測図 (1/4)

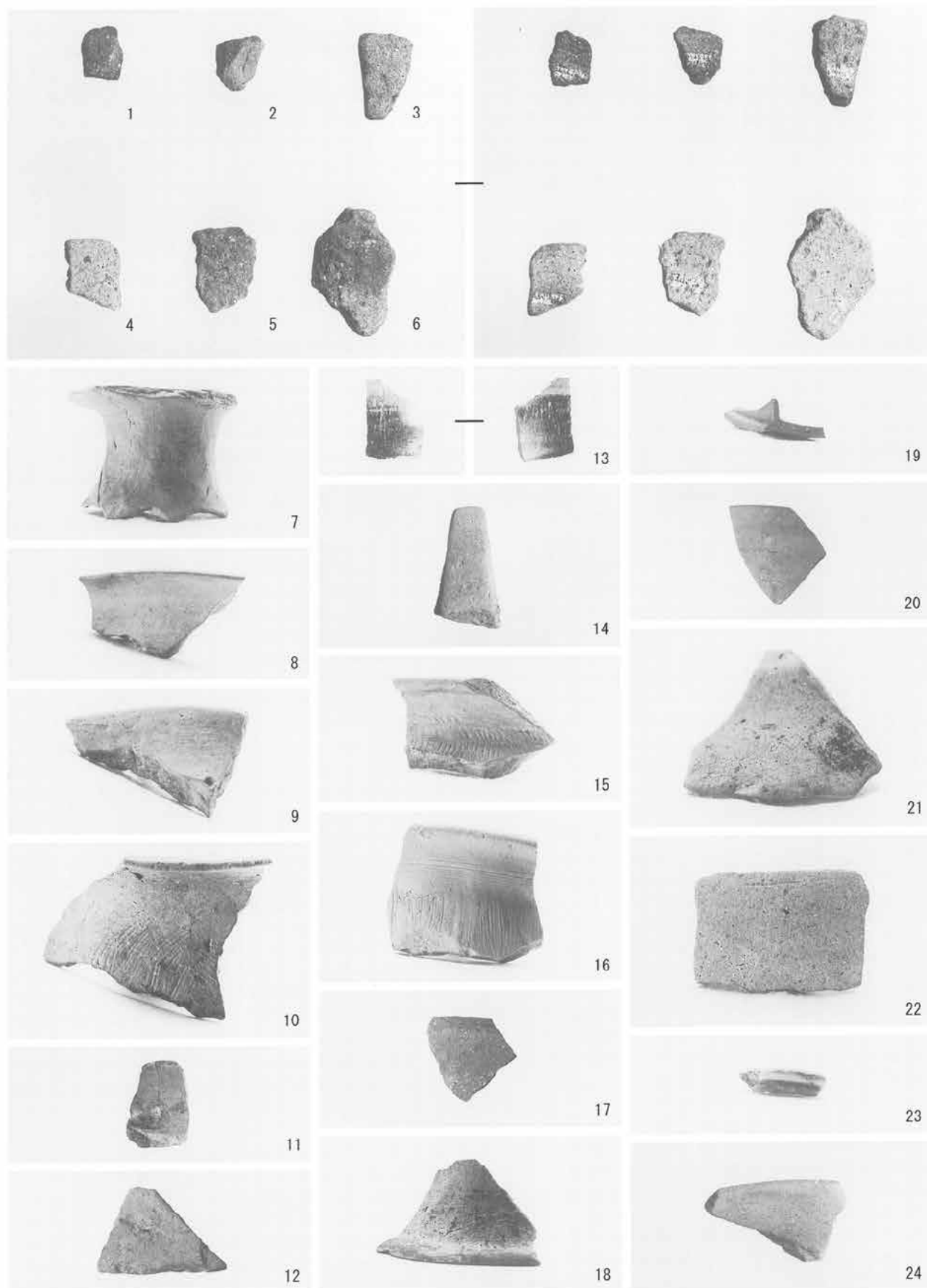


Fig. 138 出土遺物（写真）

Tab. 14 山ノ内遺跡第1次調査出土遺物観察表

遺物No	出土遺構	材質	器種	法 量			色 調		調 整		胎 土	備 考	登録番号
				口 径	底 径	器 高	外 面	内 面	外 面	内 面			
1 Fig. 137・138	SP14	縄文土器	鉢			(2.6)	暗赤褐色	褐色	楕円文	ナデ	砂粒		200015 -00001
2 Fig. 137・138	SI7	縄文土器	鉢			(2.5)	橙色	灰褐色	楕円文?	不明	砂粒		200015 -00002
3 Fig. 137・138	SI7	縄文土器	鉢			(4.3)	にぶい橙色	明褐色	不明	ナデ	4mm程度の砂粒		200015 -00003
4 Fig. 137・138	SP14	縄文土器	鉢			(4.1)	橙色	にぶい黄褐色	格子文	ナデ	3mm程度の砂粒		200015 -00004
5 Fig. 137・138	SP18	縄文土器	鉢			(4.0)	明褐色	にぶい黄色	楕円文	ナデ	5mm程度の砂粒		200015 -00005
6 Fig. 137・138	SI1	縄文土器	鉢			(6.5)	明灰黄色	橙色	楕円文	ナデ	砂粒 角閃石		200015 -00006
7 Fig. 137・138	SI1	土師器	高坏			(5.0)	橙色	橙色	ヘラ削り	ナデ	砂粒	僅かに朱が残る	200015 -00007
8 Fig. 137・138	SI1	土師器	甕			(2.6)	にぶい橙色	橙色	横ナデ	横ナデ	4mm程度の砂粒		200015 -00008
9 Fig. 137・138	SI1	土師器	甕			(2.6)	橙色	橙色	横ナデ	横ナデ	細砂粒		200015 -00009
10 Fig. 137・138	SI1	土師器	甕	(17.6)		(7.0)	明褐色	にぶい黄褐色	横ナデ 刷毛目	横ナデ ヘラ削り	1.5cm程度の礫		200015 -00010
11 Fig. 137・138	SD4	瓦質土器	鉢			(3.6)	灰色	灰色	横ナデ	横ナデ	砂粒		200015 -00011
12 Fig. 137・138	SD4	土師器	鉢			(2.6)	にぶい橙色	にぶい橙色	横ナデ	横ナデ	砂粒		200015 -00012
13 Fig. 137・138	SD4	陶器	碗			(2.7)	黒褐色	黒色	横ナデ ヘラ削り	横ナデ	微砂粒	天目	200015 -00013
14 Fig. 137・138	SI7	土師器	坏			(3.0)	橙色	橙色	横ナデ	横ナデ	微砂粒	底部ヘラ切り	200015 -00014
15 Fig. 137・138	SB8 P3	土師器	甕			(2.6)	橙色	橙色	横ナデ 刷毛目	横ナデ	細砂粒		200015 -00015
16 Fig. 137・138	SP11	土師器	甕			(5.6)	橙色	橙色	横ナデ 刷毛目	横ナデ ヘラ削り	細砂粒		200015 -00016
17 Fig. 137・138	SP12	須恵器	坏			(2.4)	灰色	灰色	横ナデ	横ナデ	細砂粒		200015 -00017
18 Fig. 137・138	SP13	土師器	高坏		(11.6)	(4.6)	橙色	橙色	削り 横ナデ	削り 横ナデ	4mm程度の砂粒	外面に朱が残る やや軟質	200015 -00018
19 Fig. 137・138	SP14	須恵器	坏身			(2.2)	灰色	灰色	横ナデ	横ナデ	砂粒		200015 -00019
20 Fig. 137・138	SP16	須恵器	坏蓋			(2.8)	灰オリーブ色	灰オリーブ色	横ナデ ヘラ削り	横ナデ	微砂粒		200015 -00020
21 Fig. 137・138	SP17	土師器	高坏			(2.0)	橙色	橙色	ナデ	ナデ 刷毛目	砂粒	外面に煤が付着	200015 -00021
22 Fig. 137・138	SP19	土師器	坏			(2.6)	橙色	橙色	横ナデ	横ナデ	砂粒		200015 -00022
23 Fig. 137・138	攪乱	須恵器	蓋			(1.0)	灰白色	灰白色	不明	不明	細砂粒	軟質	200015 -00023
24 Fig. 137・138	攪乱	土師器	甕			(2.1)	にぶい褐色	にぶい黄褐色	横ナデ	横ナデ	砂粒		200015 -00024

【遺物観察表凡例】

1. 口径・底径・器高の数値の単位はcmである。また()内の数値は現存、または復元値を示す。
2. 遺物登録番号は、久留米市教育委員会文化財保護課が定める出土遺物の登録番号である。

(例) 200115 - 00001

調査番号 遺物番号

3. 色調は『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社発行、1997年版）による。

4. ま と め

山ノ内遺跡の発掘調査では、落とし穴1基、堅穴住居2軒、掘立柱建物1棟、溝3条、土坑1基の他、多数のピットを検出した。また、出土遺物としては、縄文土器（押型文土器）、古墳時代の須恵器・土師器、平安時代の土師器、室町時代の瓦器・土師器・陶器が出土している。遺物の出土量は浅パンコンテナ1箱と少なく、細片しか出土しなかった遺構が殆どで、時期の決定に至っていない遺構が大半である。以下各遺構・遺物の概要を記し、まとめたい。

調査区の南西隅で検出した落とし穴は、長辺約1m、短辺約55cm 深さ70cmを測る、平面形が若干崩れた隅丸長方形を呈する土坑で、坑底は長辺75cm、短辺60cmの隅丸長方形で、中央部に径20cm、深さ40cmのピットが発見されている。壁はほぼ直線的に落ちており、長軸方向は北西―南東を示している。遺物は何も出土しておらず、埋土は明黒褐色土であった。この遺構は形態的に見て、縄文時代の落とし穴と考えられる。今回の調査では落とし穴は1基しか検出されなかったが、単独とは考え難く、調査区域外へ広がっていたものと推定される。また土坑SK4も、この時代の樹木倒壊痕と思われる。縄文時代早期の遺物として、押型文土器が6点出土している。これらの土器は、堅穴住居やピットなどからの出土であり、遺構に伴っているものは無く、縄文の包含層も検出されていない。北西側は地山面が徐々に下がり、縄文時代の遺構としては、調査区の南西部一帯に広がるものと想定される。

弥生時代の遺構・遺物は今回の調査では発見されていない。古墳時代になると6世紀後半の須恵器がピット内から出土している。溝SD6は土師器の細片しか出土していないが、埋土が他の遺構と違い明褐色土で硬く締まっており、この時代の遺構かも知れない。

落とし穴の横で検出した堅穴住居は、長辺4.8m、短辺4.6mの方形プランで、西側壁添いに竈跡と思われる焼土が発見されている。支柱穴は4本で、床面は利用期間が短かったのか、硬くはなっていない。住居内埋土中から土師器高坏や甕の破片が数点出土しており、はっきりした年代は言えないが、恐らく7世紀代のものになると思われる。もう1軒の堅穴住居と思われる遺構は調査区の北東側で検出している。この堅穴は調査区域外へ広がり、南側は近代の攪乱で切られている。また掘立柱建物（SB8）と切り合い関係にある。上面確認では堅穴内埋土にピットの切り込みは検出できなかった。しかしながら、堅穴内の埋土から9世紀代の土師器坏が出土しており、この遺物は上面から切り込まれたピットに伴うものと考えられ、SI1と同時期のものと思われる。

掘立柱建物SB8は総柱の建物であり、柱間は桁行7尺、梁間6尺を測る。堅穴住居SI7と切り合い関係にあるが、先後関係は不明であった。しかしながら、堅穴埋土中から9世紀代の土師器坏が出土しており、この遺物が掘立柱建物に伴うものとも考えられるが、現状では判断出来ない。

溝SD4は調査区北側で検出している。この溝からは、土師器小皿・坏・鉢、瓦質土器の鉢、天目碗などの遺物が出土している。これらの遺物は、鎌倉末～室町時代のものと思われる。溝の規模は幅30～80cm 深さ5～20cmで、削平を受けていることを考えても、屋敷地を囲むような大規模な溝ではない。

以上、山ノ内遺跡の概要を述べてきたが、本遺跡は縄文時代から室町時代までの複合遺跡であることが明らかになった。地形的に見て、当該地が遺跡の北西端部に位置しており、遺跡自体、湯ノ尻川沿いに東及び南へ広がるものと想定される。また湯ノ尻川を挟んだ北方の津福西小路遺跡や田中遺跡との関係も不明な点が多い。今後周辺の調査が進めば、次第に明らかになっていくであろう。

VII. 白川遺跡（第1次調査）

1. はじめに

本遺跡は久留米市国分町字下尾 215-12 外に所在する。平成 13 年 9 月 3 日付で地権者より専用住宅建設に伴う埋蔵文化財包蔵地の確認依頼が提出された。既存建物北側での試掘調査の結果、良好な包含層の残存とピットを確認、土師器を主体とする遺物も出土した。新築建物の基礎は地盤調査の結果を受けて、パイル打ちが決定しており、遺跡の破壊が確実と考えられた。地権者側と協議の結果、新築建物部分の発掘調査を実施することで合意した。

調査は、平成 13 年 10 月 1 日より開始、同年 10 月 5 日に終了した。なお、対象面積は 347 m²で、そのうち調査面積は、47 m²である。

2. 位置と環境

久留米市街地の南東部、J R 久大本線南久留米駅の南東約 1km に位置する。遺跡は、高良山（標高 312.3 m）から西方へ派生する低台地上に立地し、標高は概ね 32m を測る。一帯は、高良川によって形成された扇状地が広がる。更に小河川によって開析を受けた小谷が多数あり、湧水が豊富である。

縄文時代には、本遺跡の西側一帯は、縄文時代の遺物が広く散布する日渡遺跡群として著名で、阿高式、小池原上層式、北久根山式、晩期の粗製土器などが採集されている。近年は正福寺遺跡において道路建設に伴う調査が実施され、その状況が明らかになりつつある。

弥生時代としては、近年日渡遺跡において後期の竪穴住居群や掘立柱建物を確認されている。

古墳時代になると、遺跡から南側にある丘陵上に大形の前方後円墳を含む多数の古墳が営まれる。5 世

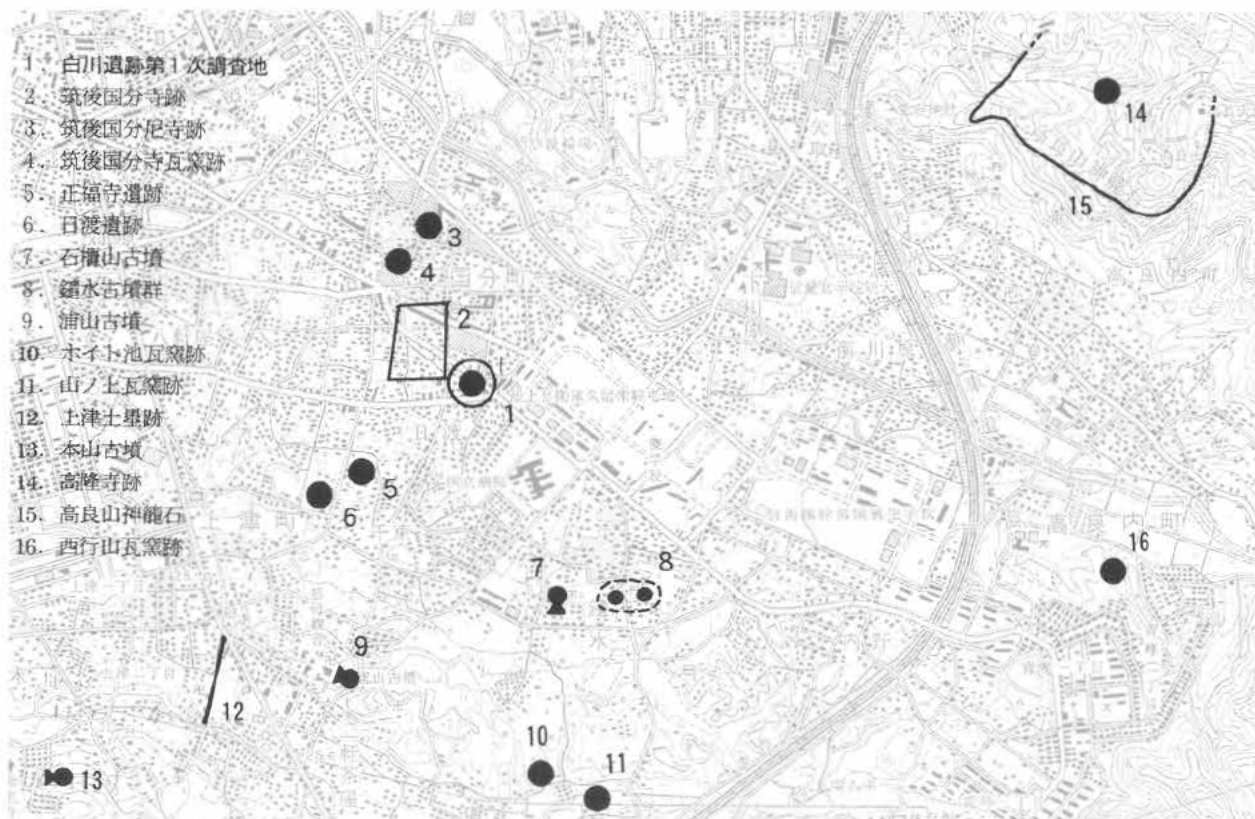


Fig. 139 周辺の遺跡分布図 (1/25,000)



Fig. 140 調査地点の位置と周辺地形図（1/2,500）

紀代の前方後円墳として、石障を有する初期横穴式石室の藤山甲塚古墳、全長 110mで横口式家形石棺をもつ石櫃山古墳、同じく横口式家形石棺であるが棺内に線刻文様を施す浦山古墳がある。また、鍵水古墳群のように石棺系小石室を持つ墳墓が営まれる。

奈良時代～平安時代には西に隣接して筑後国分寺が営まれる。発掘調査によって講堂と塔の一部を検出し、周辺域の調査も断続的に実施されているが、伽藍及び、関連施設の配置状況や存続期間など不明確な点が多い。なお、伽藍については、講堂と塔の位置から筑前国分寺と同様の配置が推定されていたが、近年の東回廊推定線上の調査では遺構が検出されず、なお再考の余地がある。



Fig. 141 調査区全景（南東から）



Fig. 142 調査区西壁面土層（東から）

3. 調査の記録

（1）調査の概要

調査地の地形は、南側に谷が入るため、北から南へ向けて緩やかに傾斜している。表土剥ぎの段階で対象地南側が沼状に落ち込むことが判明したため、北側に約10m×4mの東西トレンチを設定した。

基本層序は、表土（約20cm）・暗茶色土（遺物包含層：約50cm）の順で黄色粘土上面に達する（Fig. 143）。

写真記録は、カラーリバーサル35mm、モノクローム35mm・6×7で撮影した。図面記録は、遺構掘り下げ完了箇所から、遺跡調査汎用システム「カタタ3DC」で作成した。

（2）遺構の概要

遺構は少なく、ピットの他は、地形の落ち込みや現代の沼状遺構（SG11）のみである。調査区の南半部は沼状の落ち込みとなる。

ピットは、直径20～50cm程で、深さは6～34cm程度で平均19cmと浅い。遺物は弥生土器、土師器、須恵器細片数点が出土したのみである。土師器には、黒色土器（内黒）片が見られる。

SX9は、地形の落ち込みである。極めて浅く、包含層の一部が窪み状に残存したものと思われる。

（3）遺物の概要

調査面積が狭く、出土遺物量も極めて少ない。なお、（ ）内の数字は本市遺物登録番号である。

1（200118-00001）は、SX9出土の須恵器坏である。底部が1/4程残存する。高台部は体部と底部の境から底部寄りに付き、極めて扁平となる。高台径は8.0cmを測る。体部外面は回転ナデで成形する。胎土には砂粒を含み、色調は、内外共に灰色を呈する。

2（200118-00002）は、SX9出土の土師器坏である。底部のみ残存する。体部は回転ナデで仕上げられる。底部は回転ヘラ切後、板目が付き、形状はやや丸く仕上がる。底径は6.7～7.4cmを測る。胎土は赤色粒子を含み、色調は内外共に明黄褐色である。

3（200118-00003）も同じくSX9出土の黒色土器である。内黒の碗の口縁部

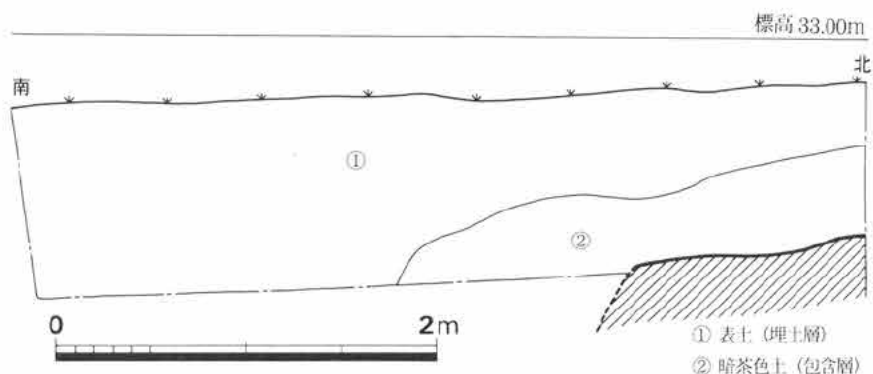


Fig. 143 調査区西壁面土層図（1/40）

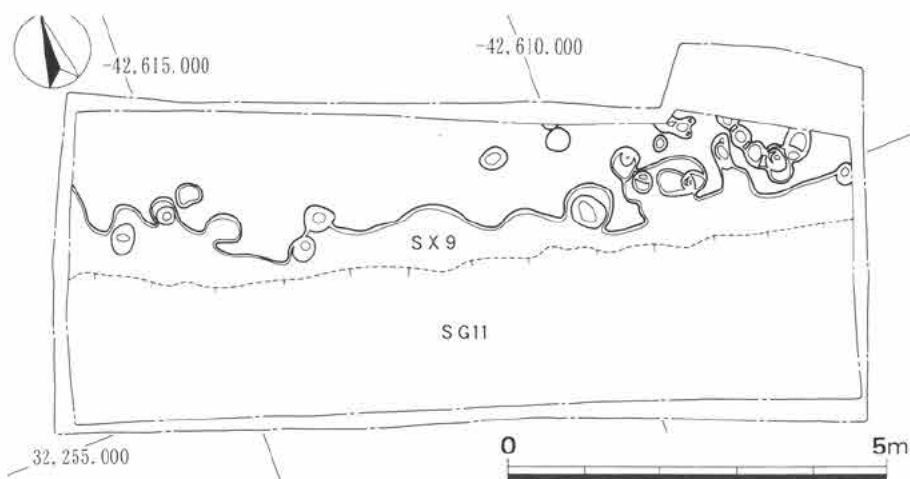


Fig. 144 白川遺跡第1次調査遺構配置図（1/100）

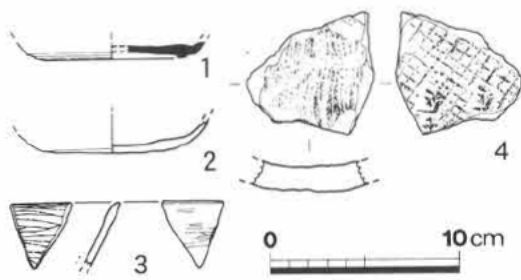


Fig. 145 出土遺物実測図 (1/4)

破片で直線的に外側に向かって延びる。内面は、横方向のへら磨きで黒色処理を施し、外面も横方向のへら磨きで仕上げる。

4 (200118-00004) は、SG11 出土の平瓦片である。厚さ 1.2 cm を測る。色調は灰色を呈し、焼成は良好である。胎土には 1～4 mm 程度の砂粒を若干含む。凹面は横糸が解れ荒れた布目痕が見られ、凸面は斜格子文叩きを施す。凸面の叩きには、「延喜」の左文字が配置されている。同一の

叩き板による窯跡出土例としては、本市高良内町所在の西行山瓦窯跡から採集された丸瓦がある。こちらは、「延喜十九年」銘が残っている。本例は破損しているが、同一の叩き板から形成された以上、本来「延喜十九年」銘を有していたことは、まず間違いない。

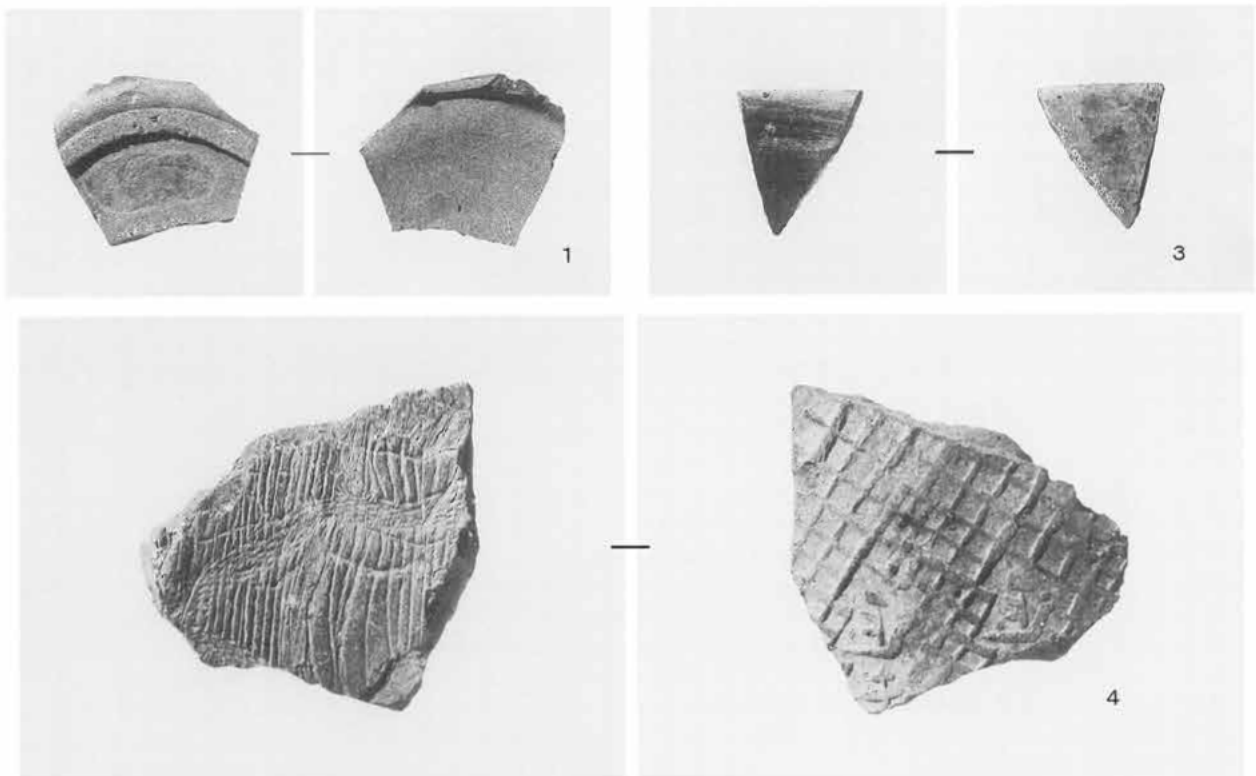


Fig. 146 出土遺物 (写真)

4. ま と め

遺構は、少ないものの遺物は 8 世紀中頃～10 世紀前半頃までの時期が中心であり、時期的な重なりから、遺跡の北西に隣接する筑後国分寺跡との関連が想定できる。「延喜」銘文字瓦も、高良内町西行山瓦窯で製作され、合川町筑後国府跡第 2 期政庁、国分町筑後国分寺跡などに供給されたものである。今回の調査は国分寺関連施設の広がりを知る上で、今後の調査への期待を繋ぐものとなった。また、調査区内の殆どは、沼地であったが、調査区の北側には、遺物包含層が残存していることが判明した。遺跡の中心は今回の調査地より、北側にあるものと思われる。

Ⅷ. 庄島侍屋敷遺跡（第6次調査）

位置と環境

遺跡は、久留米市庁舎の南方 500m 付近に広がる住宅地に位置する。標高 11~12m を測り、周辺に展開する町屋に比べて 2~4m 高位に立地する。庄島侍屋敷は 17 世紀前半に久留米城下町の南端部に形成された武家屋敷で、御側足輕・扶持人・御徒士組の居住地や、上級武士の中・下屋敷が設けられている。周囲を見渡せば東側には柳河往還が走行し、北方から西方にかけては池町川が侍屋敷を取り囲むように流れる。また南方には町屋や畑地が広がっている。

検出遺構と出土遺物

土坑やピットなどが検出されたが、限られた調査面積であり、遺構の全容を把握するまでには至っていない。調査区の東端で検出した土坑は長軸 4 m 以上、深さ 1.50m 余りの、楕円形プランを呈する大形の土坑であり、穴倉等の可能性も考えられる。

出土遺物は陶磁器、土師器、瓦質土器、瓦、土鈴、煙管、銭貨などが見られ、特に瓦は軒丸・軒平瓦を含む相当数が出土した。また狭い調査範囲ながら煙管が雁首と吸口を合わせて 10 個近くも出土しているのが特徴である。これらの遺物はいずれも 18 世紀前半に比定される。この他、特筆すべきものとして内外面に金箔を塗布した陶器皿が 1 点出土している。

所 見

今回の調査地点は、『天保年間図』（1830~1844）に名が見える「石井家」の屋敷地内に含まれている。絵図から窺う限りにおいては「石井家」の玄関口は北側の通りに面しており、今回の調査範囲は屋敷の裏庭に相当する部分であった。よって廃棄土坑を中心とする大形の遺構が重複して営まれている。また、当初は屋敷地の裏通りに伴う側溝等の検出が期待されたが、今回は確認し得なかった。

なお、本報告は平成 14 年度に行う予定である。

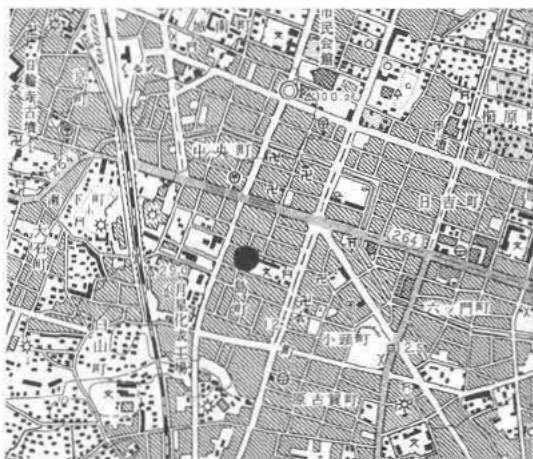


Fig. 147 遺跡の位置図 (1/25,000)



Fig. 148 調査区全景（北から）



Fig. 149 出土遺物（写真）

報告書抄録(1)

ふりがな	へいせい13ねんど　くるめしないいせきぐん							
書名	平成13年度　久留米市内遺跡群							
シリーズ名	久留米市文化財調査報告書　第183集							
編著者名	白木　守・水原道範・近澤康治・小澤太郎							
編集機関	久留米市教育委員会　教育文化部　文化財保護課							
所在地	〒830-8520 久留米市城南町15-3　　TEL 0942-30-9225　　FAX 0942-30-9718 E-mail : bunkazai@city.kurume.fukuoka.jp							
発行年月日	2002（平成14）年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ　ー　ド		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査の原因
		市町村	遺跡番号					
市ノ上北屋敷遺跡 第5次調査	久留米市合川町 字北屋敷	40203	030110	33° 19' 00"	130° 32' 10"	2000.6.26 ～2000.9.6	519㎡	専用・共同 住宅建設
上野遺跡 第2次調査	久留米市安武町 安武本字上野	40203	—	33° 17' 49"	130° 29' 26"	2000.11.6 ～2000.11.24	120㎡	専用住宅建設
念仏塚遺跡 第4次調査	久留米市安武町 安武本字念仏塚	40203	—	33° 17' 25"	130° 29' 15"	2001.1.10 ～2001.1.19	60㎡	専用住宅建設
西小路遺跡 第8次調査	久留米市東合川町 字西小路	40203	030130	33° 18' 52"	130° 32' 56"	2001.1.30 ～2001.2.10	28㎡	進入路造成
山ノ内遺跡 第1次調査	久留米市津福本町 字北山ノ内	40203	—	33° 17' 53"	130° 30' 08"	2001.9.3 ～2001.9.21	473㎡	保育園改築
白川遺跡 第1次調査	久留米市国分町 字下尾	40203	—	33° 18' 26"	130° 32' 32"	2001.10.1 ～2001.10.5	47㎡	専用住宅建設
庄島侍屋敷遺跡 第6次調査	久留米市庄島町	40203	—	33° 18' 41"	130° 30' 31"	2001.10.10 ～2001.10.26	64㎡	専用住宅建設

報告書抄録(2)

所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
市ノ上北屋敷遺跡 第5次調査	集落跡 集落跡	縄文 弥生	— 竪穴住居 5軒 土坑 13基 土壇墓 3基	縄文土器、石器 弥生土器、石器、投弾、 不明土製品、管玉	弥生時代前期末～中期初頭の 遺構・遺物を確認。 江戸時代の遺構は有馬藩別 邸に伴うものと考えられる。
	集落跡 屋敷跡	中世 江戸	— 溝 6条 井戸 1基 近世墓 6基	白磁、青磁、瓦器 近世陶磁器、軒丸瓦、土 師器	
上野遺跡 第2次調査	集落跡 —	弥生 不明	竪穴住居 3軒 土坑 3基 樹木倒壊痕 3基	弥生土器、石器	弥生後期の集落の一角を占 める。
念仏塚遺跡 第4次調査	集落跡 墓地	平安 江戸	土坑 1基 近世墓 1基	須恵器、土師器、平瓦、 鉄鏃 近世陶磁器	9世紀後半の遺構・遺物を 確認。
西小路遺跡 第8次調査	散布地 集落跡	縄文 室町	— 溝 1条	縄文土器、石器 土師器、須恵器、瓦質土 器、輸入陶磁器	中世の屋敷を取り囲むと考 えられるV字溝を検出。
	墓地 集落跡	江戸 近代	近世墓 1基 溝 1条 土坑 2基	土師器、陶磁器、鉄釘	
	—	不明	土坑 1基		
山ノ内遺跡 第1次調査	狩り場 集落跡 集落跡	縄文 古墳 平安	落とし穴 1基 溝 1条 竪穴住居 2軒 掘立柱建物 1棟 溝 1条	縄文土器 土師器、須恵器 土師器、須恵器	台地の北西端部に立地す る、縄文～室町時代の複合 遺跡。
	集落跡 —	室町 不明	溝 1条 土坑 2基	土師器、瓦質土器、天目	
白川遺跡 第1次調査	集落跡	平安	ピット	弥生土器、須恵器、土師 器、瓦	筑後国分寺跡の南東に位置 し、「延喜」銘文字瓦も出 土。
	集落跡	近代	沼状遺構 1基		
庄島侍屋敷遺跡 第6次調査	武家屋敷	江戸	土坑 3基	近世陶磁器、瓦、土師器、 煙管、銭貨	概要報告

平成13年度 久留米市内遺跡群

久留米市文化財調査報告書 第183集

平成14年3月31日

発行 久留米市教育委員会

編集 教育文化部 文化財保護課

印刷 永松印刷

久留米市中央町20-22